平　尾　山　古　墳　群

—太平寺山手線建設に伴う　その３—

１９８８年度

１９９０年３月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市は大和川と石川が合流する大阪平野の南東部に位置し、市域のおよそ３分の２が山地や丘陵で占められております。都心からわずか20kmの距離にしては、山や川などの自然環境に恵まれ、府下でも有数の緑の豊かな町であります。

ここ柏原市では人々が生活を始めたその足跡は、旧石器時代からみられ稲作が伝来した弥生時代にはすでに人々は定住しており、豊かな風土に恵まれた当市は河内文化発祥の地でもあり、奈良の玄関口として栄えたのであります。

本市文化財行政も今日のように変化の激しい時代に対応し、遺跡調査によって文化財の保存及び遺跡の公有化を図ってまいりました。

その保存、保護の一環として高井田横穴群一帯を、３ヶ年計画で史跡高井田横穴公園として平成元年度より実施する事になり、文化財保護の理念を一歩全うできたと信じているものであります。

また本年度も市内各所の遺跡発掘調査を実施し、数多くの成果を得て本書発掘調査報告書を作成したものであり、今後地域文化の礎石として役立つものと確信し、より一層文化財保護にご援助、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成２年３月31日

柏原市教育委員会

教育長　庖　刀　和　秀

例　　言

1．本書は、柏原市教育委員会が昭和63年度に実施した太平寺山手線農道の新設公共事業に伴う事前の緊急発掘調査概要である。

2．発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係　北野　重を担当者として昭和63年６月７日から同年10月31日まで実施した。

3．発掘調査及び本書作製にあたって下記の方に御指導、御助言を賜りました。
大阪府教育委員会文化財保護課　芸術文化係長　吉井　博　橿原考古学研究所　東　潮　大阪府埋蔵文化財協会　松村隆文、大阪府文化財センター　岡本健一

4．調査協力者は、次の方々です。

松井隆彦	竹下　賢	空山　茂	山田寛顕	奥川滋敏
桑野一幸	安村俊史	寺川　款	津田美智子	伊藤芳匡
稲岡利彦	岡田嗣生	田中國雄	近藤孝雄	尾野知永子
南ゆう子	寺尾正美	青木久美子	乾　優世	小西千賀恵
奥野　清	谷口鉄治	井上岩次郎	乃一敏恵	横関勢津子
吉居曻子				

5．本書の執筆は、北野が主に遺物の一部を津田が担当した。

6．本書で使用した標高と方位は、特に注記のないかぎりT.P.磁北である。

7．本調査に際して、写真、実測図を記録として残すと共に、カラースライドを作製した。広く利用されることを願うものである。

7・8号墳

中・近世墓

目　　次

第１章　調査に至る経過…… 1
第２章　位置と環境…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 3
第３章　調査…… 6
　第１節　調査の概要…… 6
　第２節　遺構…… 9
　第３節　遺物…… 28
第４章　まとめ…… 51

挿　図　目　次

図－１　周辺の遺跡…… 2
図－２　調査区位置図（太平寺古墳群）…… 5
図－３　調査区全体図…… 7
図－４　上層図…… 7
図－５　２区下層平面図…… 8
図－６　３区平面図…… 9
図－７　６号墳…… 10
図－８　６号墳遺物出土状況…… 11
図－９　６号墳立割図…… 11
図－10　７号墳…… 12
図－11　羽釜棺１…… 13
図－12　８号墳…… 14
図－13　８号墳遺物出土状況…… 15
図－14　９号墳…… 16
図－15　９号墳遺物出土状況…… 17
図－16　10号墳（上）、11号墳（下）…… 18
図－17　12号墳、土坑墓１・土器棺２、３、４…… 19
図　18　１区古墓１～10（上層・下層）…… 22

図－19　２区古墓11～33号（上層・中層・下層）…… 23
図－20　古墓断面図（１～５、９～18号）…… 25
図－21　古墓断面図（15、17、32～34号）・火葬土坑…… 26
図－22　笠塔婆出土状況…… 27
図－23　古墳出土遺物（須恵器）…… 29
図－24　古墳等出土遺物（土師器）…… 30
図－25　６号墳出土鉄釘…… 31
図－26　８号墳出土鉄釘（第１号棺）…… 33
図－27　８号墳出土鉄釘（第２号棺）…… 34
図－28　９号墳出土鉄釘…… 35
図－29　金属製品…… 36
図－30　古墳出土遺物（土師器）…… 37
図－31　古墓出土遺物（すり鉢）…… 39
図－32　古墓９　出土すり鉢…… 40
図－33　古墓出土遺物（瓦）…… 41
図－34　古墓32号出土鉄釘…… 42
図－35　一石経（その１）…… 44
図－36　一石経（その２）…… 45
図－37　五輪塔　その１…… 46
図－38　五輪塔　その２…… 47
図－39　五輪塔　その３…… 48
図－40　五輪塔　その４…… 49
図－41　笠塔婆…… 50
図－42　木棺の模式図（上１号棺・下２号棺）…… 52
図－43　東条墓地五輪塔（吉井博氏実測図）…… 54

表　目　次

表１　６号墳出土鉄釘…… 32
表２　８号墳第１号棺出土鉄釘…… 32
表３　８号墳第２号棺出土鉄釘…… 35
表４　９号墳出土鉄釘…… 36

図 版 目 次

図版 1	6 号墳	6 号墳	裏込め土層
図版 2	6 号墳	玄室敷石	羨道敷石
図版 3	6 号墳	敷石除去後	花崗岩整形と掘方
図版 4	8 号墳	玄室掘削前	玄室掘削後
図版 5	8 号墳	遺物取り上げ風景	遺物出土状況
図版 6	9 号墳	全景	完掘後
図版 7	9 号墳	鉄釘出土状況	合口供献土器
図版 8	9 号墳	玄室埋没土層	玄室埋没土層
図版 9	11号墳	全景	遺物出土状況
図版10	12号墳	全景	土坑墓 1
図版11	古墓 2 ・ 4	古墓 2	古墓 4
図版12	古墓 9 ・18	古墓 9	古墓18
図版13	古墓検出状況	2 区上層	1 区下層
図版14	古墓検出状況	2 区上層	2 区上層
図版15	古墓検出状況	2 区中層	古墓14・18
図版16	古墓検出状況	2 区下層	古墓31
図版17	遺物出土状況	笠塔婆	五輪塔
図版18	古墓26・火葬土坑	古墓26	火葬土坑
図版19	出土遺物その 1		
図版20	出土遺物その 2		
図版21	出土遺物その 3		
図版22	出土遺物その 4		
図版23	出土遺物その 5		
図版24	出土遺物その 6	8 号墳 1 号棺鉄釘	一字一石経
図版25	出土遺物その 7		
図版26	出土遺物その 8		

第１章　調査に至る経過

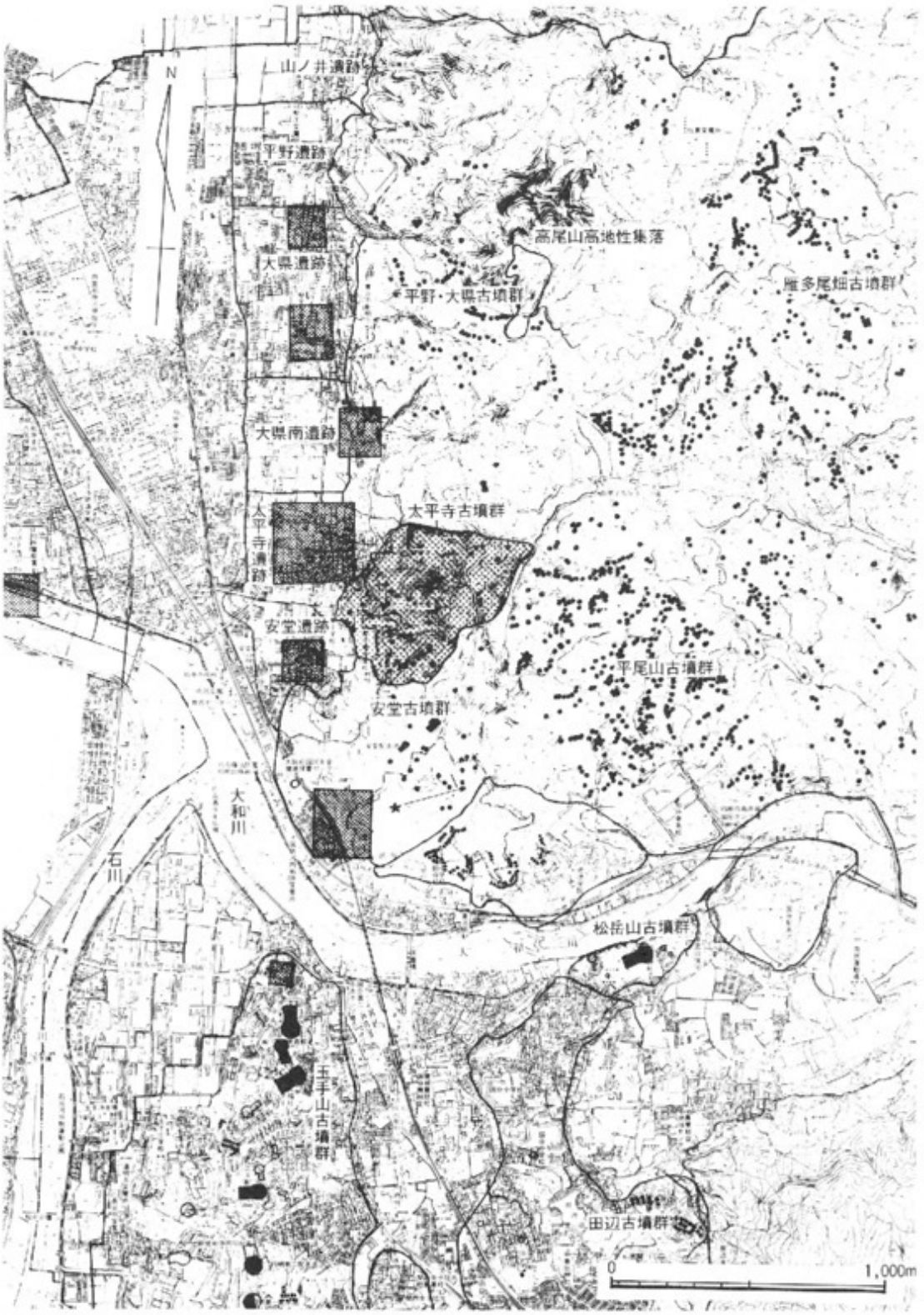
柏原市建設部産業課は、太平寺古墳群に含まれる太平寺２丁目大字安堂において農業用道路を新設することを計画した。当地区の農業は、果樹園栽培が盛んな地域で主に葡萄が作られている。縁辺に運搬用道路がなく、その生産した果樹の運搬が困難なため古くから新設道路を造る要請があった。また、柏原市水道局が、当地に近接して貯水池を持っているが老朽化しているのでこの施設を改築するために資材運搬用の道路が必要であった。

柏原市教育委員会は、当地域が、平尾山古墳群に含まれ、河内六大寺の智識寺、山下寺が近接していることから事前の発掘調査が必要であるため協議を実施した。また、計画実施にあたり、路線計画地に発掘調査によって重要な遺構が発見された場合、道路計画地が急峻な斜面であることや施工期間が長期に渡るため大幅な計画変更が困難となる理由から、選地するための分布調査を実施し対応することになった。当計画地の斜面上方で古墳[1)]の存在が確認されているが、この尾根筋の続きの場所で古墳が存在すると予想される場所は除外されているので現時点では当教委として適地との回答をした。昭和59年５月９日、産業課より埋蔵文化財発掘の通知書が提出された。道路建設に拘わる費用は、土地を所有者から提出してもらい、建設費用は、大阪府と柏原市が負担するものである。また、発掘調査に係る費用は柏原市が負担した。

４ヶ年計画として、各年度の予定区間を事前に発掘調査を実施した後、工事を行うこととした。第Ⅰ期は、谷筋部から小尾根にかけての場所で、７から８世紀にかけての鍛冶遺構を中心とした多くの成果を得た[2)]。第Ⅱ、Ⅲ期の調査[3)]は、智識寺の直ぐ東側の緩斜面地にあたり、多くの遺構と遺物が検出されることが予想されたが、遺構は後世の果樹園栽培等で攪乱が見られたことと谷筋部であることが確認されたのみであった。

第Ⅳ期は、本年度の成果として報告するとおり、中世から近世にかけての墳墓群と７基の古墳が確認された。古墳は、横穴式石室古墳１基と横穴古墳６基である。柏原市域内に横穴古墳が、高井田横穴群、安福寺横穴群、玉手山東横穴群の３群に確認されていたが、さらに１群が新発見されたことになった。この太平寺古墳群の横穴は、前３群の横穴群は砂岩質凝灰岩を岩質としているが、花崗岩質である。特異な形態の古墳であるので、産業課に連絡した後、昭和63年10月20日、記者発表を実施した。現地説明会の開催は、葡萄園を通って現地へ行かなければいけないことと、調査場所が狭小で急斜面であることから断念せざるをえなかった。横穴墳は、遺存状況の悪い10号墳以外は、現地保存している。

注１「河内太平寺古墳群」河内考古刊行会　1979
「太平寺古墳群」－太平寺５・６・７号墳の調査－大阪府教育委員会　1980
注２「平尾山古墳群」－太平寺山手線建設に伴う　その１－柏原市文化財概報　1988－３
注３「柏原市所在遺跡発掘調査概報－1986年度公共事業に伴う－柏原市文化財概報　1987　３


N
山ノ井遺跡
平野遺跡
大県遺跡
高尾山高地性集落
平野・大県古墳群
堆多尾畑古墳群
大県南遺跡
太平寺古墳群
太平寺遺跡
安堂遺跡
平尾山古墳群
安堂古墳群
大和川
石川
松岳山古墳群
玉手山古墳群
田辺古墳群
0
1,000m

図－1　周辺の遺跡

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

平尾山古墳群は、大阪府柏原市の生駒山地の丘陵上に所在する。柏原市は、大阪の東南部に位置し、広ぼう東西方向6.60㎞、南北方向6.63㎞、面積24.77㎡を測る小都市である。行政区画は、大阪府と奈良県の境に位置し、大阪府側では、北側に八尾市、西側及び南側には藤井寺市、羽曳野市が接し、奈良県側では、北側から三郷町、王子町、香芝町が接している。

生駒山地は、奈良との県境として南北方向に伸び大阪平野の後背地となっている。柏原市域の丘陵は、同山地の中でも標高が低いほうに含まれており、標高 235mの小松山を中心として幾本かの小支脈が西や南へ派生している。

柏原市内を大和川と石川の2大河川が流れている。大和川は、生駒山地の南端部を蛇行しながら西奔し、河内平野へ流れ出て、石川は、生駒山地の南側に続いている金剛山脈からの水を集めて北流し、市の中央部で大和川と合流している。古い大和川の流れは、この合流地点から北側へ向けて河内平野を貫流していた。

柏原市域内を生駒山地から小河川が流れ出て、河川によって分けられた丘陵が大小幾つか分割出来る。高井田横穴群の所在する丘陵の北側に流れ出る谷川は、北東方向に伸び、平尾山古墳群の所在する丘陵を大きく2分して、河内平野に接する西側丘陵と谷川によって対峙した東側丘陵とに隔てている。前者は、さらに山ノ井川、谷山渓、宮山渓、岩崎谷の小河川によってさらに小分割が出来る。また、これらの小河川は、丘陵麓の遺跡をも分ける役割を持っている。平尾山古墳群の中心は、主に生駒山地の丘陵上にあるが、丘陵麓のあたりまで古墳が存在する。当調査区は、丘陵麓の集落遺跡と古墳群との接点に位置し、時代によって集落と墓域の区画線が入り乱れる場所である。

第2節　歴史的環境

生駒山地の西麓部には、多くの集落遺跡が存在し、縄文時代から近世までの多くの遺構と遺物が検出されている。当地域周辺部の遺跡群を最近の調査例を加え若干の説明を加えたい。

旧石器時代の遺跡は、近年調査が増え船橋遺跡、玉手山遺跡、田辺遺跡の他に、国府型ナイフが出土した安堂遺跡[1]、有舌尖頭器が出土した大県南遺跡[2]が数えられる。大和川対岸には、国府遺跡、はざみ山遺跡等拠点的な遺跡が存在している。

縄文時代の遺跡は、生駒山地の谷山渓の扇状地状台地に拡がる大県遺跡を中心として集落遺跡が発見されている。早期に属する押型文土器[3]を始めとして、前期、中期、後期、晩期の遺構と遺物が多数検出されている[4]。周辺の遺跡として、生駒西麓部の大県遺跡の約2㎞北側に恩智

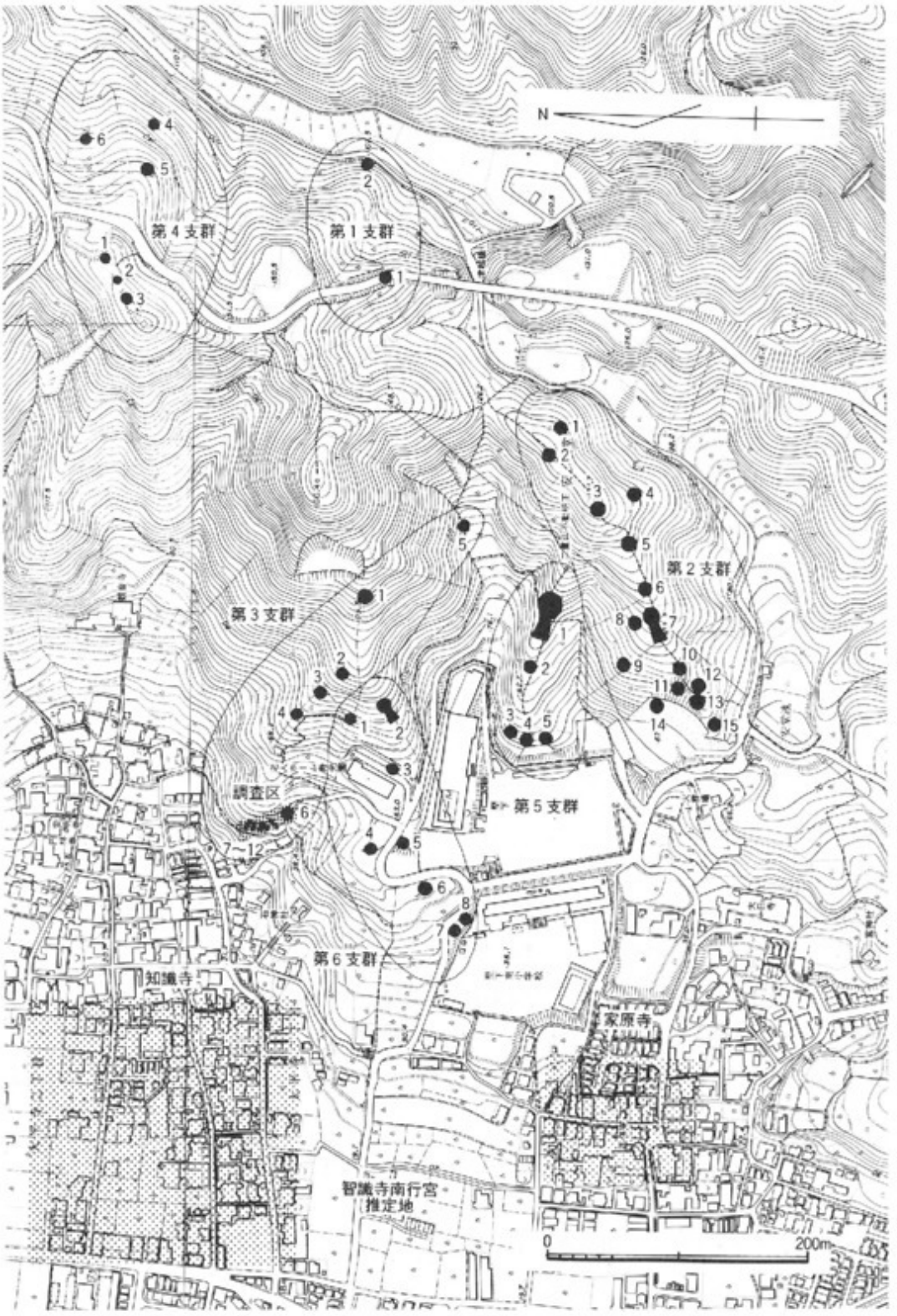
遺跡が見られ、大和川の対岸には国府遺跡、船橋遺跡、本郷遺跡の著名な大遺跡が連なっている。

弥生時代は、大県遺跡を中心として、北側から山ノ井、平野、大県、大県南、太平寺、安堂遺跡が母子村関係を持ち1つの共同体を形成していたと考えられる。また、大県遺跡を鳥瞰する東山丘陵上の高尾山（標高 250m）に弥生中期から後期にかけての高地性集落が存在し、大県鏡として有名な多紐細文鏡が出土している。遺跡深度が深いことや大規模開発がないことから遺跡の平面的考察が不十分な状況であったが近年、当時代の集落遺跡の発掘調査も急増して古環境復原が成されつつある。

古墳時代は、弥生時代に引き続き集落遺跡が継続する。しかし、古墳時代前期にあたる遺物と遺構の発見が少なく、中期以降に遺跡全体が活況を呈する。遺跡の性格は、特に鍛冶関係の遺物と遺構[5]が多く、大阪府下最大規模を誇り、鍛冶専門集団の居住が想定されている。鍛冶炉の検出や鉄滓、鞴羽口、砥石等の遺物が多数出土しており、鉄器生産過程や生産集団のあり方が問われるところである。東山一帯に拡がる平尾山古墳群は、総数1400基を数え、その被葬者の位置づけが古墳時代の社会構造の探求に大きな鍵を握っている。前、中期の古墳は、前方後円墳、円墳等が丘陵縁辺部のやや標高の低い尾根筋に造られ、後期の古墳は、丘陵辺部から主に丘陵内部まで広く拡散して造られる[6]。これらの古墳は、生駒西麓部の集落遺跡と対応する集団の古墳群と何らかの政治的背景を持った集団の古墳群とに分けることができる。今後、これらの古墳の立地、規模、内部主体、副葬品等から系統的な分類と検討が必要である。

飛鳥、奈良時代になると、当地域には密集して古代寺院が建立される。生駒西麓部には、日本書紀に記載された「知識・山下・大里・三宅・家原・鳥坂」の河内六寺が建ち並ぶ。近年これらの寺院の寺域内外の調査が実施され、寺院関連遺物や遺構が検出され、その位置、規模、時期等が明らかになりつつある。大県廃寺から大里寺、鳥坂寺跡から鳥坂寺と記載された墨書土器が出土し、寺院の比定地が考古学的に実証されている。市域には、この他に船橋廃寺、片山廃寺、原山廃寺、五十村廃寺、田辺廃寺、東条尾平廃寺、河内国分寺、河内国分尼寺等の飛鳥時代から奈良時代に至る寺院が多く存在する。この他にも、大県郡衙、知識寺南行宮、竹原井行宮、津積駅家等の遺跡も存在し、繁栄した時代の様子が垣間見られる。

注1「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報」　柏原市教育委員会　1983
注2「大県南遺跡Ⅰ　山下寺跡寺域の調査－柏原市教育委員会　1985
注3「大県、大県南遺跡」－下水道管渠埋設工事に伴う－柏原市教育委員会　1986
注4「大県、大県南遺跡」－下水道管渠埋設工事に伴う－柏原市教育委員会　1984
注5「大県遺跡Ⅰ－堅下小学校屋内運動場に伴う－柏原市教育委員会　1988
注6「平尾山古墳群分布調査概要」　大阪府教育委員会　1975



図－2　調査区位置図（太平寺古墳群）

第3章　調　　査

第1節　調査の概要

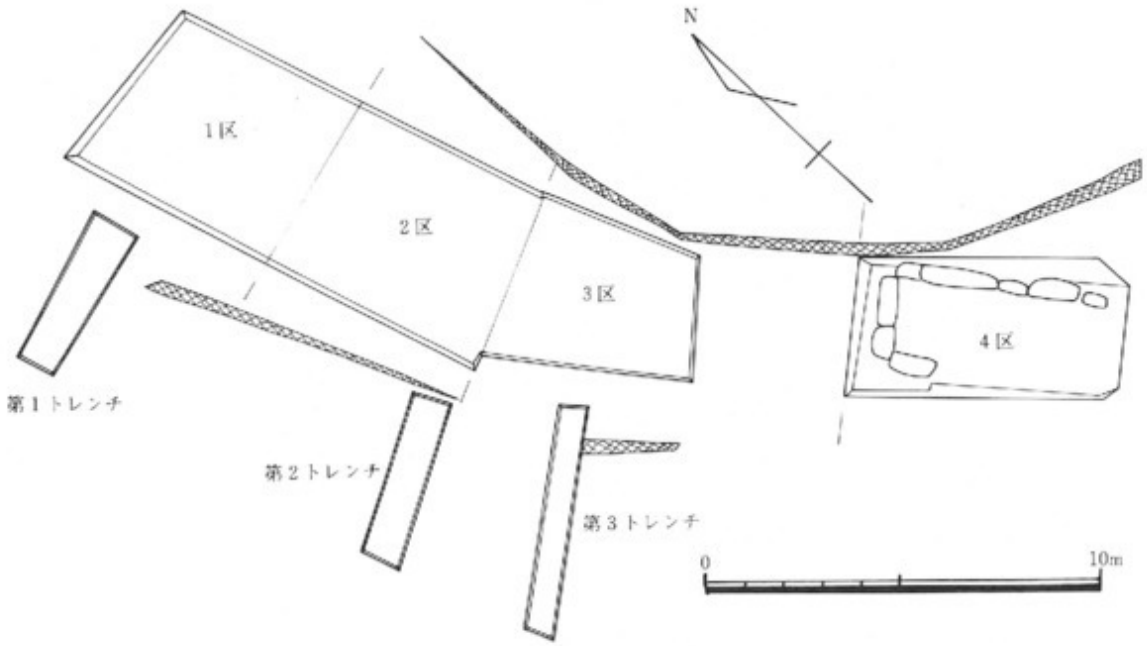
調査は、昭和63年6月7日から同年10月31日まで実施した。調査対象面積は、約400㎡である。調査区は、第1章の調査に至る経過で述べたように古墳が存在するような尾根を除外したので傾斜がきつい崖状になった場所が大部分となっている。現状は、雑木林と竹林、今は使用されていない植木畑地等である。斜面の上下方は、果樹園の畑地である。予定地は、道路建設幅員4mと両側擁壁部分各2m前後であり、延長約 100mにわたる。前年度の調査区から尾根の先端部分までは、かなり急斜面であり、以前に崖崩れが発生した場所である等の事から尾根の北側斜面で古墳等の遺跡が発見される可能性は少ないと判断し調査対象除外地とした。また、尾根の南側部分は、下方からの道路と接合するためほとんどが削平されている。

よって、実際に調査の可能な場所は、尾根の先端の長さ約25mの部分だけである。調査の方法は、4箇所に区分してそれぞれ掘削した土砂を仮置きしながら実施せざるを得なく反転しながら実施した。北側から1～4区とした。さらに、急斜面地は試掘のトレンチをいれた。

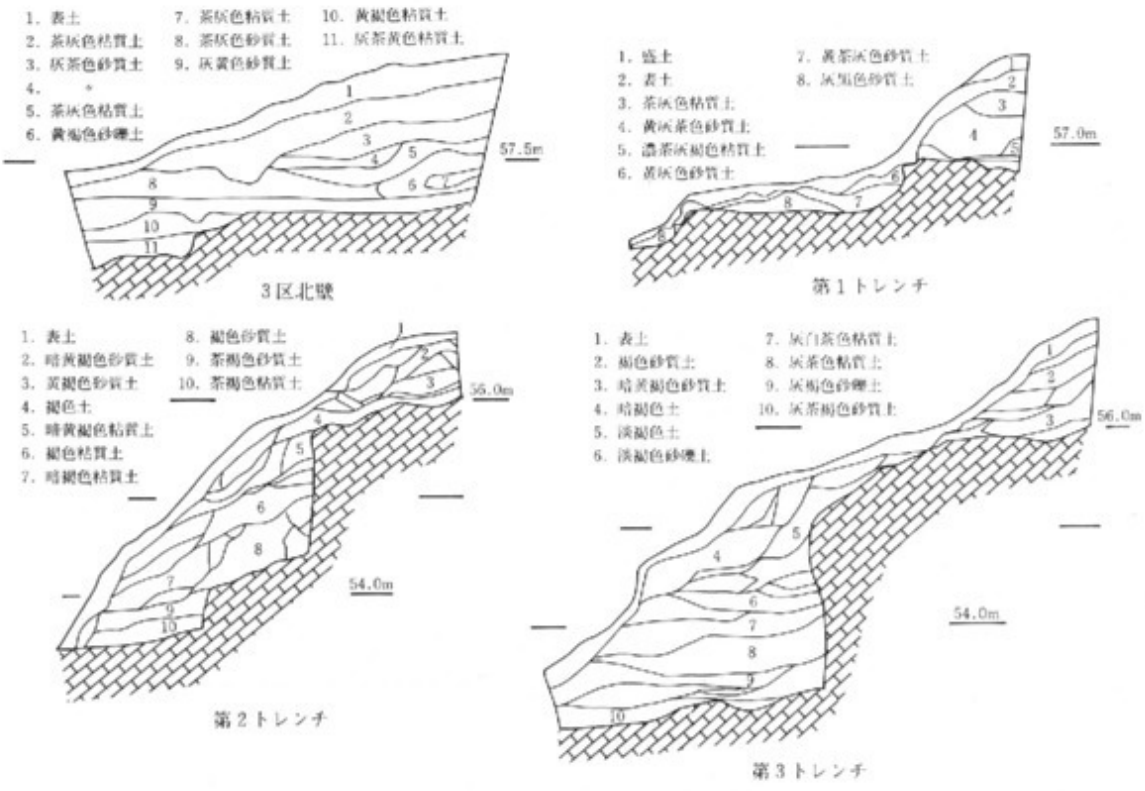
調査の結果、2時期の遺構面を検出した。第1遺構面は、中世から近世にかけての古墓が1～3区で発見された。この古墓は、単なる土坑墓と蔵骨器をもつものがあり、凝灰岩製の五輪塔や一字一石経の小石等が周辺から多数見られた。また、火葬に使用されたと考えられる土坑も検出された。第2遺構面は、この古墓の下層から横穴古墳6基と横穴式石室墳1基、土坑墓1基、土器棺3基が発見された。

基本土層は、第1層表土が10～30cm見られた。植木の掘り返しや竹林によって攪乱された土層である。この上層から古墓の遺物が多数出土しているので古墓の上層部分は削平されている。第2層は、中世の遺物包含層である。25～30cmの厚さがあり、この層内に古墓の重なりがみられた。古墓の掘形が深いものは地山の花崗岩を掘窪めている。遺物は、古墓に関連したものと埴輪の破片が出土した。恐らく丘陵尾根の上方に埴輪を持つ古墳が存在しているのであろう。第3層は、古墳がない場所では花崗岩の地山となる。3層以下は古墳時代の横穴古墳に関連する埋土である。

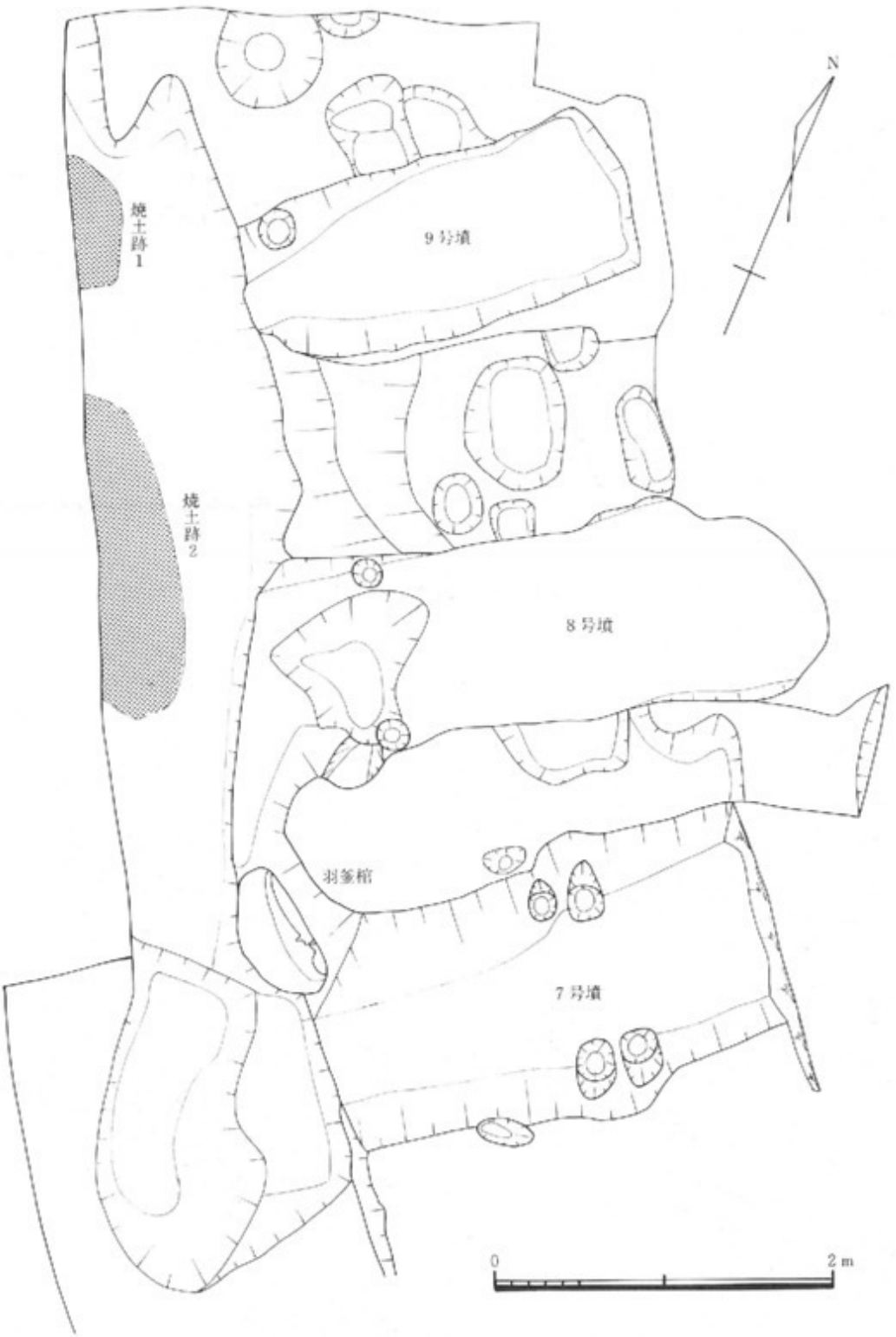
急斜面の試掘トレンチの断面は、図－4に示した如く鋭角に落ちた法面部分が確認された。人為的に掘り下げた様子が見られ、その東側埋土は水平に近い堆積をしており畑地の拡張か道路の取り付けかもしれない。出土遺物は、上層から中世にかけての古墓関連の遺物が出土し、下層はほとんど遺物を含まないが少量の古墳時代の遺物が出土した。法面下の平坦地となった部分は、北側へ緩く上っており、その南側は小道状に下っていることから古墓に参る墓道の可能性が高い。



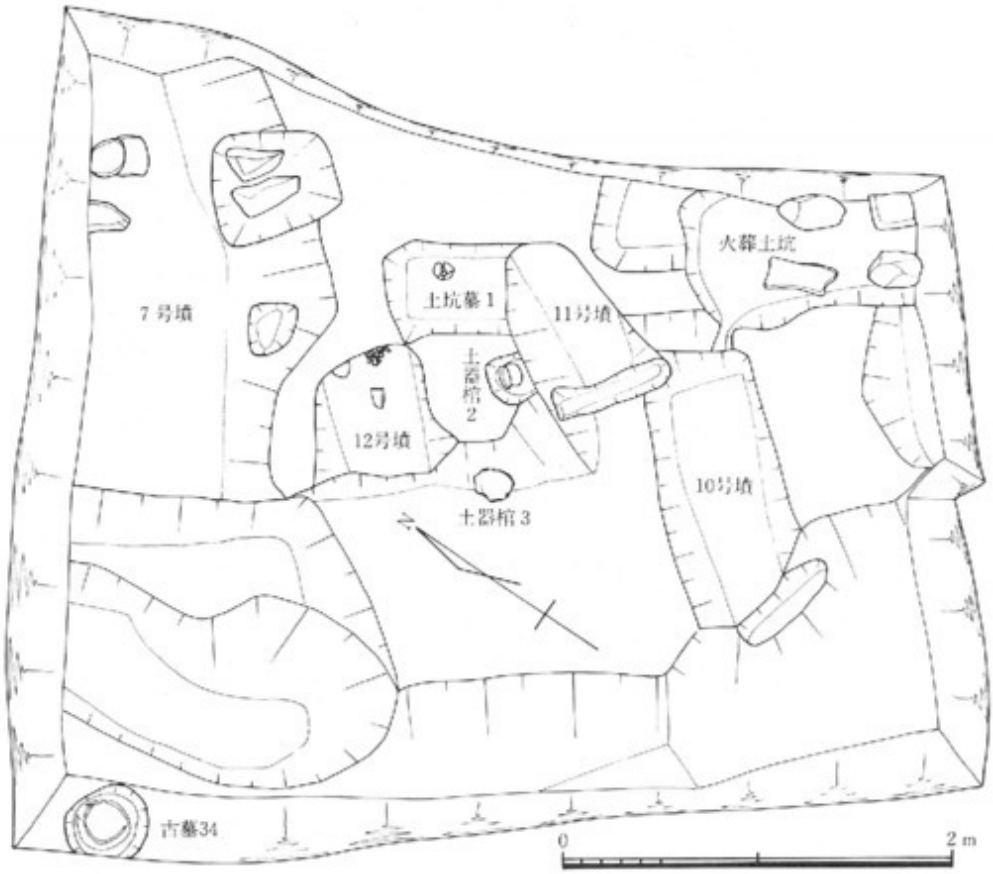
図－3　調査区全体図



図－4　土層図



図－5　2区下層平面図



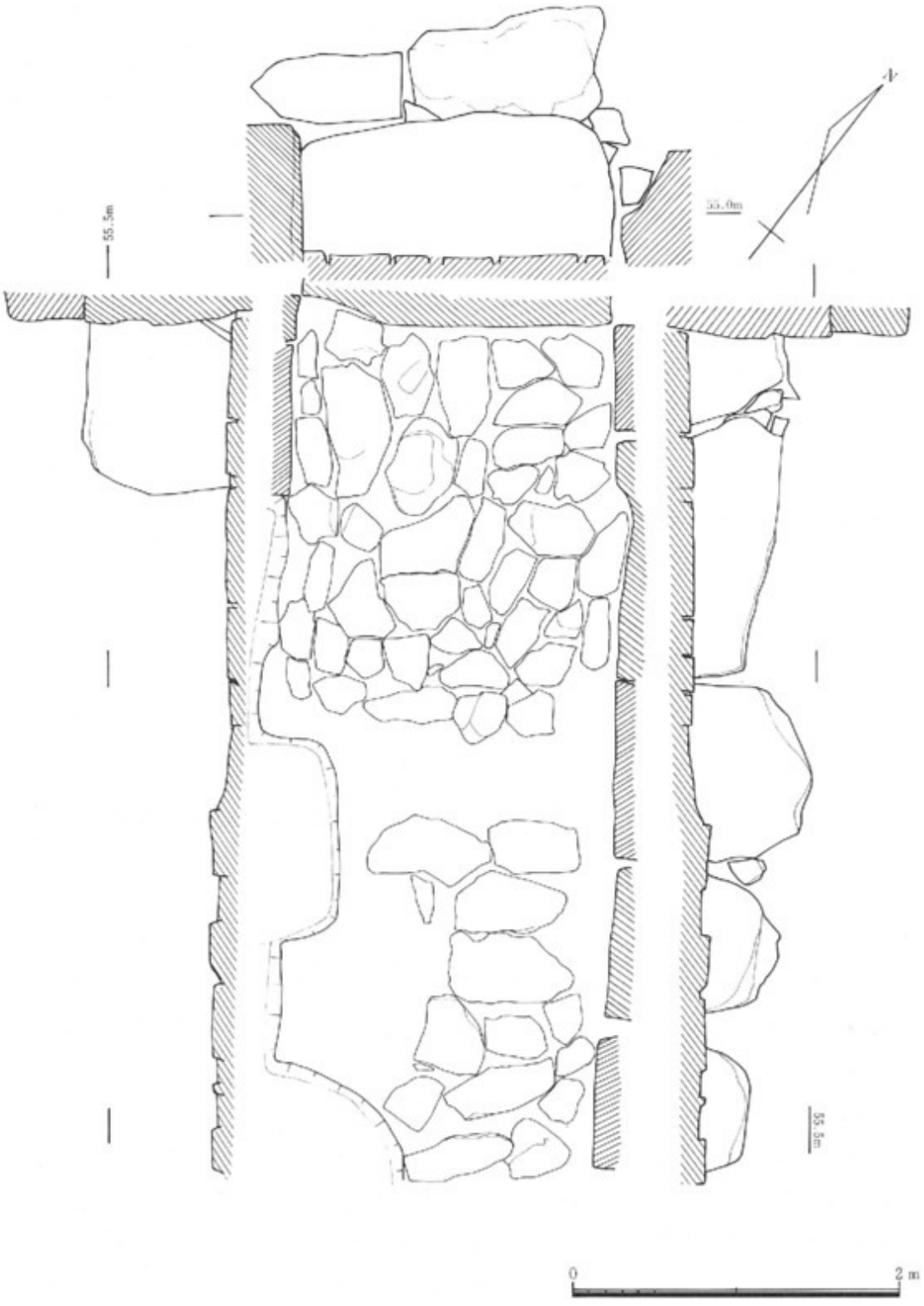
図－6　3区平面図

第2節　遺構

第1遺構面から古墓34基、火葬土坑1基、墓道状遺構1を検出した。第2遺構面から横穴古墳6基、横穴式石室古墳1基、土坑墓1基、土器棺3基を検出した。各調査区毎に概要を述べ、遺構毎に説明を加えていきたい。

第1区

一番北側の調査区に位置し、東西 4.7m、南北 5.7mの規模のトレンチで掘削した。表土約20cm掘り下げたところで中世から近世の古墓を8基検出した。それぞれ凝灰岩と花崗岩を使用した墓である。上部はかなり移動している。東側は直ぐ地山である。北東方向から1～5号とし、北西方向から6～8号とした。それぞれ周辺部に径5cm前後の扁平な小石が多数見られた。これらの古墓を取り除いた後、古墓2、4の下層遺構と新たに古墓9、10を検出した。当調査区の下層は工事に影響をうけないと判断されたのでこの遺構面で調査を留めた。



図－7　6号墳

図－8　6号墳遺物出土状況

である。

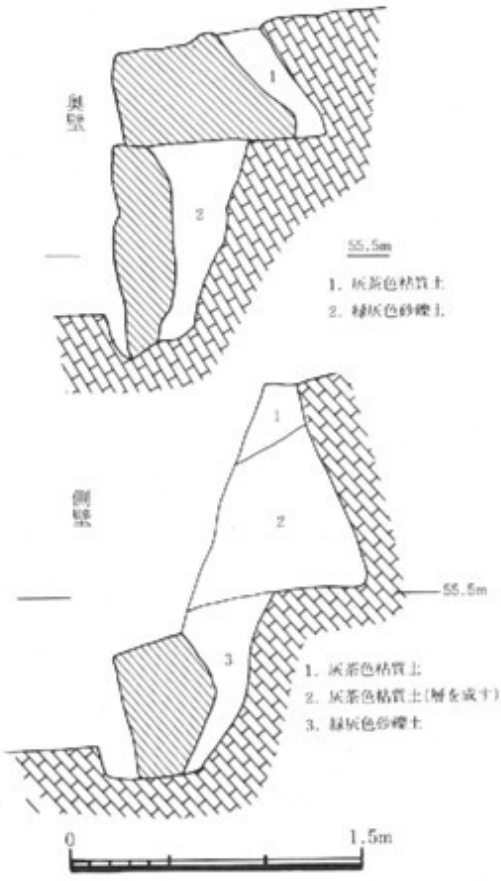
第3区

規模は東西方向4.5m、南北方向5.0mのトレンチである。この調査区は、第1遺構面から火葬土坑1基と古墓34号を検出した。火葬土坑は、トレンチの南東隅で検出した。直ぐ東側は石垣があるため平面全体を知ることができなかった。古墓34号は、トレンチ北西隅から表土除去後に検出した。第2遺構面は、

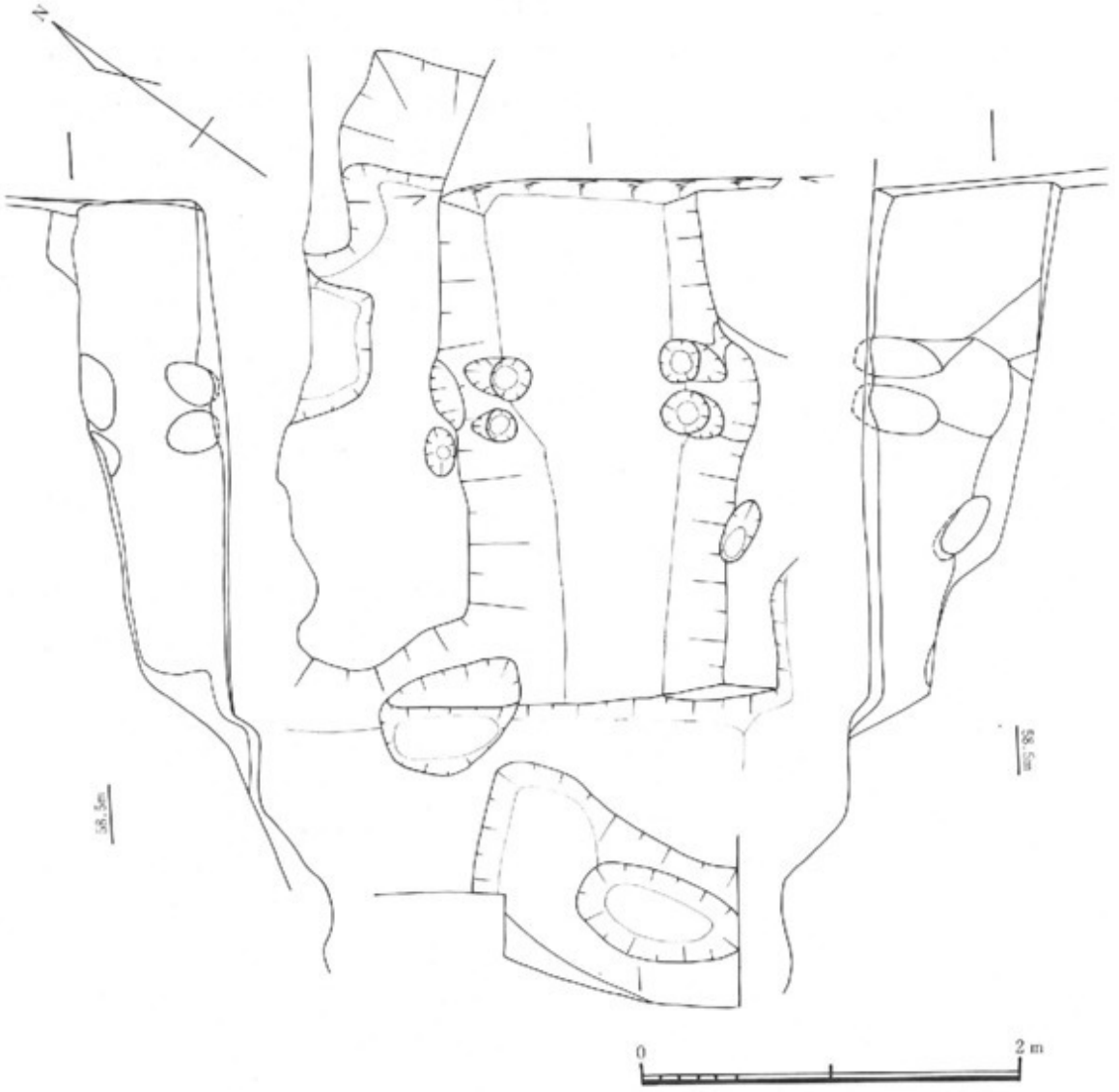
第2区

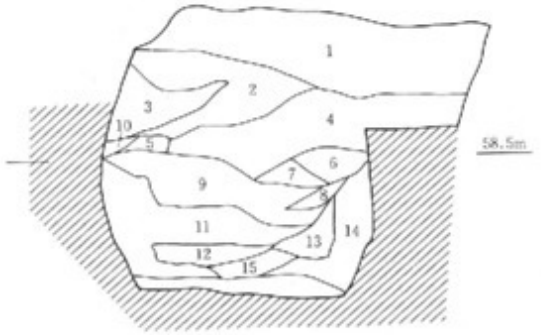
第1区の直ぐ南側で、東西方向4.7m、南北方向5.5mの規模のトレンチである。表土除去後に第1区と同様の古墓11～17号を検出した。また、この古墓に向かった墓道が南側から扁平な小石を敷いている。流れ出たものかは不明であるが等高線に添って真直ぐ伸びている。さらに掘り下げると古墓18～29号を検出した。墓道は、南北方向に真直ぐ伸びている。なお、掘り下げると古墓30～33号を検出した。西側下方に石列を検出した。石列の上下層に古墓に伴う遺構はなく、墓道の一部かもしれない。

第2遺構面は、3基の横穴古墳と1基の土器棺墓を検出した。横穴古墳は、南側から7～9号墳



図－9　6号墳立割図





1. 表土
2. 茶灰色粘質土
3. 緑灰色砂質土
4. 灰色粘質土（3層も含む）
5. 緑灰色砂礫土
6. 黄灰色砂礫土
7. 茶灰色砂質土
8. 緑灰色砂礫土
9. 薄茶灰褐色砂質土
10. 灰褐色砂質土
11. 黄茶褐色砂礫土
12. 薄茶褐色粘質土
13. 薄茶褐色粘質土
14. 灰白色砂礫土
15. 緑灰色砂質土
16. 灰黄褐色砂質土

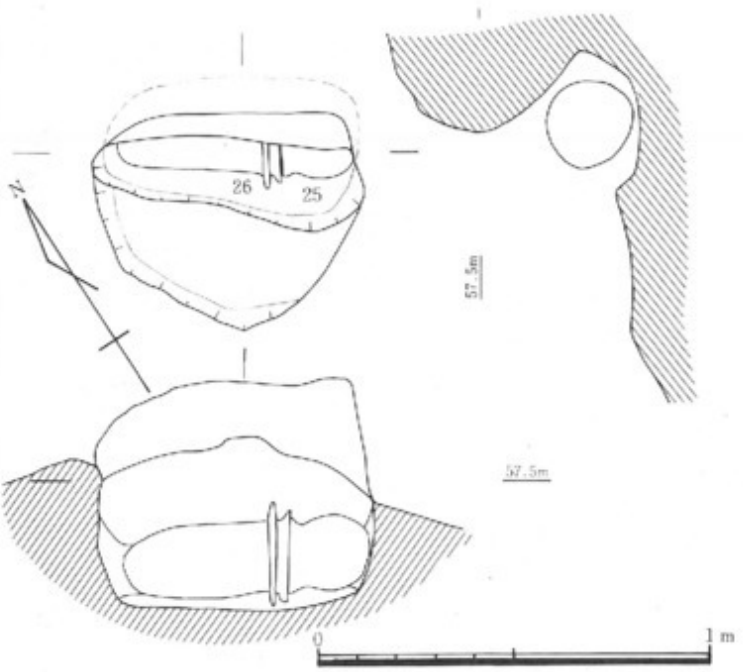
図—10　7号墳

横穴古墳３基と土坑墓１基、土器棺墓３基を検出した。横穴古墳は、南側から10～12号墳とした。

第４区

トレンチの規模は、東西方向3.6m、南北方向7.0mである。第２遺構面から検出した横穴式古墳は、後世の土地改変で大きく削平されている。

以上各トレンチの概略を述べてきたが遺構毎に説明を加えていきたい。



図－11　羽釜棺１

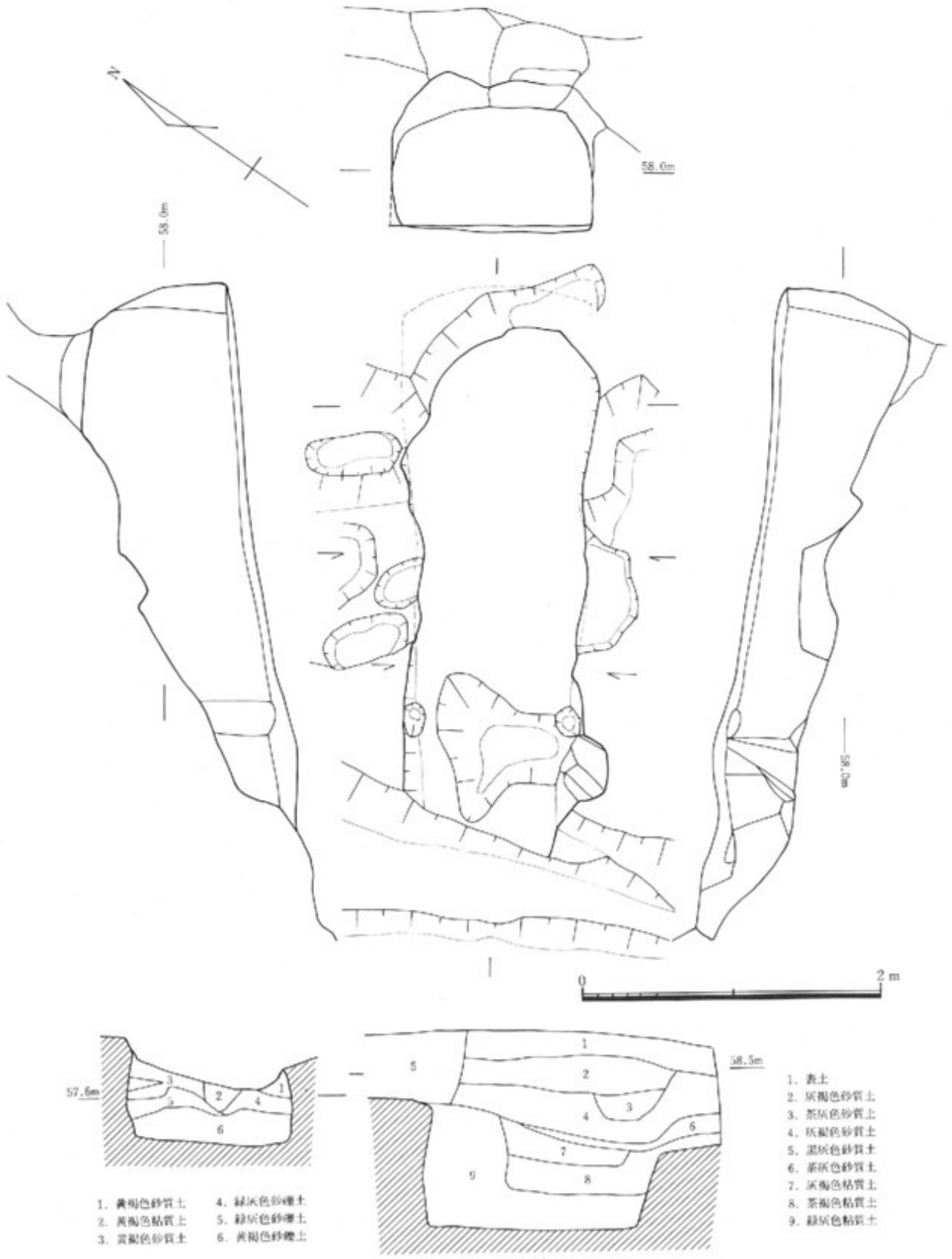
６号墳

４区第２遺構面から検出した古墳である。内部主体は、右片袖式の横穴式石室である。奥壁２段と左側側壁１段と右側側壁の奥壁に接する１石のみ遺存しており、天井石や他の石は取り去られている。周溝は、調査区内では削平されて不明である。周囲の状況から、墳丘規模は、10m未満と考えられる。

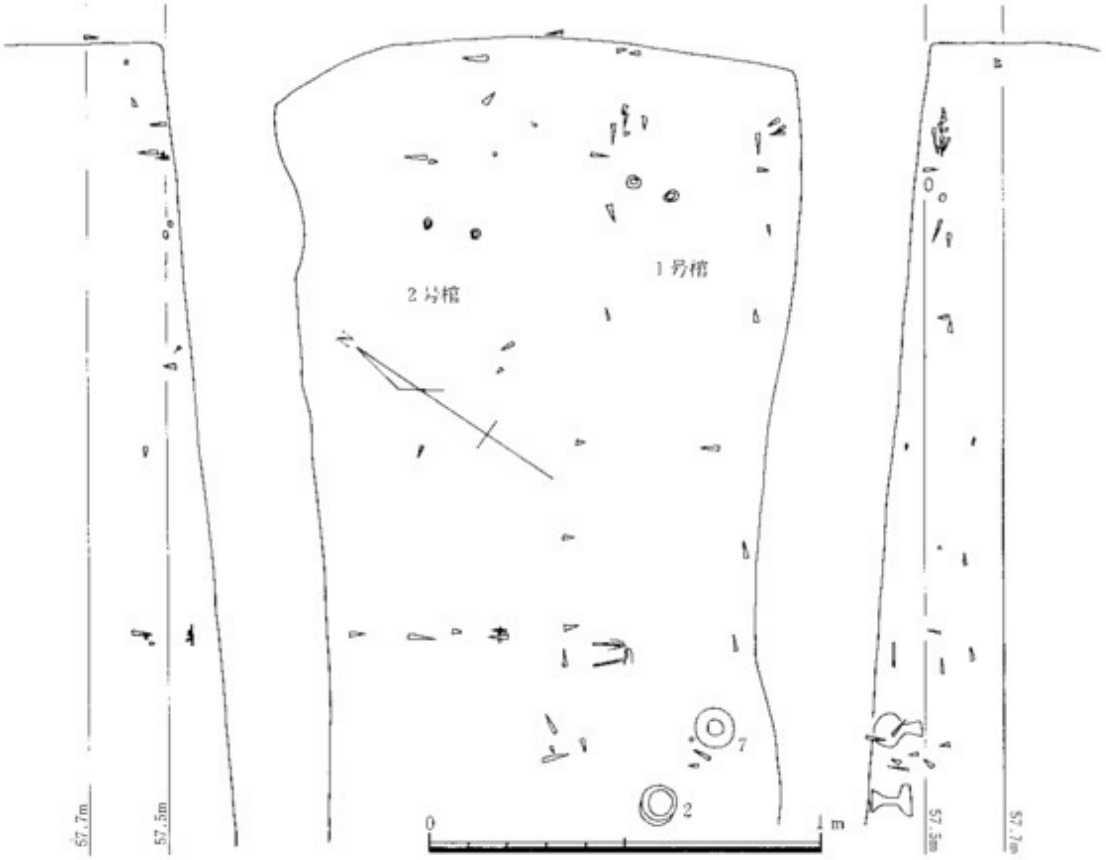
玄室規模は、長さ250cm、幅195cmである。羨道は、幅170cm、長さ270cm以上である。主軸の開口方位は、S－11°－Wである。床面は、玄室全体に扁平に切り出した一辺20～80cmの花崗岩を奥から順番に敷並べている。敷石面は、標高約54.7mである。石室内からは、須恵器高杯（１）、長頸壺（３、４、５）、器台（６）と土師器鉢（11）、黒色土器椀（９）、瓦器椀（10）、鉄釘５本、金環１個が出土した。それぞれ現位置を保つ遺物はなく中世の時期に攪乱されていると考えられる。羨道部は、玄室の敷石南端部から約50cmだけ空間を開けその南側は玄室同様の敷石を行っている。玄室の敷石面より約10cm高く敷かれている。主体部は、木棺直葬であろう。

奥壁の底石は、幅190cm、高さ90cmの１石である。２段目は、高さ40～55cmの２石を使用している。側壁は、80～160cm幅の石を使用して石室内に平坦面を向けている。

古墳の構築は、花崗岩質の地山（割合軟らかな岩質である）を成形する。さらに、奥石と側石を置く場所を少し掘り下げる。左側石の置き方について述べるならば、底石を置いた時地山との裏側が20～30cm空いているが、その裏込めの土砂を底石の上面より下に削り落している。底石の裏込め土は、すべて地山の花崗岩質である。２段目からは花崗岩質土と灰茶色粘質土を交互に入れ粗い層を成すように築き固めている。


N
58.0m
58.0m
58.0m
0
2 m
57.6m
1. 黄褐色砂質土
2. 黄褐色粘質土
3. 黄褐色砂質土
4. 緑灰色砂礫土
5. 緑灰色砂礫土
6. 黄褐色砂礫土
58.5m
1. 表土
2. 灰褐色砂質土
3. 茶灰色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 黒灰色砂質土
6. 茶灰色砂質土
7. 灰褐色粘質土
8. 茶褐色粘質土
9. 緑灰色粘質土

図－12　8号墳

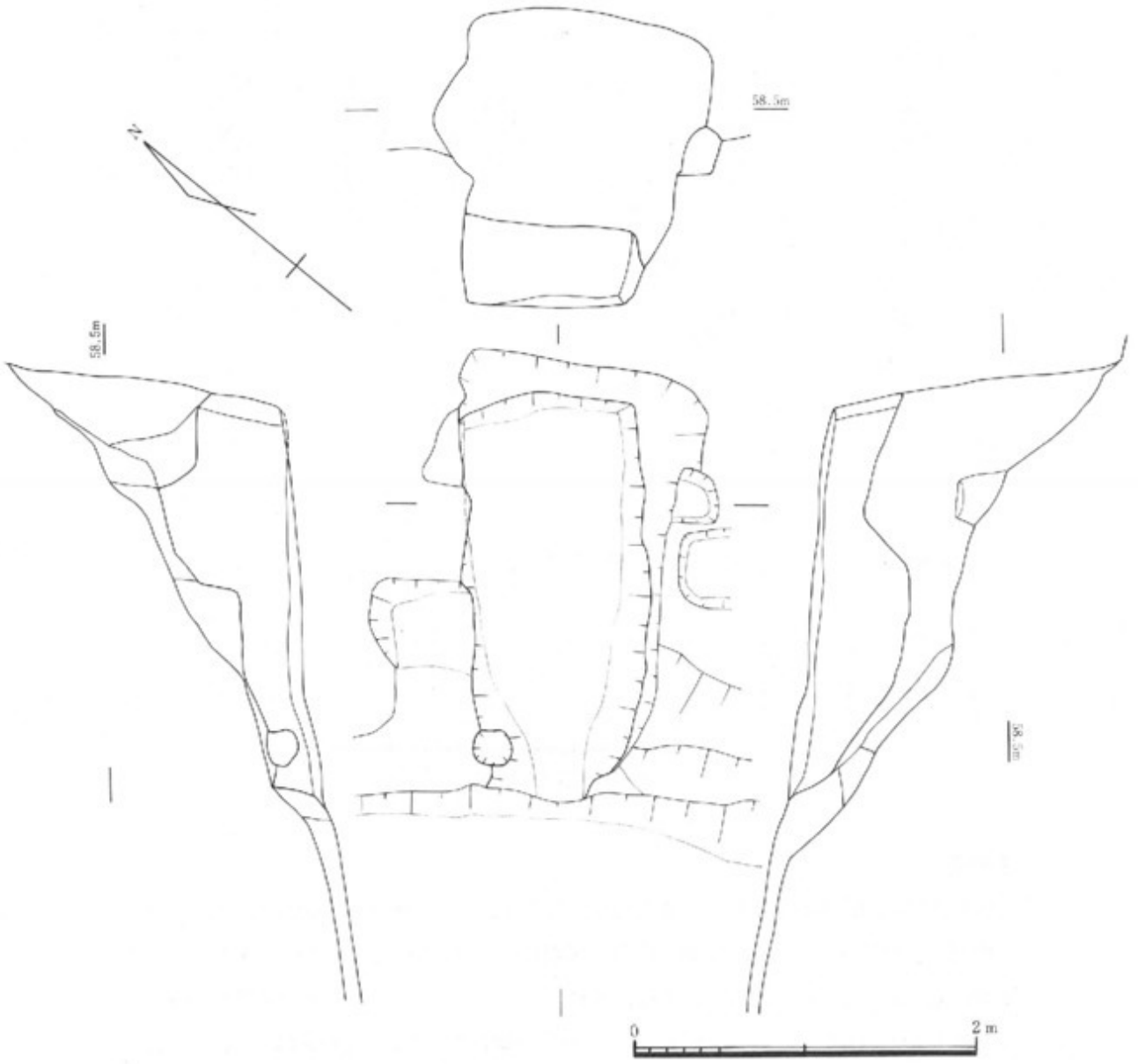


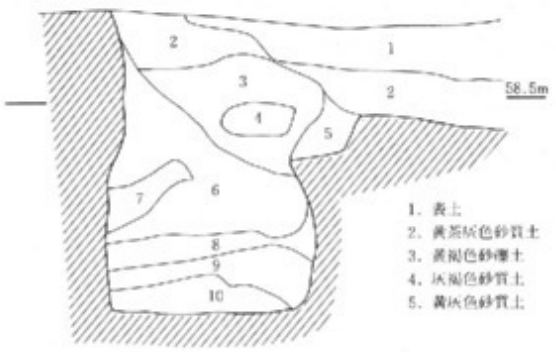
図…13　8号墳遺物出土状況

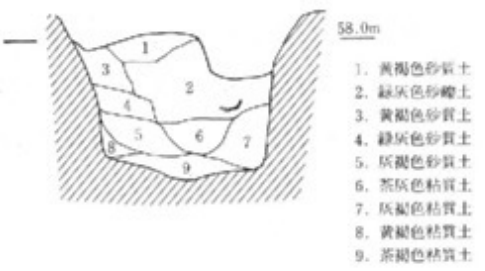
7号墳

2区と3区の間に検出した横穴古墳である。玄室は、長さ88cm以上、幅96cm、高さ85cmである。標高は、約57.8mである。主軸方向は、尾根の中心部に向かいN－67°－Wである。さらに東側に玄室が伸びているが石垣があり、調査区外であるためこの部分までの確認に留めた。玄室と羨道の境に閉塞するための施設と考えられる両側各2穴のピットが検出された。このピットの側壁上方から25～35cm大の石を並べた土坑が検出され関連付けられる。羨道は、長さ180cm、幅70cmである。遺物は、出土しなかった。埋土は、斜面上方の花崗岩を主体とする土砂が堆積していた。また、天井の落ちと考えられる花崗岩の塊も見られた。

この古墳の時期は、限定することが出来ないが羨道への右入口部に羽釜と瓶を合せ口にした棺が出土しており、この遺物より古相であろう。


58.5m
58.5m
58.5m
0
2 m


58.5m
1. 表土
2. 黄茶灰色砂質土
3. 黄褐色砂礫土
4. 灰褐色砂質土
5. 黄灰色砂質土
6. 白灰色砂礫土
7. 赤灰色砂礫土
8. 緑灰色砂礫土
9. 黄灰色砂礫土
10. 緑褐色砂礫土


58.0m
1. 黄褐色砂質土
2. 緑灰色砂礫土
3. 黄褐色砂質土
4. 緑灰色砂質土
5. 灰褐色砂質土
6. 茶灰色粘質土
7. 灰褐色粘質土
8. 黄褐色粘質土
9. 茶褐色粘質土

図－14　9号墳

羽釜棺1

7号墳の羨道北側に地山の花岡岩を横穴状に掘り込んだ羽釜棺である。墓坑は、南北方向1.4m、東西方向1.2mの楕円形である。北側に羽釜（26）と南側に土師器瓶（25）を合口に納めている。現状では約半分横穴内に入っている。床面の標高は、57.1mである。各土器内には副葬された遺物がなかった。主軸方向は、N−11°−Wである。7号墳が構築された後に埋葬されたものであろう。このような土器棺は、集落遺跡では大県遺跡86−7次調査[1]で羽釜と土師器長胴瓶が一対で検出している。古墳群内では、太平寺古墳群第5支群の2～5号墳の周辺部から両方羽釜を合口にした土器棺が2基[2]検出されている。1基は、丘陵尾根上に、他の1基は、丘陵裾部に土坑を掘り込み埋納している。また、同古墳群第2支群の丘陵裾部から羽釜と鍋を合口にした土器棺が1基[3]検出されている。この土器棺の周辺部から小型丸底壺に石を蓋替りに使用した土器棺や小型丸底壺と須恵器広口壺を合口にした土器棺等が検出されており、土器の種類が大小器種異なるが飛鳥時代頃から埋葬あるいは祭祀として採用される形態である。このような検出例は、東大阪市[4]、河南町[5]でも出土しており、広く河内地方に見られる。

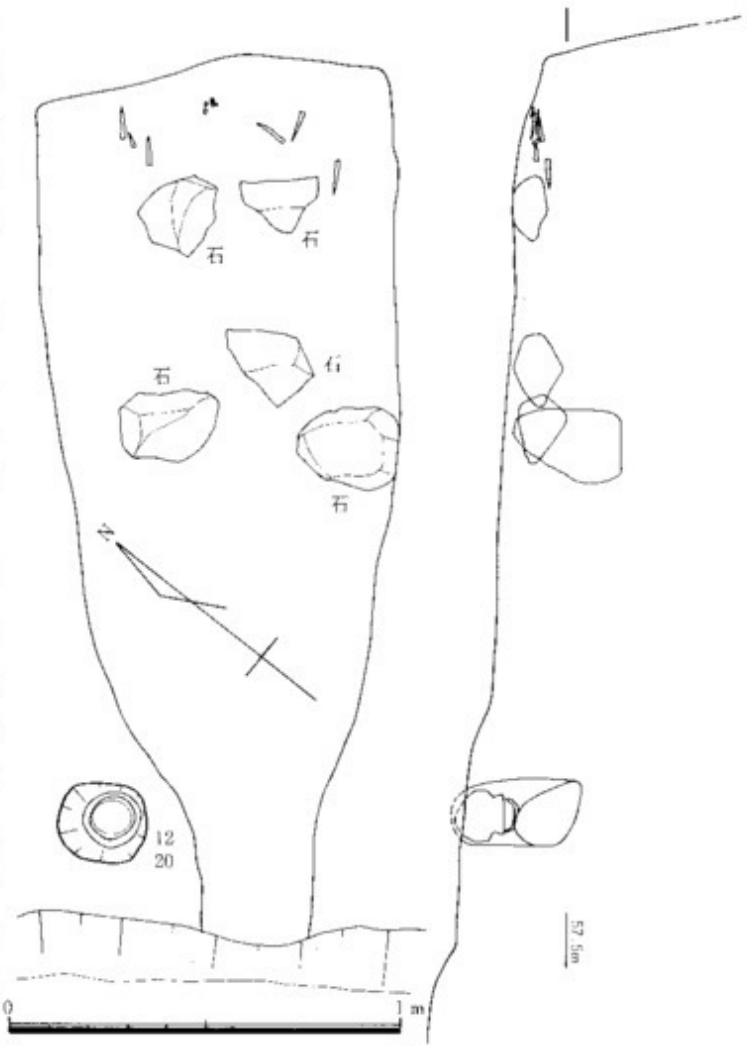
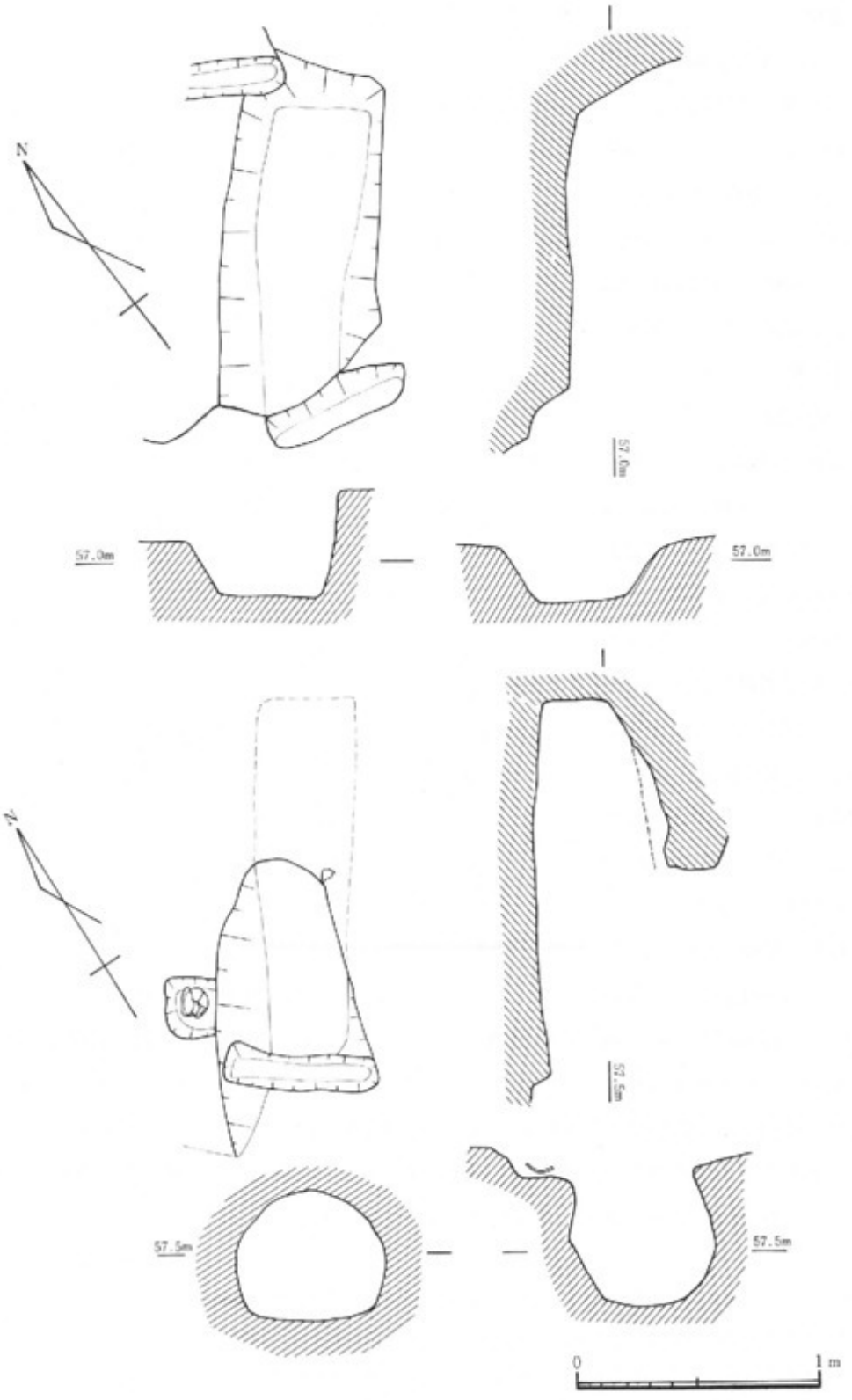
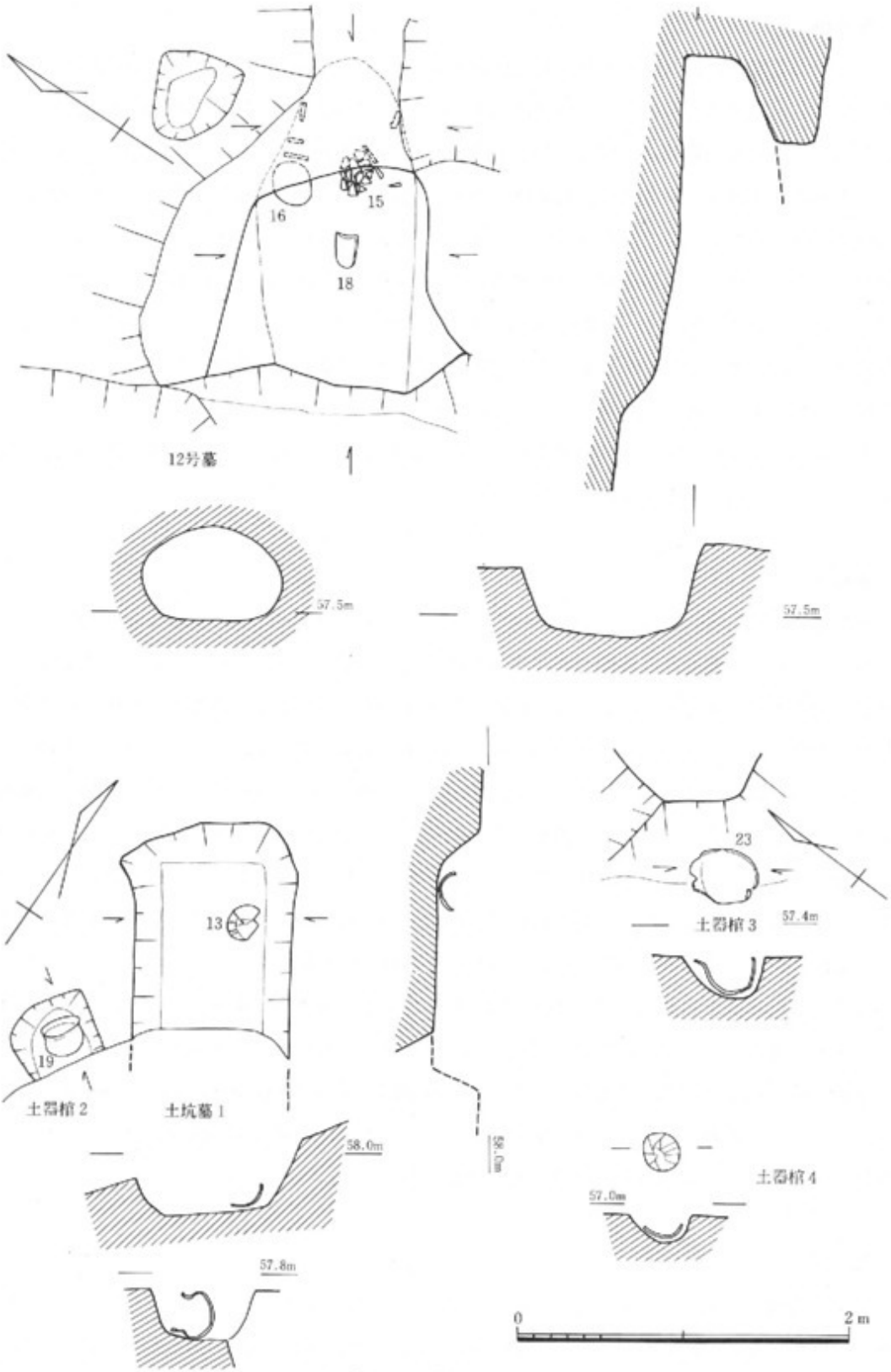


図 15　9号墳遺物出土状況

注1「柏原市遺跡群発掘調査概報Ⅰ－芝山古墳群、大県遺跡－柏原市教育委員会　1987
注2「太平寺古墳群内発掘調査現地説明会資料」　柏原市教育委員会　1981
注3「太平寺古墳群」安堂配水池に伴う発掘調査　柏原市教育委員会　1983
注4「瓜堂上層遺跡・皿池遺跡」　東大阪市教育委員会　1979
注5「東山遺跡」　大阪府教育委員会　1979



図—16　10号墳（上）、11号墳（下）



図—17　12号墳、土坑墓1・土器棺2、3、4

8号墳

7号墳の北側へ約70cm隔てて検出した横穴古墳である。玄室は、長さ292cm、幅125cm、高さ80cmである。形態は、側壁は直立気味に立ち上がり天井部はドーム状で、奥壁は少し内側に直立している。玄室の標高は、57.6～57.3mと西側へ緩く下向している。主軸方向は、N－77°－Wである。羨道は、長さ80cm、幅90cmである。羨道の中央部が船底状に窪んでいる。玄室との境に7号横穴とよく似た両側各1穴のピットを検出した。木製の扉状のものがあったかもしれない。内部主体は、木棺直葬で2棺検出した。2棺とも埋葬後天井の落盤によって盗掘を受けず完存している。第1棺（南側のもの）は、須恵器高杯（2）、壷（7）各1点とかんざし3点（93、94、95）、装飾具（92）1点、金環2点、鉄釘30本がほぼ現位置を保ち出土した。高杯は棺の手前に、壷は棺の横に正営位に置かれていた。

第2棺は、第1棺と平行して埋葬されていた。副葬品は、金環2点だけで他に鉄釘18点が出土した。それぞれ人骨が少量出土した。

9号墳

8号墳の北側1.2mに検出した横穴古墳である。玄室は、長さ160cm、幅92cm、高さ80cm以上である。形態は、側壁及び奥壁の遺存状況が悪くあまり正確でないが側壁と奥壁はほぼ直立気味に立ち上がり天井はドーム状と見られる。平面は、奥が一番広く南側が次第に狭くなり羽子板状の形態である。羨道は、長さ72cm、幅55～30cmで先細りで狭くなっている。7、8号墳のようなピットは検出されなかった。主軸方向は、N－49°　Wである。羨道部の北側に土師器の杯と瓶を上下に合せ口にした土器棺が少し掘り窪めて納められていた。内部主体は、小規模な木棺直葬であろう。計5個の20～25cm大の石を棺台として使用している。副葬品は無く人骨少量と鉄釘6本が出土した。人骨と鉄釘は、奥壁と棺台石の間にあり、埋葬した後整理したような痕跡である。玄室の標高は、57.4～57.2mと西側へ少し傾斜している。7～9号墳の各羨道に取り付く墓道が南北方向に約50cmの幅で伸びている。各古墳の羨道との段差は12、9、10cmである。また、この墓道の中に黄褐色の粘土を焼成した痕跡が2カ所確認された。

南側のものは、8号墳の中心線から9号墳の南側まで南北方向1.9m、東西方向50cmの範囲で続いている。北側のものは、9号墳の北側端部からさらに北側方向へ80cm、東西方向40cmの範囲で続いている。遺物はなく墓前祭祀の遺構であろうか。

10号墳

3区の南側から検出した横穴古墳である。天井部は、既に削平を受け下方だけ遺存している。検出上部は、東西方向1.3m、南北方向0.65mである。下部は1.15m、0.4mを測る長方形である。主軸方向は、N－85°－Wである。西側端部に主軸方向に直交するように方形のピット状

遺構は、玄室部を区画する閉塞用の掘り込みであろう。遺物は、出土しなかった。

11号墳

3区中央部に10号墳の一部と重複するように検出した横穴古墳である。玄門から中程まで天井部が遺存している。玄室は、東西方向146cm、南北方向41cm、高さ55cmである。形態は、断面が楕円形で平面が方形である。奥壁のみほぼ垂直に立ち上がる。床面から土師器片が出土したが細片で時期が明確でないものである。玄門部に長方形ピットを検出した。玄室幅よりやや広く横と縦、深さは、63cm、14cm、床面より約10cm程低い。7号墳のピット状遺構と同様の役割を持ち板等で閉塞していたものであろう。10号墳の一部を削っていることから、同墳の廃絶後に構築されたものである。

12号墳

11号墳の北側約50cmの位置に確認した横穴古墳である。規模と形態は、玄室長さ100cm、幅48cm、高さ28cmで、断面楕円形を成し平面は長楕円形である。床面標高は、57.45mである。主軸方向は、N　55°　Wである。奥壁も垂直に立ち上がらなく丸い。玄室部は、墓道から約15cm段差が付いている。内部主体は、小形の木棺直葬であろう。遺物は、土師器杯（18）と瓶（15、16）、鉄釘6本が出土した。最も小型の横穴古墳であろう。

土坑墓1

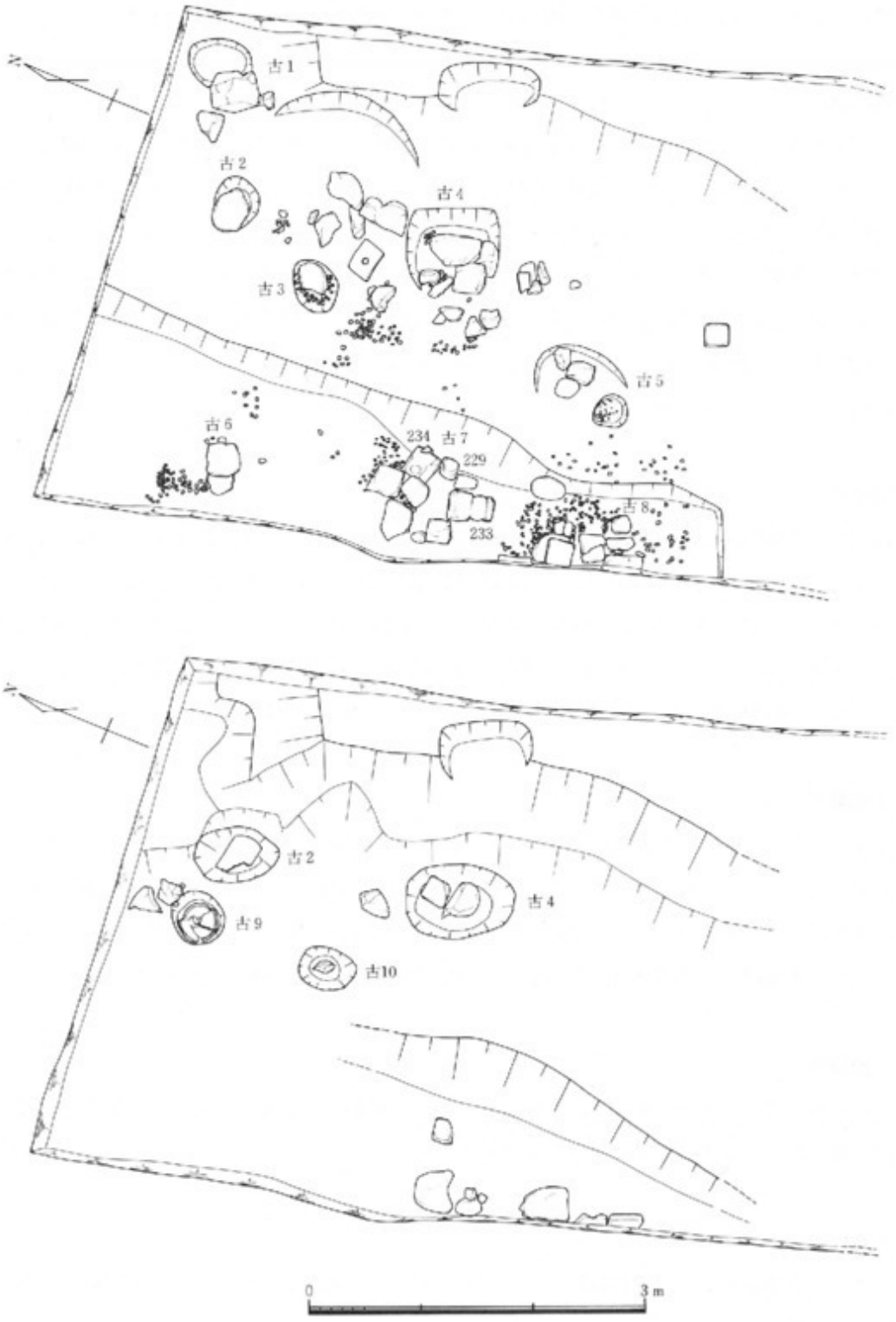
3区の中央部から検出した地山の花崗岩を掘削した土坑墓である。11号墳の上方部に在り、天井部の落下により一部が崩れている。土坑は、南北方向60cm（最大110cmまで）、東西方向47cm、深さ25cmの規模の方形プランである。床面は、ほぼ平坦で北東隅に土師器杯（13）が1点出土した。床面標高は、57.85mである。11号墳が構築された後に埋葬したのであろう。

土器棺2

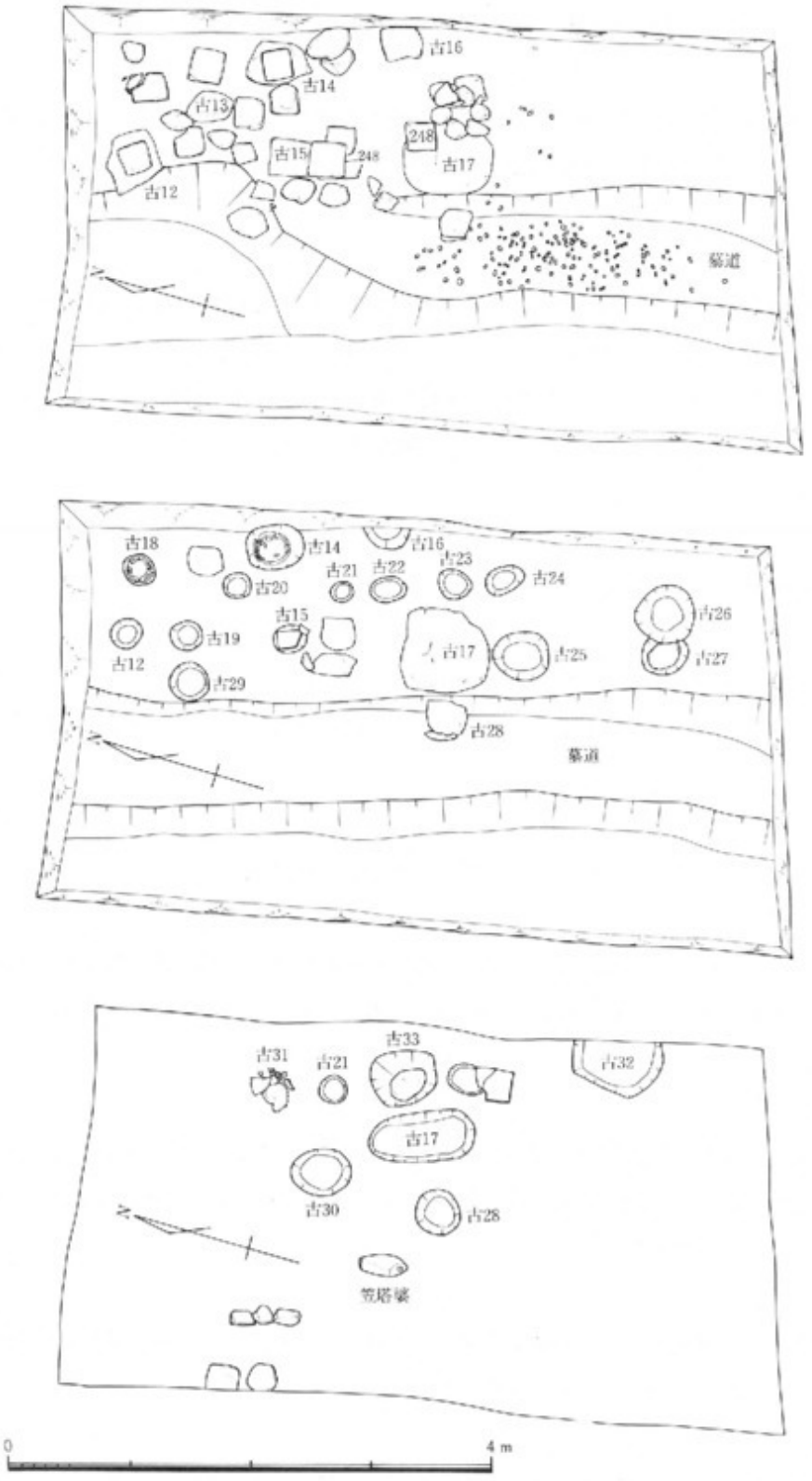
これも11号墳の上方から検出した土師器瓶（19）を埋納した土器棺墓である。規模は、20～25cm、深さ15cmである。床面標高は、57.7mである。

土器棺3

土器棺2の西側30cmの位置に検出した土器棺である。上面が攪乱によって削平されている。土師器瓶（23）である。床面の標高は、57.6mである。



図－18　1区古墓・1～10（上層・下層）



図－19　2区古墓11～33号（上層・中層・下層）

古墓は、1～3区の表土除去後の第1遺構面から検出した。

古墓1

1区の北西隅から検出した。検出面が浅いため攪乱が激しく、10～45cmの石が周辺に散らばっている。土坑は、最大径45cmを測る楕円形である。深さは、約40cmを測る。遺物は、出土しなかった。

古墓2

1区の北側から検出した土坑墓である。径30～40cmの扁平な石を土坑墓上層に覆せている。土坑の下層から瓦を水平に置き出土した。また、別の古墓かもしれない。石から瓦まで約15cmあり、瓦から土坑の底面まで30cmを測る。平面は方形で、掘り窪められている。

人骨は、出土しなかった。埋土は、花崗岩の風化土である。

古墓3

古墓2の50cm南側に同様の石を置いている。ピットは、径40～45cm、深さ約20cmである。遺物は、上層から多くの小石が出土した。

古墓4

上面に多くの凝灰岩が出土した。恐らく五輪塔が建っていたものと考えられる。下層は径65～95cmの大形土坑内に凝灰岩が2石入っている。それぞれ切石である。少量の人骨と多くの小石が出土した。

古墓5

径30cmの円形土坑である。深さ10cmを測る。人骨が少量出土した。

古墓9

古墓1～8号を検出した面から少し下げた面から検出した。周囲に20～30cmの石が散乱し、径約50cmの円形土坑にすり鉢（115)が人骨の上に裏向けて被せられている。深さは、35cmである。

古墓10

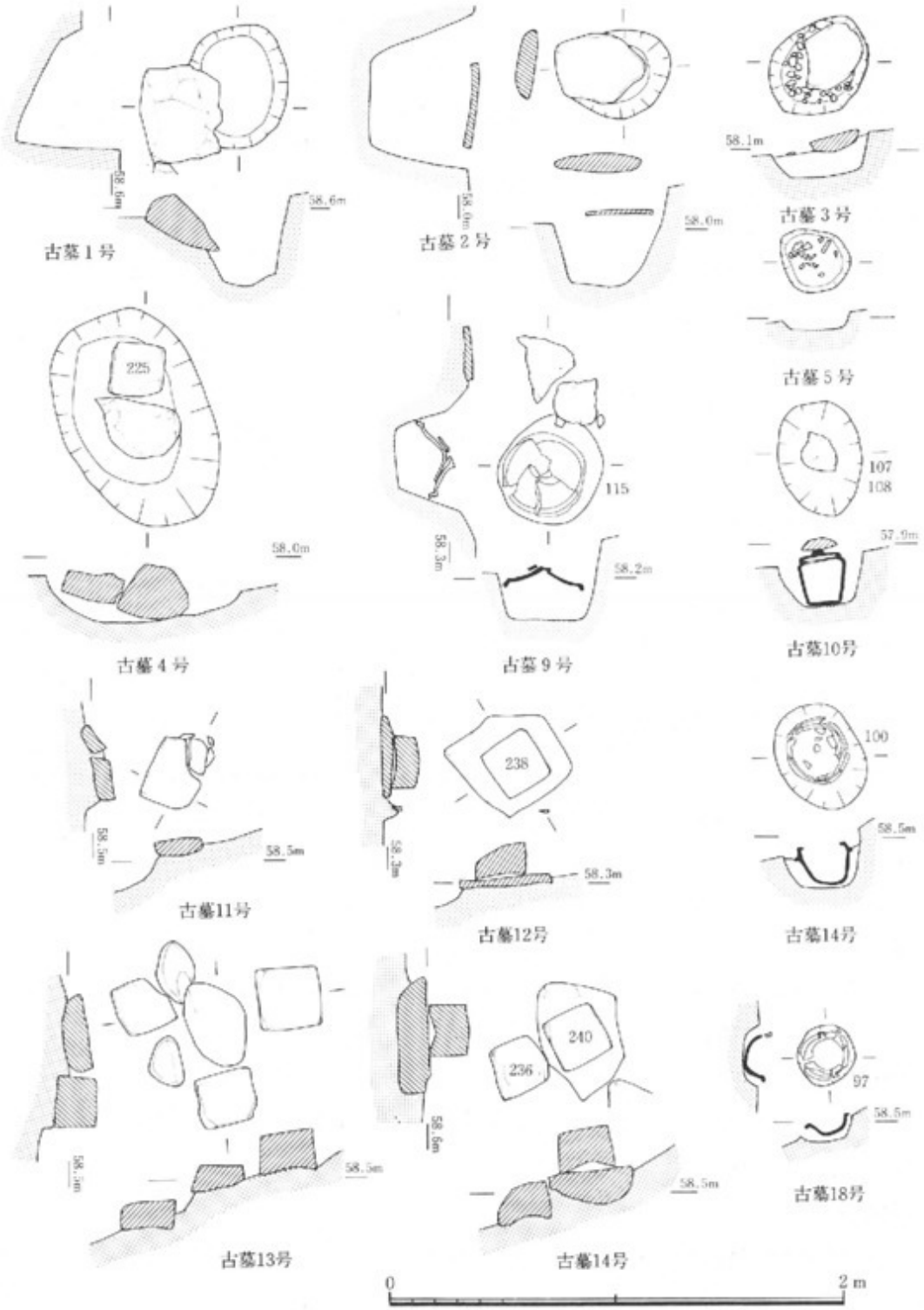
古墓9の直ぐ南側に検出した。径35～50cmの楕円形ピット内に約20cmの石を置き、下層に蔵骨器を埋納していた。土師器の瓶と蓋がセットになったものである。人骨が約1kg出土した。土坑の深さは、25cmである。

古墓11

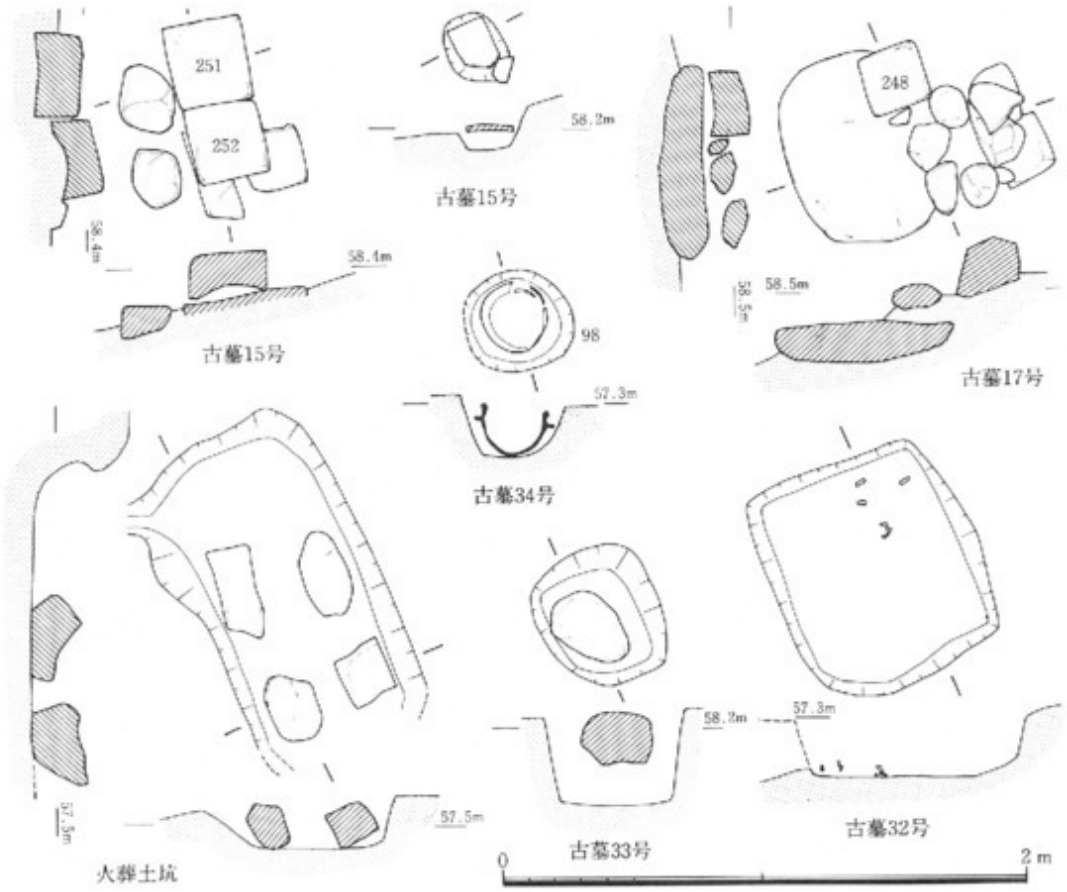
2区の北東隅に検出した。やや扁平な凝灰岩を据えている。下層から古墓18を検出したが、関連がよく判らなかった。一応別の古墓としておきたい。

古墓12

径25cmの円形土坑の上層に約40cmの扁平な方形石を載せさらに凝灰岩が乗っている。土坑の深さは、20cmである。人骨が約400g出土した。



図－20　古墓断面図（1～5、9～14、18号）



図—21　古墓断面図（15、17、32～34号）、火葬土坑

古墓13

凝灰岩の集積を確認した。下層は土坑等の遺構がなかった。

古墓14

径35～50cmの扁平な石の上に凝灰岩が乗っている。下層から土師器羽釜（100）が出土した。人骨は、約1.6kg出土した。

古墓15

凝灰岩の集積が見られた。下層から瓦（116）を水平になるように入れた径20～25cmの土坑を検出した。土坑内から人骨は出土しなかった。

古墓17

径40～90cmの長楕円形土坑の上に60～70cmの扁平な石を置きその上に凝灰岩が多く集積している。人骨は、約 300g出土した。

古墓18

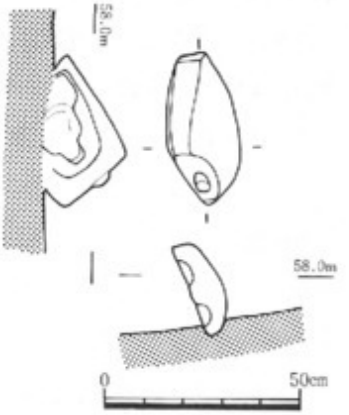
羽釜（97）を蔵骨器としたものである。器内から少量の人骨が出土した。土坑は、径25cmの円形である。深さは、約10cmを測る。

古墓32

２区の南東部に検出した方形掘方の土坑墓である。規模は、一辺80～90㎝、深さ20㎝である。底部から鉄釘７本が固まり出土した。また、人骨が炭と共に少量出土した。

古墓33

２区の中央部東側に検出した土坑墓である。規模は、45～55㎝の方形に近いもので深さが約35㎝を測る。掘形は垂直に底部は平坦である。上層に径33㎝の自然石を入れ、その下層に多量の人骨を埋納していた。



図－22　笠塔婆出土状況

古墓34

３区の北西隅から検出した土器棺墓である。土坑の大きさは、径約40㎝、深さ20㎝である。中央部に羽釜を正営位に埋納している。器内から人骨が650ｇ出土した。

火葬土坑１

３区の南東隅から検出した火葬を行った土坑である。ほぼ全形を確認したと思われるが一部調査区外へ伸びている。規模は、南北方向1.2m以上、東西方向60～75㎝のほぼ長方形である。しかし、南側は、炭等攪き出し口状となっており、直ぐ攪乱があるため詳細は不明である。中央底部に径25～35㎝の自然石を土坑に平行するように置いている。

石及び土坑の壁部が強い燃焼を受けている。また、底部の埋土が多量の炭で埋まっている。

その他の古墓

今回詳細しなかったものに３種類ある。１つは、凝灰岩または石が集積しているが、後世の人為的な移動或いは自然落石と考えられるものである。斜面下のやや平坦な場所に位置する古墓７、８、28号があげられる。特に７、８号は周辺から多量の小石が出土しているだけのものである。２つ目は、円形又は楕円形の形状の土坑墓で、埋土中に人骨又は炭等が混入しているだけのものである。規模は、径15～50㎝である。表土からの深度や後世の攪乱によって遺存状況が各種区々であり、古墓16、19～26、29、30がある。

３つ目は、古墓と確認されるけれど遺構が明確でないものである。古墓31号は、土器棺が上層からの土圧で散乱している。

第3節　遺　物

調査区から出土した遺物は、遺構及び遺物包含層からコンテナ53箱分である。土器類は、須恵器、土師器が5箱と凝灰岩等石が36箱、人骨及び炭等10箱があり、埴輪、鉄釘、瓦、金属装飾具が約2箱出土した。遺物の説明は、各項目別に述べていきたい。

須恵器

1は、6号古墳の床面から出土した高杯である。杯の底部と脚上部が遺存するのみである。杯外底面に回転ヘラ削りを行う以外は回転なで調整である。脚に透かし孔がなく、上方2条と下方1条の浅い沈線が施されている。大きさは、やや小振りの高杯である。色調は、青灰色を呈し体面に自然釉が付着し、焼成は、良好で、仕上げは丁寧である。

2は、8号墳の1号棺に副葬されていた高杯で、口径10.2㎝、器高12.8㎝を測る完形である。口縁端部は、やや丸く終わり、杯部の立ち上がりがやや外方に広がり、その中程と底部との境に小さな段が2条付いている。外底面は、回転ヘラ削りを施す。脚部は、2方向に2段の方形透かし孔をもち中央部に浅い2条と下方に1条の沈線が施されている。底径は、口径より少し大きく12.8㎝を測る。端部は、上下方に断面三角形に尖り気味に終わっている。

色調は、青灰色で内外面に灰被りと自然釉により所々変色している。胎土は、白色の1～3㎜の砂粒を多く含んでいる。焼成は、良好である。

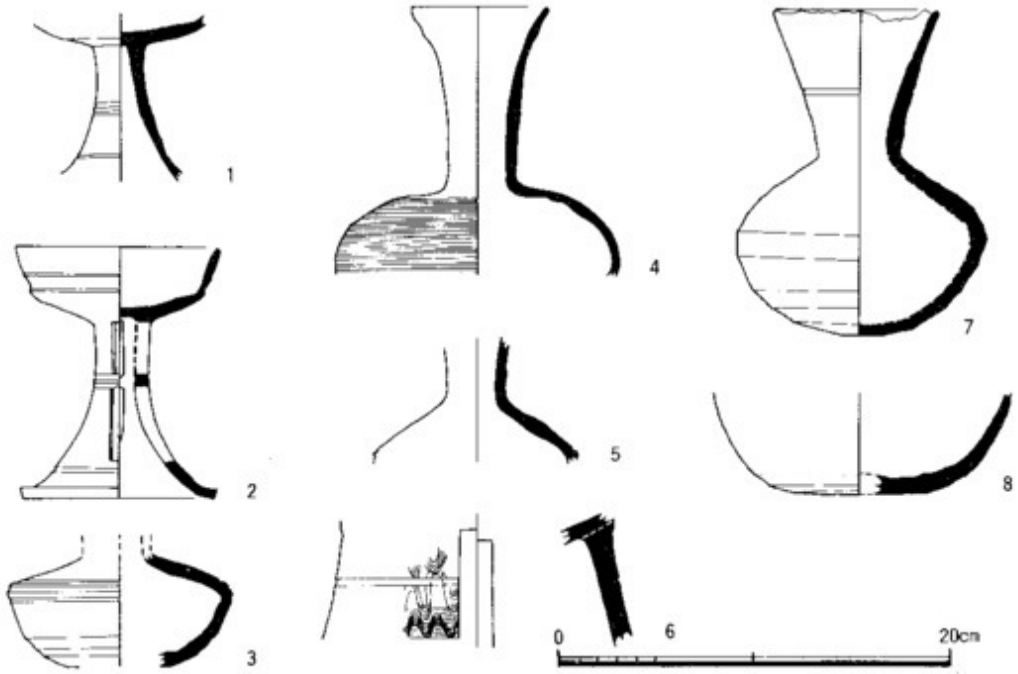
3は、台付き長頸壺である。頸部は、消失している。体部の最大径は、上方3分の1部分に良く張り出している。高台は、径5.3㎝、高さ2.0㎝のハの字状に拡がる形態のものが付く。

最大径の所に3条の浅い沈線を施す。調整は、最大径の下方に回転ヘラ削りをする以外は回転なで調整である。色調は、青灰色で自然釉が付着する。胎土は、長石を少し含む。

4は、長頸壺の上半部である。頸部は、長さ9.2㎝、ラッパ状に拡がるもので口径6.8㎝である。体部を製作した後再び頸部取り付け用の孔を切り接合をしている。体部は、丸みを持ち、カキ目調整が施されている。色調は、青灰色で灰と自然釉が付着している。胎土は、精良、焼成は、良好である。恐らく高台が付く形態のものであろう。

5は、小型壺の破片である。体部の最大径の位置に2条の沈線がある。色調は、青灰色で、胎土は、1～3㎜の砂粒を多く含む。6は、器台の体部と脚部の接合部分の破片である。透かし孔は、方形で5方向であろう。1条の沈線の上下に波状文が見られる。色調は、青灰色、胎土は精良である。1、3～6は、6号墳から出土した遺物である。

7は、8号墳の1号棺に副葬された長頸壺である。口縁端部の大部分を打ち欠いている外はほぼ完形である。頸部は、真直ぐハの字状に拡がり中程に浅い沈線が1状巡る。端部は丸く終わる。体部は、菱形で最大径は中程やや上方にある。沈線は入れない。下半部を回転ヘラ削りしている。色調と胎土は、青灰色、小砂粒を少し含む。仕上げは、丁寧である。



図－23　古墳出土遺物（須恵器）

8は、6号墳の裾部から出土した壷か鉢の底部である。体部の下方少しだけ回転ヘラ削りしている。色調は、灰白色で、胎土は、粗粒である。

土師器

土師器は、古墳時代のものと中世以降のものがある。前者を先に述べていきたい。

12は、20の瓶とセットになっていた9号墳の羨道部の土坑から出土した杯である。口径9.4㎝、器高3.3㎝を測る。口縁端部は少し外方へ折り曲げる。内面の調整は、螺線と2段の密な放射状暗文を施し、外面は、丁寧にヘラ磨きしている。色調と胎土は、茶灰色、精良な粘土である。13は、6号墳の右室内から出土した。口径9.8㎝、器高3.3㎝を測る。口縁端部内面に凹線が入り、内面に荒い放射状暗文がある。色調と胎土は、薄茶灰色、精良である。

14は、9号墳の玄室埋土から出土した杯である。口径12.3㎝、器高3.3㎝を測る。口縁端部は、小さく内側に内湾させている。内面に螺線と2段の放射状暗文があり、外面に1方の丁寧なヘラ削りが見られた。色調と胎土は、茶灰色、精良である。

15、16は、12号墳から出土した小型の鉢である。前者は、口径8.3㎝、器高4.4㎝である。口縁端部を小さく外反させている。色調と胎土は、薄茶灰色、石英と長石を少し含む。後者は、口径9.4㎝、器高4.3㎝である。前者と同様に口縁を外反させている。端部は、丸い。色調は、茶灰色、胎土は、細砂粒を含む。

17は、古墓32の上層埋土から出土した鉢である。古墓に関係するものではなく、混入したも

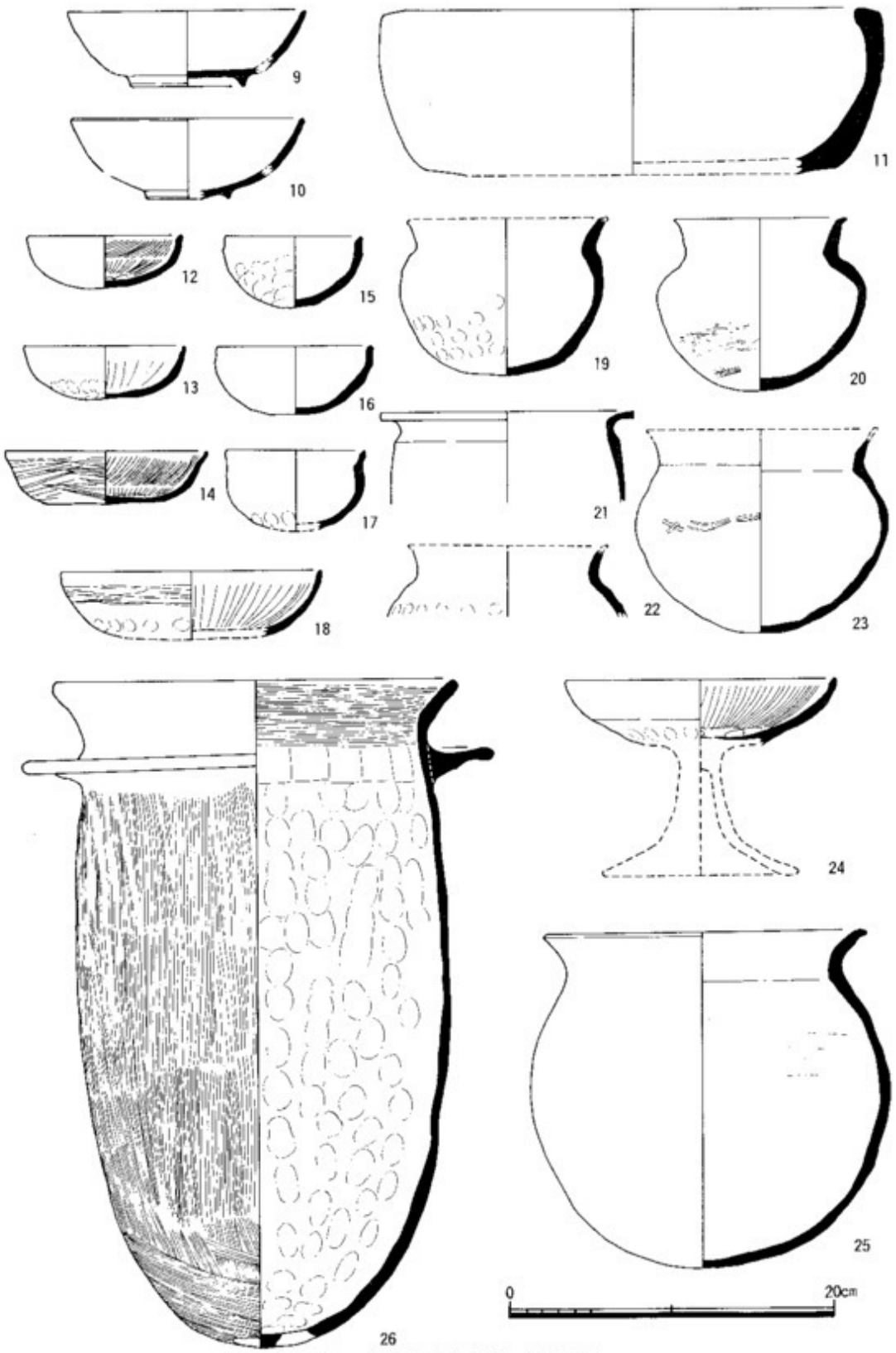


図--21　古墳等出土遺物（土師器）

のであろう。口径8.5cm、器高10.0cmである。口縁端部は外反する。色調、胎土は、茶灰色、細砂粒を少し含む。

18は、6号墳の右室から出土した杯である。内面に放射状暗文、外面にヘラ磨きを施す。色調は、灰茶色、胎土は、砂粒を少し含む。19は、6号墳から出土した広口壺である。口径11.7cm、器高9.7cmを測る。口縁は大きく外反し、体部は丸い。色調は、茶灰色、胎土は、少し砂粒を含む。20は、9号墳の合口土器の甕である。口径10.4cm、器高10.6cmである。口縁は少し外反し、端部は水平方向に折り曲げる。体部の最大径は、上方にあり張った肩である。

外面の調整は、ハケ目状の板なでであり、内面は平滑に板なでしている。色調、胎土は、茶灰色、良好な粘土を使用している。

21は、羽釜である。口径15.3cmである。口縁が大きく外反し、端部は、小さく上方へ向ける。体部上方に鍔の外れた痕跡が見られる。色調、胎土は、薄茶灰色、精良である。

22は、2区斜面の確認トレンチから出土した壺である。口径11.4cmを測り、端部は外反している。色調、胎土は、灰茶色、砂粒を少し含んでいる。

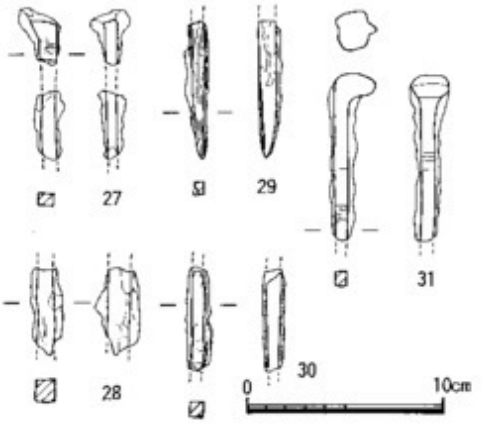
23は、6号墳から出土した甕である。口縁端部は欠損している。体部は円形に近くなり、最大径が中央部付近となっている。外面は板なでででヘラによる痕跡が見られる。色調は、灰茶色、胎土は、密であるが砂粒を少し含む。

24は、高杯の杯部である。脚部との接合部に小さな段を持つ。口径16.4cmを測る。内面に螺線と放射状暗文がある。

25は、土器棺1の甕である。口径19.2cm、器高20.4cmを測る。口縁は、外反し、端部は外下方に曲げている。端部は埋葬時に欠けさせたものではなく使用痕の欠けがある。体部は、円形に近い。調整は、内面を板ナデし、外面を指押さえ成形後板ナデを施し、部分的にハケ目状の痕跡として遺っている。色調は、茶灰色、胎土は、石英、長石、金雲母等の砂粒が少し混入している。

26は、口径24.2cm、器高40.8cmのほぼ完形の羽釜である。口縁はハの字状に外反して端部は方形に近いまま終わる。鍔は、水平方向に真直ぐ伸びる。

体部は、長胴形で割合長い。底部に内側から空けた径1.5cmの穿孔がある。土器棺として使用された時に行ったものであろう。口縁内面と体部の外面にハケ目を施し、体部内面は指押さえ痕が成形時のまま遺存している。色調は、茶褐色を呈し、石英、長石、金雲母を含む生駒西麓産の胎土である。



図－25　6号分出土鉄釘

鉄釘の分類

鉄釘は、木棺を製作する時に板材を接合させるために使用するものである。よって板と板を合わせることから釘に遺存する木目は必ず2種類存在すると考えられる。釘の頭部の方にある木目を上部、先端部のものを下部とする。以下木目のわかる釘について4分類してみる。

A類――上部の木目が釘と直行し、下部も同じく直行するが90°方向が違うもの。

B類――上部の木目が釘と直行し、下部が釘と平行するもの。

C類――上下部とも釘と直行するもの。

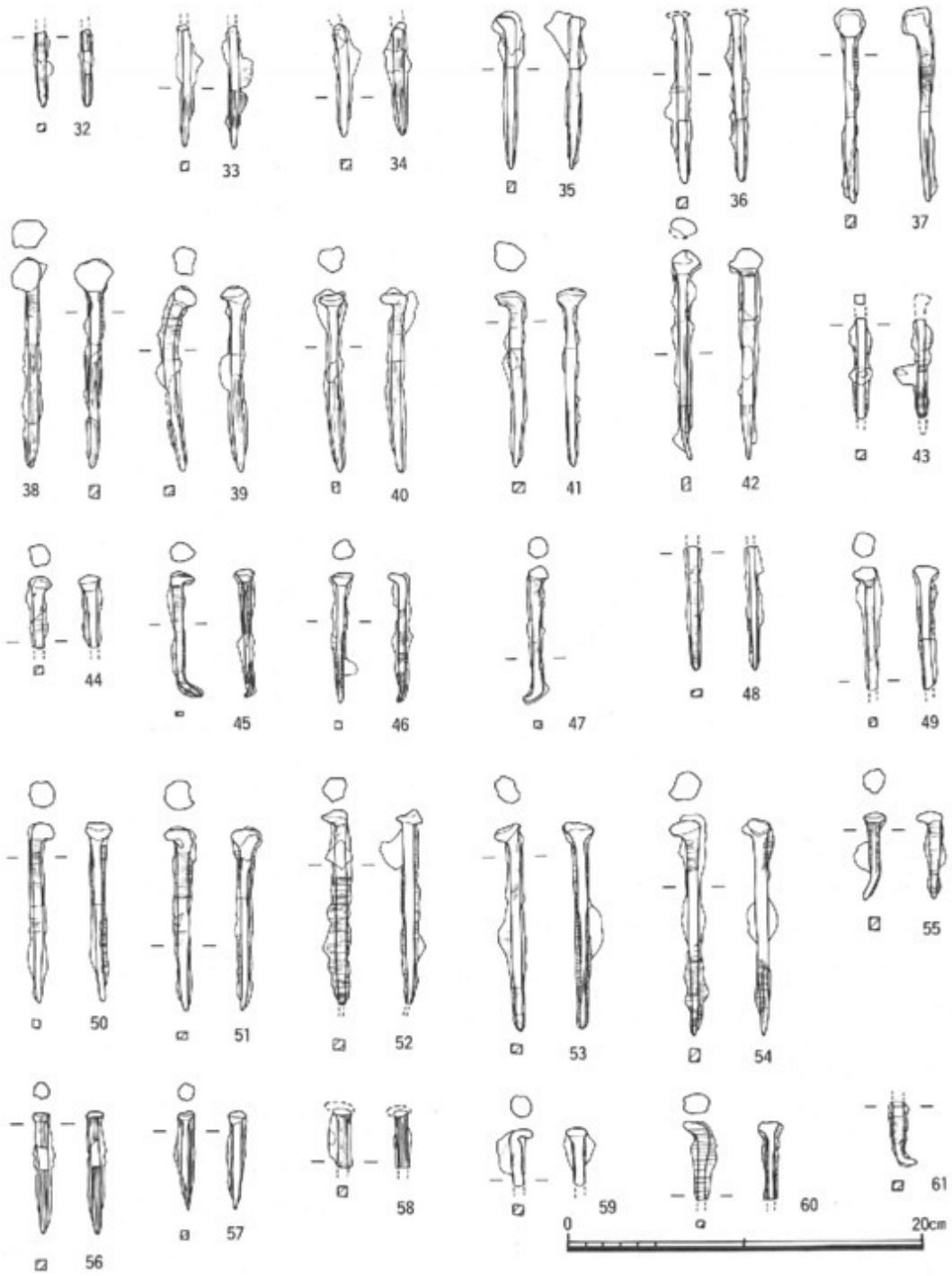
D類――上下部とも釘と平行するもの。

表－1　6号墳出土鉄釘

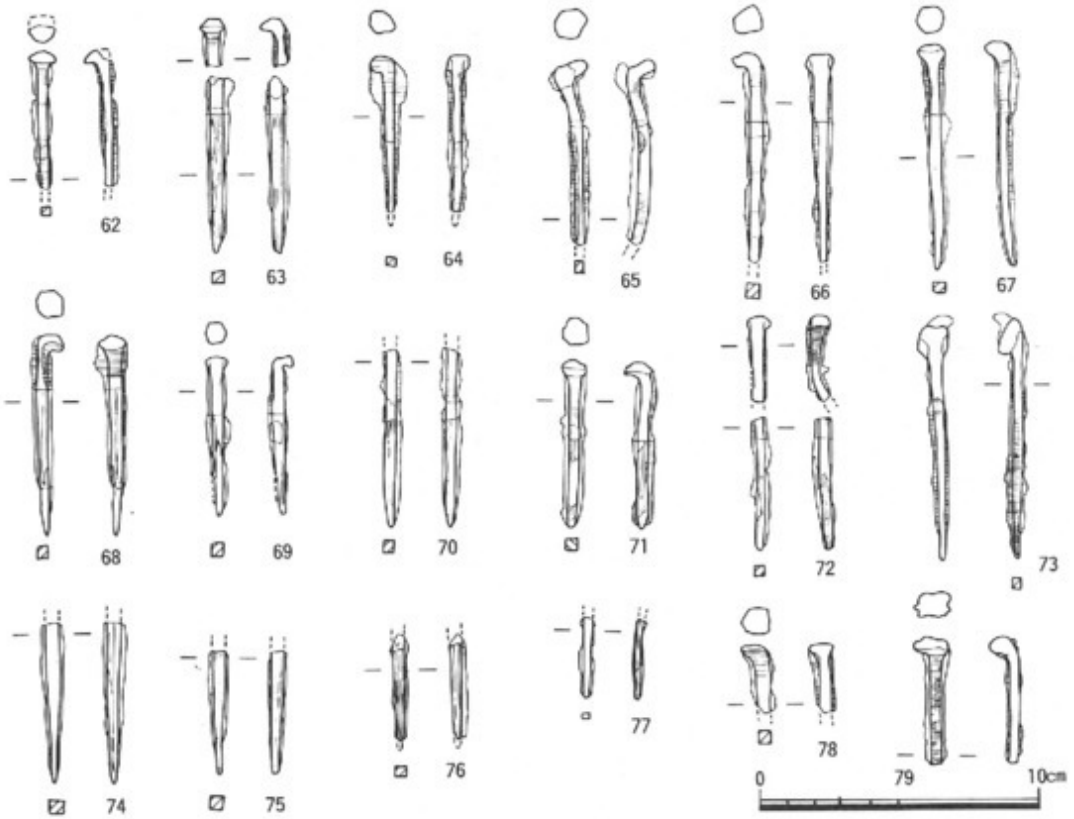
番号	分　類	長さ1	長さ2	断面形態	断面幅	番号	分類	長さ1	長さ2	断面形態	断面幅
27	不明	(4.5)	—	方形	0.65	30	不明	(3.8)	—	方形	0.55
28	〃	(3.2)	—	〃	0.8	31	C	(6.0)	3.4	〃	0.45
29	〃	(5.0)	—	〃	0.5						

表－2　8号墳第1号棺出土鉄釘

番号	分　類	長さ1	長さ2	断面形態	断面幅	番号	分類	長さ1	長さ2	断面形態	断面幅
32	B	(3.1)	(0.9)	方形	0.35	47	C	5.5	—	方形	0.3
33	〃	(5.0)	(2.6)	〃	0.35	48	〃	(5.0)	—	〃	0.45
34	〃	(4.6)	(2.0)	〃	0.4	49	〃	(5.0)	2.9	〃	0.35
35	〃	6.3	2.3	〃	0.45	50	〃	7.2	3.2	〃	0.35
36	〃	(6.8)	(4.3)	〃	0.4	51	〃	7.4	2.8	〃	0.4
37	〃	7.8	4.2	〃	0.45	52	〃	7.8	2.7	〃	0.45
38	〃	8.4	3.4	〃	0.5	53	〃	8.4	—	〃	0.45
39	〃	7.5	2.7	〃	0.45	54	〃	8.9	—	〃	0.5
40	〃	7.4	2.9	〃	0.4	55	〃	3.5	—	〃	0.5
41	〃	7.1	2.3	〃	0.5	56	D	4.9	—	〃	0.45
42	〃	8.5	2.8	〃	0.5	57	〃	4.0	—	〃	0.35
43	C	4.0	2.7	〃	0.4	58	〃	(2.4)	—	〃	0.4
44	〃	(2.9)	—	〃	0.4	59	B	(2.3)	—	〃	0.45
45	〃	5.2	—	〃	0.35	60	C	(3.2)	—	〃	0.35
46	〃	5.2	—	〃	0.3	61	〃	(2.7)	—	〃	0.45



図－26　8号墳出土鉄釘（第1号棺）



図－27　8号墳出土鉄釘（第2号棺）

6号墳出土鉄釘

6号墳の床面から5本の鉄釘が出土した。完形のものがなく折損し、現存長3.2～6.0㎝、断面径0.45～0.8㎝である。釘の表面に木棺の木目が遺存しているが31のみC類と判るだけである。中世以降の攪乱を受け、現位置を留めるものはなく木棺の復元はできない。

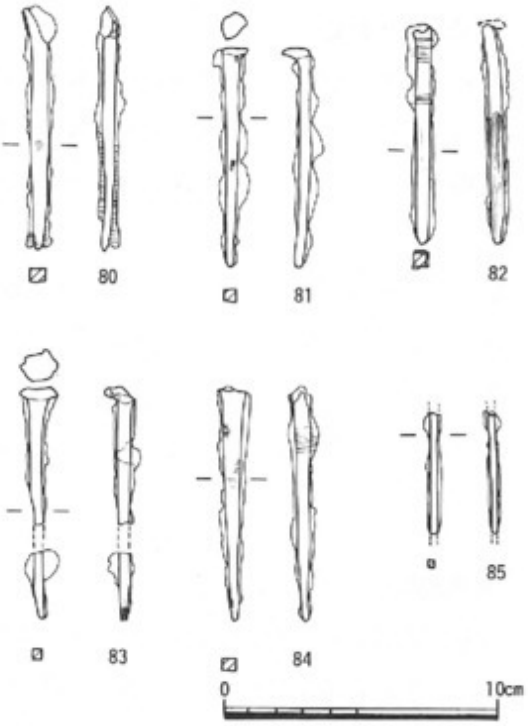
後述する8、9号墳の鉄釘の断面径より少し太いようである。

8号墳出土鉄釘

玄室から2棺の木棺が盗掘を受けない状態で検出した。第1棺は、南側に位置する木棺で朽ち果てているもののほぼ現位置を保っていると考えられる。規模は、東西方向に長く160㎝、南北方向40㎝である。高さは、釘の高低差から最低20㎝以上である。鉄釘は、総数30本で、A類は、1本もなく、B類は、32～42、59の12本、C類は、43～55、60、61の15本、D類は、56～58の3本である。それぞれの長さは、B類、6.3～8.5㎝で、C類は3.5～8.9㎝、D類は、4.0～4.9㎝を測る。断面径は、0.35～0.5㎝、0.3～0.5㎝、0.35～0.45㎝である。

これらの分類から、木棺の組み合せは、それぞれの端部を凹凸にし小口板を凸形、側板を凹形に切断して交錯させている。釘は、側板方向から上下2本と小口方向から1本が各隅同様に打たれているが南西隅は側板から1本を打つのみである。天井板から側板に北側6本、南側5本

の釘が打たれている。その中で45、55、61は、下部の先が少し折れ曲がっている。故意に曲げていたのか、打ち込んだ時先端が外側へ出たため折り曲げたのか明確でない。D類の釘は、東側に3本出土したが、木棺のどの部分に使用されたのかよくわからない。37、71（B類）の釘と組み合わせて別個の木箱があったかもしれない。



図－28　9号墳出土鉄釘

第2号棺は、北側から検出した木棺である。規模は、東西120㎝、南北30㎝以上である。鉄釘の総数は、18本である。1号棺と比較して規模が小さく釘の使用本数も大部少ない。

A類が、東側に3本（64、66、67）と西側1本（73）である。B類が、東側に4本、西側に5本と11本あるが、71を除外すれば合計10本である。C類が65と78が中央部に2本出土した。D類は出土しなかった。これらの状況から、木棺の復元をすれば次のとおりである。底板から小口板に東側2本（64、66）だけと、側板に西側1本（70）と東側2本（62、74）、中間で1本（78）の計4本がある。側板から小口に西側では2本（68、69）と東側4本（63、72、75、76）を打つ。天井板からは、小口板と側板の中間付近に4本（65、73、77、79）を打ち込んでいる。底板と天井板、側板の厚さは、3.5㎝、3.1

表－3　8号墳第2号棺出土鉄釘

番号	分　類	長さ1	長さ2	断面形態	断面幅	番号	分　類	長さ1	長さ2	断面形態	断面幅
62	B	5.0	—	方形	0.35	71	B	6.1	2.9	方形	0.45
63	〃	(9.8)	—	〃	0.5	72	〃	(7.9)	(1.3)	〃	0.45
64	A	5.2	3.1	〃	0.35	73	A	8.9	3.5	〃	0.4
65	C	(6.7)	2.3	〃	0.45	74	B	(5.3)	—	〃	0.55
66	A	(7.5)	2.5	〃	0.55	75	〃	(4.5)	—	〃	0.5
67	〃	8.2	2.6	〃	0.45	76	〃	(3.9)	(0.5)	〃	0.45
68	B	5.6	2.0	〃	0.45	77	不明	(3.0)	—	〃	0.3
69	〃	5.7	2.1	〃	0.5	78	C	(2.5)	—	〃	0.5
70	〃	6.5	(2.6)	〃	0.45	79	不明	(4.6)	—	〃	0.4

cm、2.1cm以上である。

9号墳出土鉄釘

玄室の奥壁と棺台石の間に固まり6本の鉄釘が出土した。一度埋葬した木棺を人骨とともに片付けたものであろう。A類が1本、B類が3本、不明が3本である。釘の長さは、7.9~8.9cm、断面径は、0.3~0.6cmである。板材の厚さは、2.9~3.7cm位である。

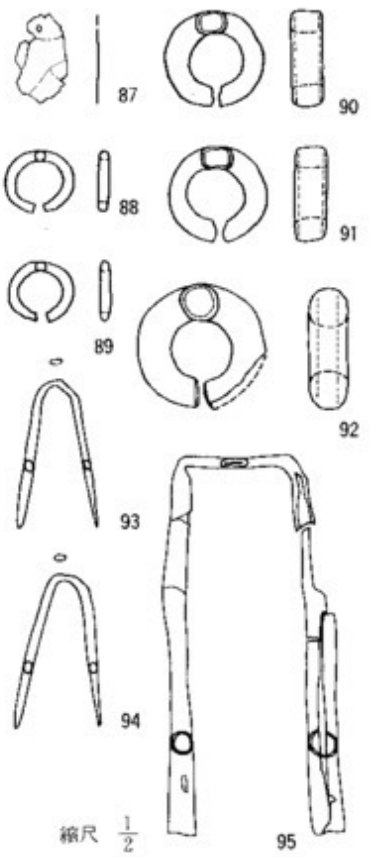
表－4　9号墳出土鉄釘

番号	分　類	長さ1	長さ2	断面形態	断面幅	番号	分　類	長さ1	長さ2	断面形態	断面幅
80	A	8.9	3.7	方形	0.6	83	不明	—	(2.5)	方形	0.4
81	B	7.9	—	〃	0.5	84	B	8.5	(3.7)	〃	0.55
82	〃	8.0	2.9	〃	0.55	85	不明	(4.5)	—	〃	0.3
83	不明	(5.0)	—	〃	0.4						

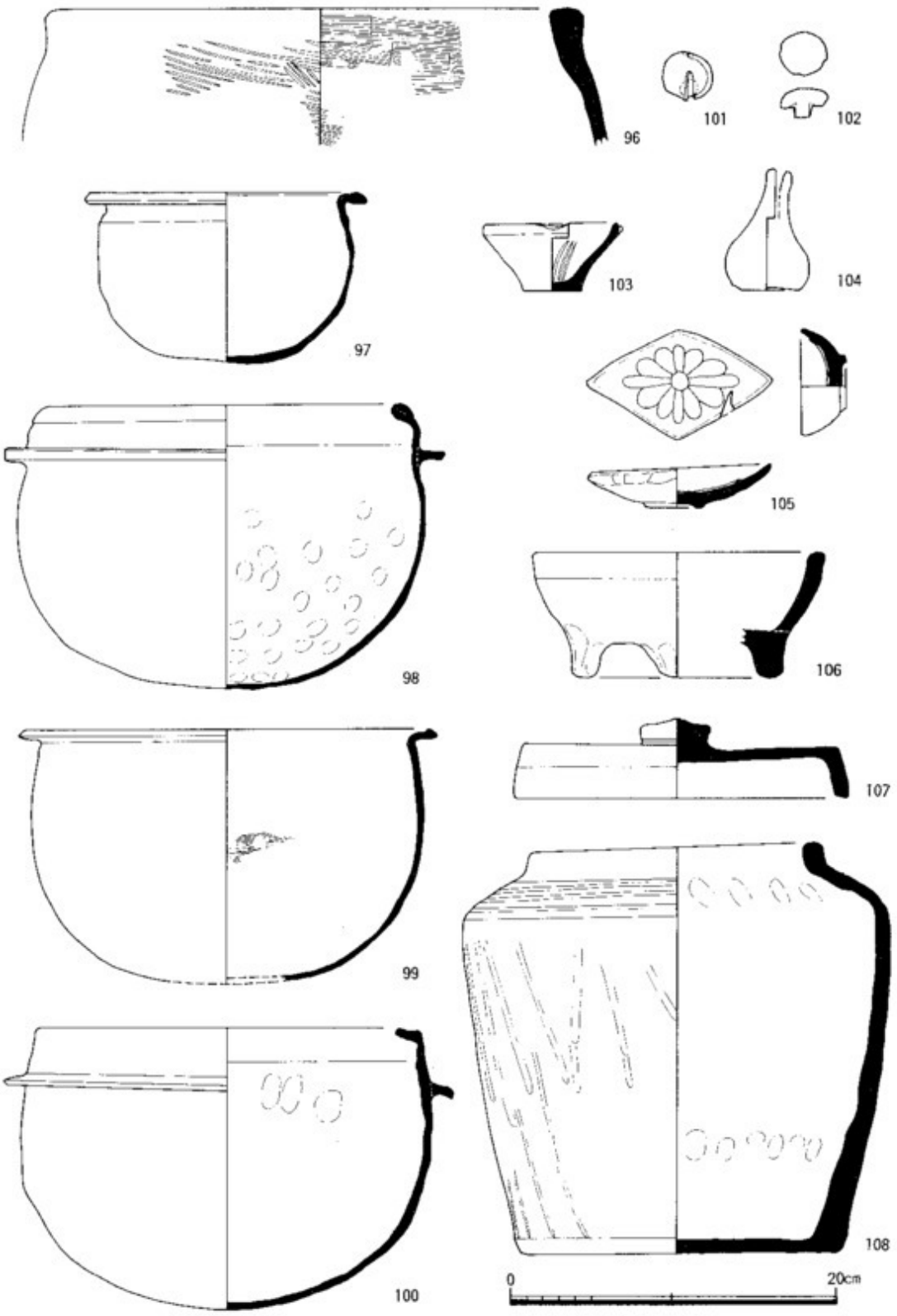
金属製品

金属製品は、6号墳から金環1個と8号墳から金環4個、飾り金具1個、かんざし3個が出土した。92は、遺存状態が悪く表面の剝離や欠落がある。銅芯に金張りしたものである。外径3.2cm、内径1.5cmを測り、断面はほぼ円形である。87は、長辺2.3cm、短辺1.3cm以上の楕円又は方形の飾り金具で端部に小孔があけられている。88、89は、8号墳の第2号棺から出土した完形の金環である。内外径は、1.2、1.7~1.8cmの小型品である。断面は、円形で銅芯に金張りしている。90、91は、同墳1号棺から出土した金環である。内外径は、1.5、2.5cmを測り断面は楕円形である。銅芯に金張りしている。

93、94は、V字形に折り曲げた小型のかんざしである。断面は折り曲げ部が扁平で他は円形を呈す。長さ3.8cm、幅2.1~2.2cmを測る。銅芯に金張りである。95は、U字形の大型のかんざしである。長さ9.8cm、幅1.5cmである。長軸は、径0.7cmの円形で折り曲げ部になるに従い細くなる。折り曲げ部は厚さ0.3cm、幅0.7cmの楕円形である。銅芯に金張りである。柏原市域の古墳からの出土例は、同古墳群第3支群3号墳から1点と雁多尾畑6支群3号墳から1点出土している。



図－29　金属製品



図－30　古墳出土遺物（土師器）

古墓出土土師器

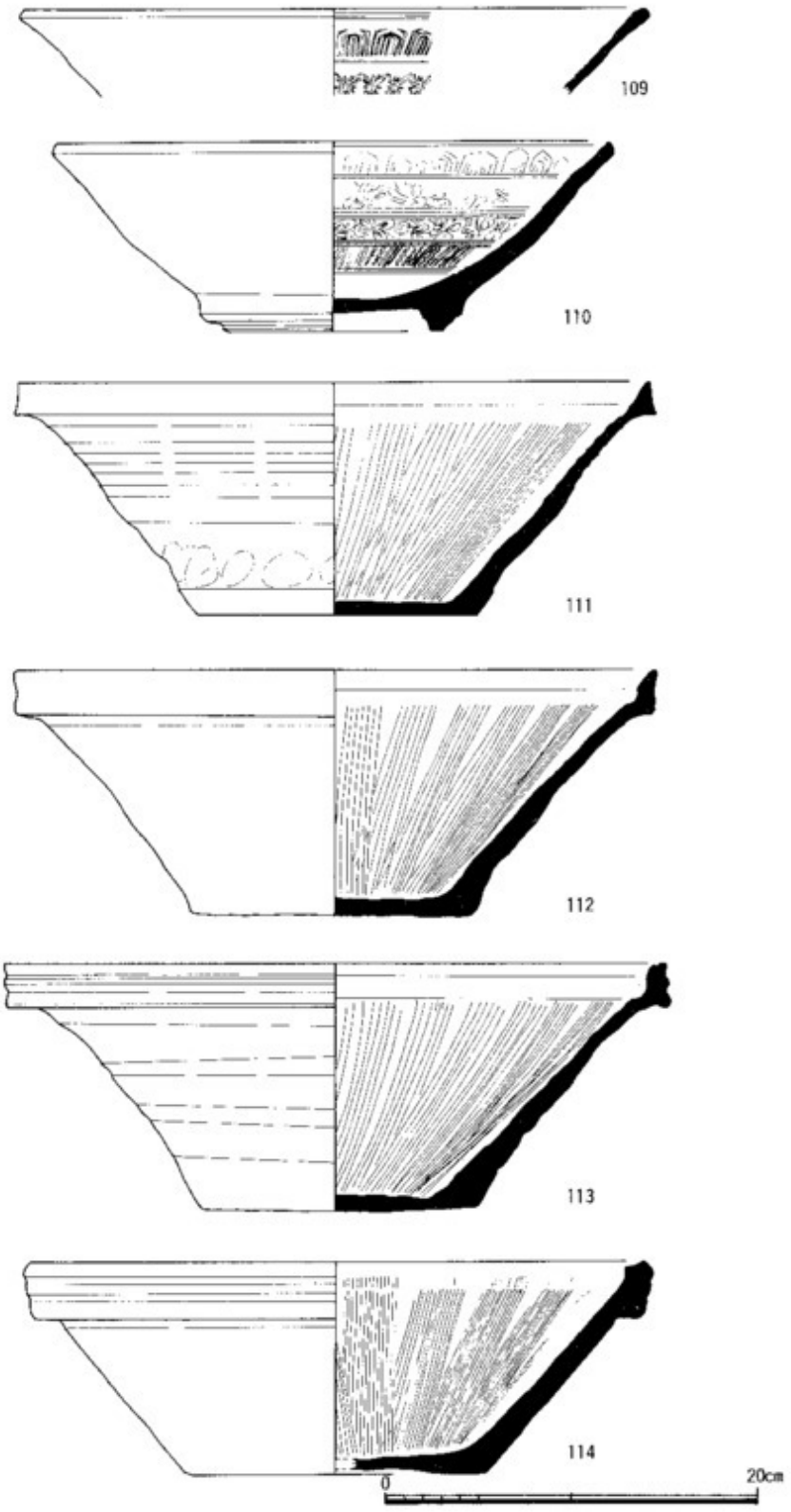
土師器は、古墓の蔵骨器と供膳品として使用されたものがある。96は、土師質の甕である。口縁部は内湾後垂直に短く立ち上がり、端部が上面に平坦部をもって肥厚する。外面の調整は短い口縁直下に平行叩きを行い部分的にすり消している。内面は、横方向のハケ目調整である。色調は、薄茶桃色で、胎土は、やや荒い。97～100までは、大和系の土師質土釜である。97の口縁端部は、垂直にたった体部から水平方向に大きく外反させ、端部は上方に小さく折り曲げる。口径は、16.2㎝、器高10.7㎝の小型の土釜である。外面の調整は、ナデ調整で、内面は板ナデによって平滑に仕上げている。98は、内側上方へ折り曲げて、端部を小さく外方に折り返している。口径は、21.6㎝、器高17.5㎝を測る。体部上面に水平方向に伸びた鍔を巡らせている。調整は、外面をナデ調整し、内面を指押え成形後板ナデ調整である。外面に使用痕が顕著に付着する。

99は、外側水平方向に折り曲げ、端部を断面三角形に肥厚させる。口径は24.8㎝、器高15.5㎝である。外面は、ナデ調整され煤が付着している。内面は、横方向の板ナデで同様に煤が見られる。100は、内側に小さく水平になるように折り曲げ、端部を丸く終らせる。体部外面に水平方向よりやや下方に小さな鍔を巡らせる。口径23.3㎝、器高17.4㎝を測る。外面は、平行叩きを施した後板ナデ調整である。内面は、平滑な板ナデ調整で、部分的に指押さえの痕跡が遺る。色調は、淡黄色から灰白色である。胎土は、白色砂粒を含むが精良である。

101は、土製のミニチュアの鈴である。径約3㎝の中空で中央部に切り込みを入れ、中に小さな玉を1個入れる。102は、径2.8㎝の頭部だけが遺存した鉄釘である。103は、土師質のミニチュアすり鉢である。口径5.8㎝、器高3㎝を測る。片口を付け内面に3本単位の摺目を5方に入れている。104は、土師質のミニチュアの壺である。口径0.6㎝、器高5.4㎝を測る。内面は、殆ど粘土で口縁部から棒状のもので突刺している。底部は、糸切りである。105は、陶質の菱形をしたミニチュアの皿である。内底面に菊花弁の模様が付き、底部に小さな高台を付ける。色調は,黄桃色である。

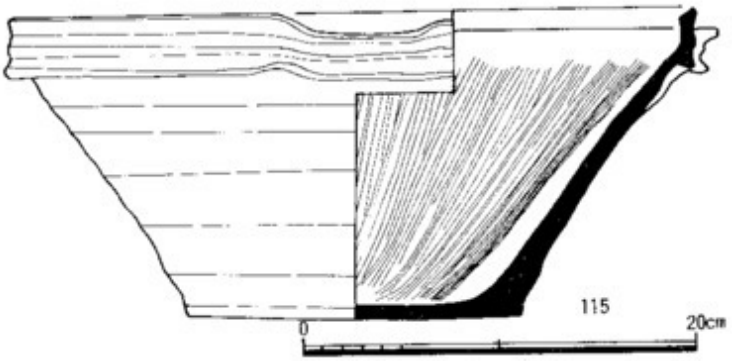
106は、高台付きの鉢で表採した資料である。口径17.0㎝、器高7.7㎝を測る。口縁は、内湾気味に外方へ立ち上がり内傾する平面を持ち肥厚する。高台は、がっちりとした幅3～4㎝の脚を四方に張り付けている。内外面は、横ナデ調整で仕上げている。胎土は、当地域産の粘土である。107と108は、セット関係を持ち古墓10から出土した土師質の有蓋の蔵骨器である。

107の蓋は、中央部に径2.2㎝の凝宝珠様の摘みを付け、天井部は水平で口縁部は垂直に折れ曲がる。口縁端部は、水平な面を持ち方形に終わる。108の短頸壺は、口径17.5㎝、器高25.2㎝を測る。肩部が最大径を持ち、口縁は、上方に肥厚して上面に平坦部を持つ。肩部に横方向のヘラ磨きを施し、下方は縦方向の部分的なヘラ磨きをしている。内面は、口縁と肩部の接合部と底部から少し上方の部分に指頭圧痕が見られる以外に横ナデである。底部は、荒いナデを



図－31　古墓出土遺物（すり鉢）

している。胎土は、石英、長石、金雲母の砂粒を少し含むが精良である。色調は、淡桃色である。



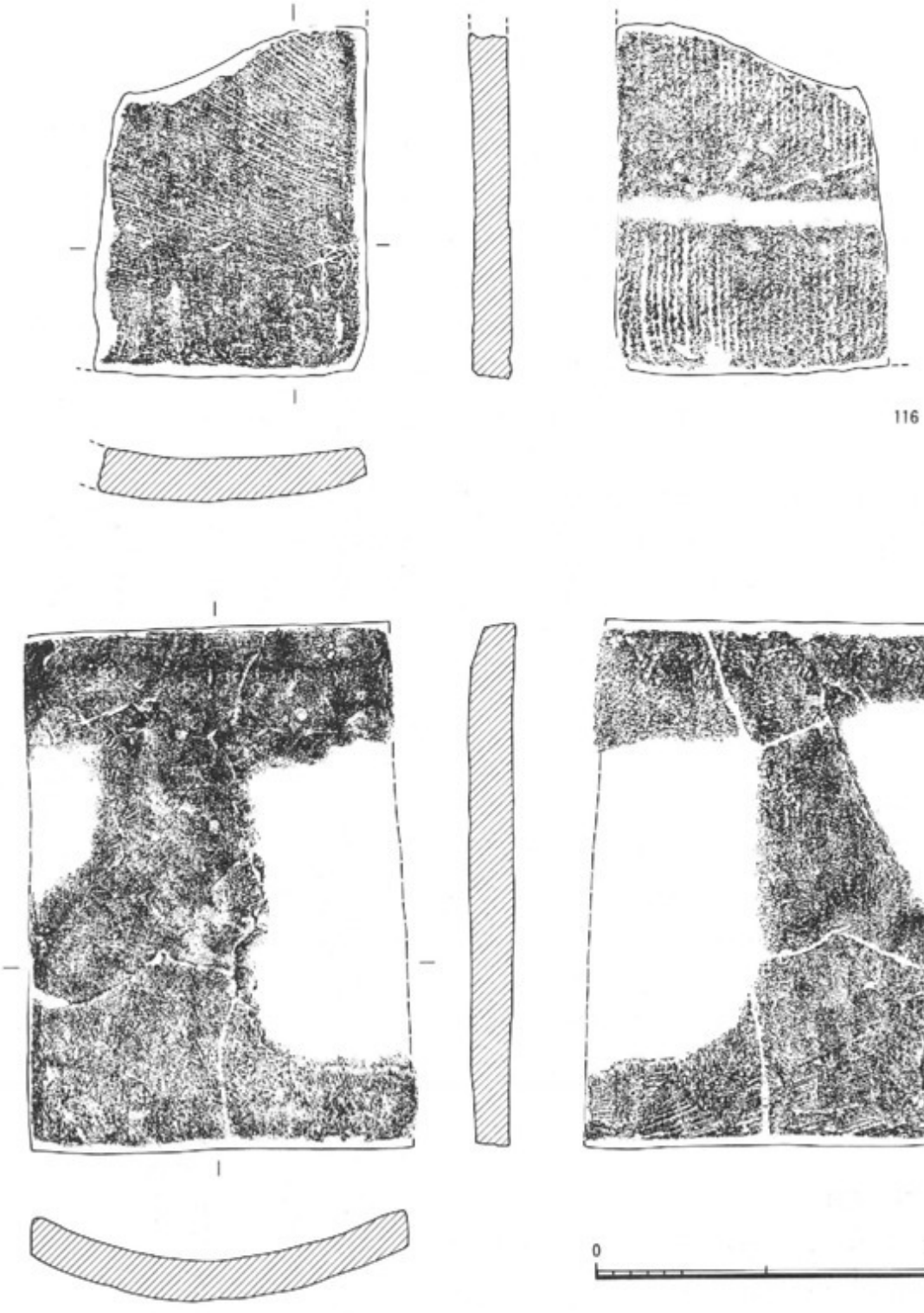
図－32　古墓９　出土すり鉢

すり鉢

すり鉢を蔵骨器とした古墓９が検出されているが、この他にも多数のすり鉢が表採あるいは撹乱土層から出土しており、同様の遺構が存在したものと考えられる。109は、口径32.8㎝を測る口縁部だけが遺存しているすり鉢である。口縁部は、外上方に伸び端部はやや肥厚して内傾する面を持って終わる。内面に２種類のスタンプ模様がある。上方は、櫛目状のU字形を組み合わせたもの、下方は、放射状に拡がる菊花模様のものである。模様の区画線として１又は２本の凹線を巡らせている。内外面の上方部分に施釉を施している。色調は、素地が暗赤褐色、断面赤茶色、釉は黄灰色である。110は、約半分が遺存する。口径29.2㎝、器高10.0㎝、底径11.6㎝である。体部は、内湾気味に外方に伸びるが、口縁部付近で少し外方へ折り曲げている。口縁端部は、断面方形を成すが内面に凹線を巡らせて端部を尖り気味にしている。内面に４段の模様が付く。上方から、U字形を組み合せて櫛状にした模様、菊花様の模様、桜花の模様、平行線と波状線を組合せたものがある。各模様帯の間に１条、２条、２条、２条の凹線区画がある。高台は外側下方をヘラで削り落としている。体部下半は、回転ヘラ削りしている。内外面に施釉が施されている。色調は、断面と素地が赤茶色、釉は黄灰色である。約半分が遺存しており、古墓９のように故意に割って使用したのであろう。

111は、備前焼のすり鉢である。口径33.2㎝、器高12.5㎝、底径14.7㎝を測る。口縁端部は、摘み出して断面３角形にする。摺目を７本１単位に施す。体部下半に指頭圧痕が在り、上半は回転ナデである。色調は、素地が茶褐色で断面青灰色である。112～114のすり鉢も備前焼である。色調は、赤茶色から茶褐色である。口縁部形態が少しずつ異なり摘み上げた端部が次第に大きくなり、113と114は、外側に２条の凹線が付けられている。摺目の単位は、７条、６条、14条単位である。

115は、口径31.4㎝、器高15.7㎝、底径16.6㎝の備前焼のすり鉢である。古墓９に蔵骨器として使用されたもので、ほぼ完形に復元することが出来るが故意に割られている。口縁端部は、外面に２条の凹線を入れ片口である。胎土は、砂粒を含みやや粗く、色調は、赤褐色である。摺目は、８条１単位で施こし、体部内面に放射状、底面に平行線を施している。外面及び外底面はナデ調整である。



図－33　古墓出土遺物（瓦）

瓦

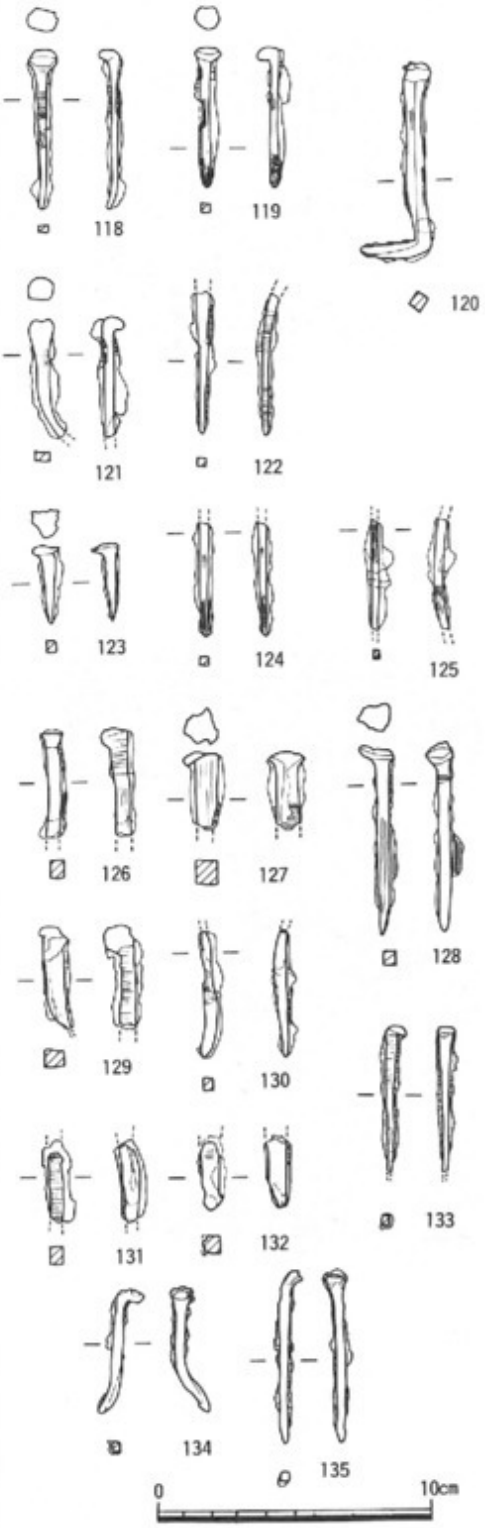
瓦は、古墓２、15、23と攪乱土層から計４点出土している。古墓の上面に被せたものである。116は、古墓15から出土した。現存長20.4㎝、幅16.0㎝、厚さ2.7㎝である。凸面の調整は、縄目叩きを施し部分的にすり消している。長辺部から約９㎝の所に強くヨコナデした凹線が１本ある。凹面は、布目痕がほとんど遺らないようにナデられている。長側辺は、面取りしている。焼成は良好で色調は青灰色である。117は、長さ30.5㎝、幅21.2～22.4㎝、厚さ2.3㎝を測り唯一完形に復元できる資料である。凸面は、板状の叩き痕があり、凹面は板ナデ調整を施している。色調は、灰黒色で焼成は良好である。その他の瓦は、長さ35.5㎝、厚さ2.5～2.8㎝を測る大型のものがある。凸面は、縄目叩き後なで消し、凹面は、布目痕の上からヘラ状のものでなで消している。色調は、灰青色で焼成は良好である。

古墓出土鉄釘

古墓32から火葬された人骨と共に18点の鉄釘が出土した。これらの釘には木目痕が付いており、報告しておきたい。分類可能なものはＢ類（119、126、128）３本、Ｃ類（118、135）２本、Ｄ類（120）１本である。長さは、完形品で2.9～7.2㎝を測り断面は、方形で径0.35～0.85㎝である。他の古墓からは出土しなかった。

一字一石経

古墓の周辺部から径1.7～6.1㎝、厚さ0.5～2.6㎝の扁平な小石が多数出土した。縁辺が丸くなった河原から採集した砂岩がほとんどである。石の平坦な部分に墨書で一石に一字が描かれているのを確認した。肉眼で判明したものは136～159、180、184、



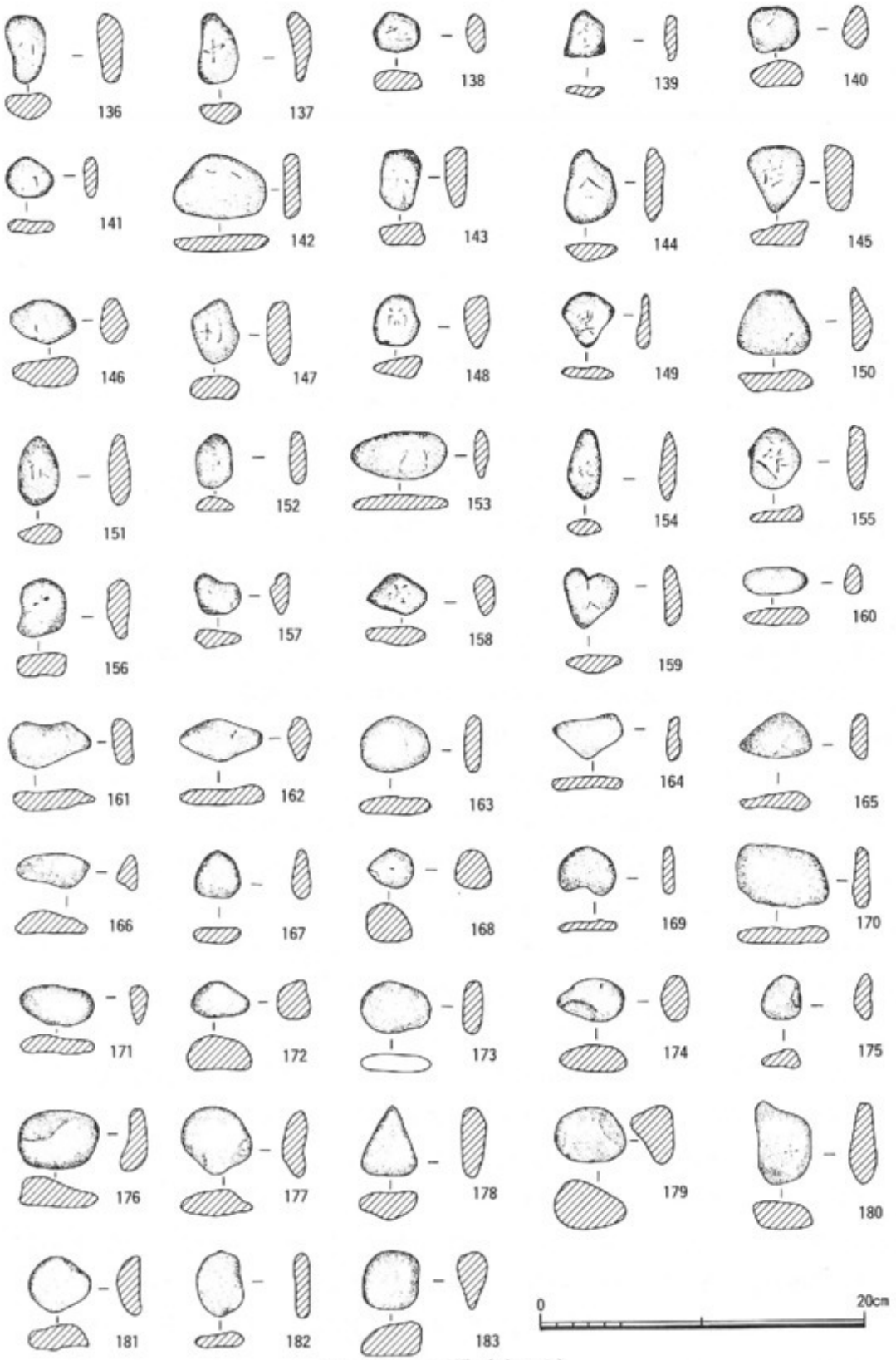
図―34　古墓32号出土鉄釘

216の27点である。137は、「中」の字であろうか。138は、「社」か。139と144は、「金」であろう。143は、「示」。145は、「塵」。147は、「利」。148は、「尚」。149は、「早」。151、154は「花」か。152は、「垂」か。153は、□囲いのようである。155は、「作」。158は、「木」である。一字一石経は、鎌倉時代以降の新興宗教の1つとして栄えたものである。これらは、当調査区の古墓に埋葬された人物があるいは拘わりを持つ者が供養として経文を書いたものであろう。柏原市域で初見の発掘調査による遺物である。

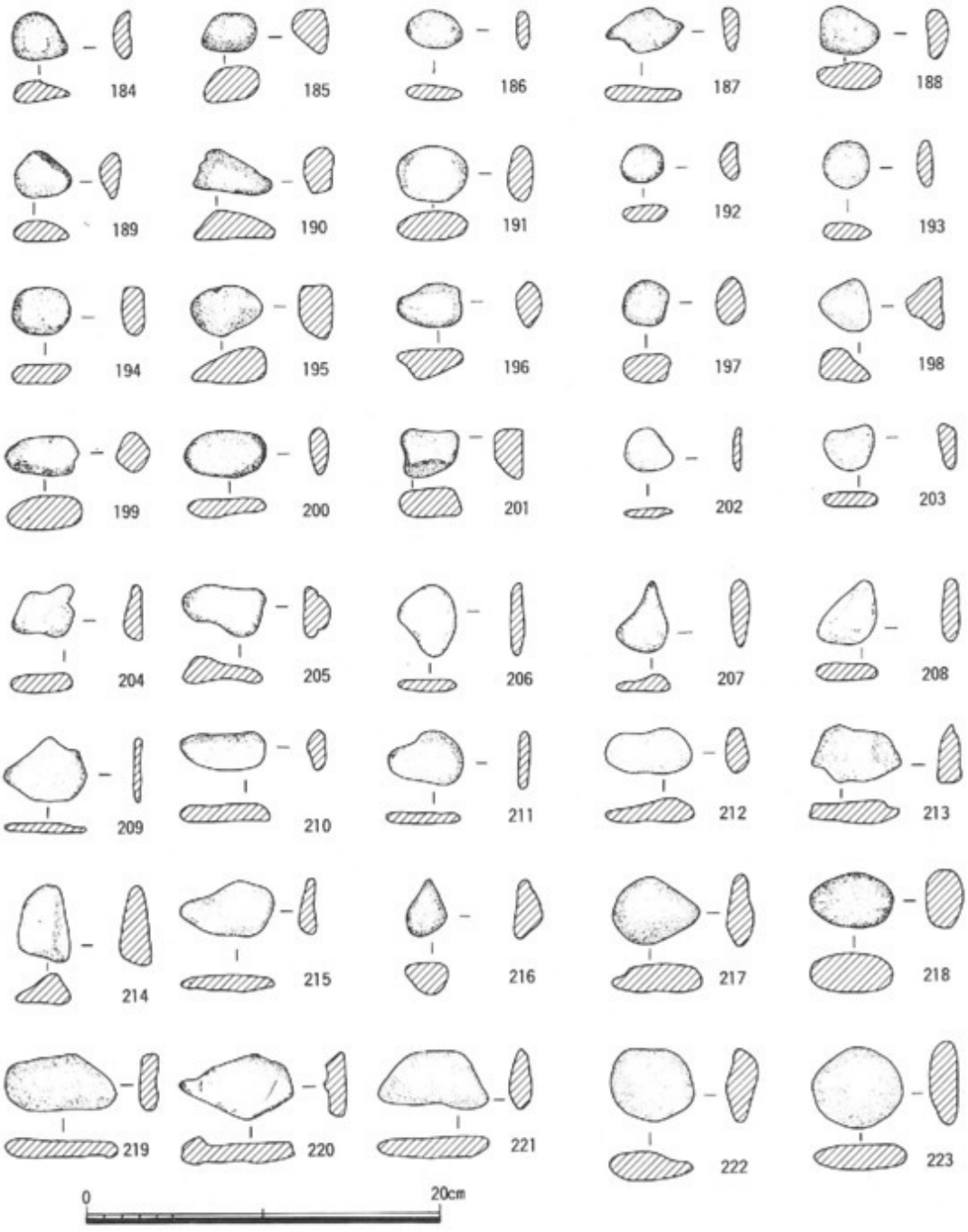
五輪塔

石造五輪塔は平安時代末期より造営され、鎌倉時代の発展期を経て全国的にひろく、かつ数多くみることとなった。仏教にあっては地、水、火、風、空が万物構成の要素であるとなし、これを五大と称し、この五大の変化、展開によってすべてが生ずるとみてこれを五輪といった。この五大と象徴的に方、円、三角、半円、宝珠形にかたどり、組み重ねて塔型式をつくり、これを五輪塔といっている。これを供養塔あるいは墳墓標識として造立したとされている。

五輪塔を塔型式別に大きく分けると各部別石造、空風輪一石彫成、五部一石彫成となる。なかでも空風輪一石、他を4個に分けるものが一般的である。今回出土した五輪塔のうち五部一石彫成と空風輪一石彫成との見分けは難しいので、大きく五輪塔と五部一石彫成について述べることにする。五部一石彫成とくに室町時代のものに限り一石五輪塔と呼ばれている。これは南北朝時代以前の古塔の紀年銘はまれに被供養者の没年次のものもあるが、多くは造立の年次であるのと異なり、一石五輪塔は没年次を録しているほか、古塔が多く多数の助縁によって造立されたのと違い、一石五輪塔は特定の個人によって造立されるなど前代とは著しく事情を異にしている。このようなことから名称が区別されている。一石五輪塔は三種に細分類されており、1．本格式（基礎の背が低く、高さに対する幅の比率が1.00未満のもの）、2．細長式（基礎の背が高く、不安定なもの）、3．埋込式（基礎下端の根部を荒叩きし、これを地中に埋めて建てるもの）。一石五輪塔の総高は多く40～50cmで、60～70cmのものもあるが、1mを超えるものはない。つまり1尺5寸（45cm）、2尺（60cm）、2尺5寸（75cm）塔の3種に限られていると考えられている。おそらく産石地において整形され、既製品として搬出されたものと考えられる。なお、近畿では大阪府に属する泉南淡輪付近産の和泉砂岩製の分布が広域に、南河内を中心として河内地方には松香石が分布している。今回出土した五輪塔のうち一石五輪塔と思われるもの10点、うち4点は空風輪部のみ残存しているだけなのでうたがわしい。地輪部に梵字を書きとめてあるもの2点がある。 228は地輪部3面に種子、胎蔵界の大日如来、同4仏中の宝幢如来、開敷華王如来、天鼓雷音如来の梵字を墨書で記す。233は地輪部1面に種子、胎蔵界の大日如来、同五仏中の開敷華王如来の梵字を墨書で記しており、本格式と思われる。249は各部別石造である。これも地輪部2面に種子、胎蔵界五仏の天鼓雷音如来と同五仏中の


136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
0
20cm

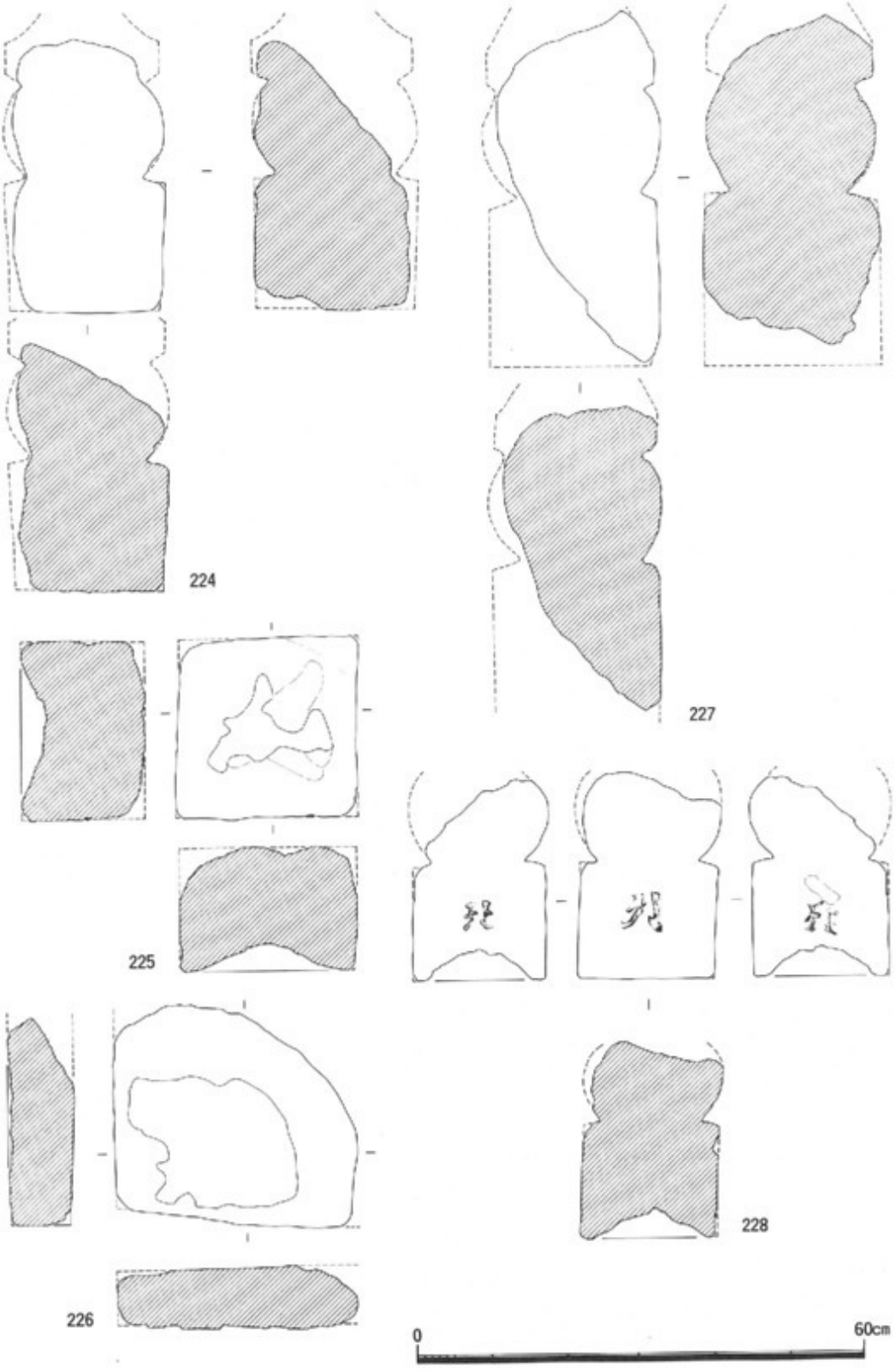
図—35　一石経（その１）



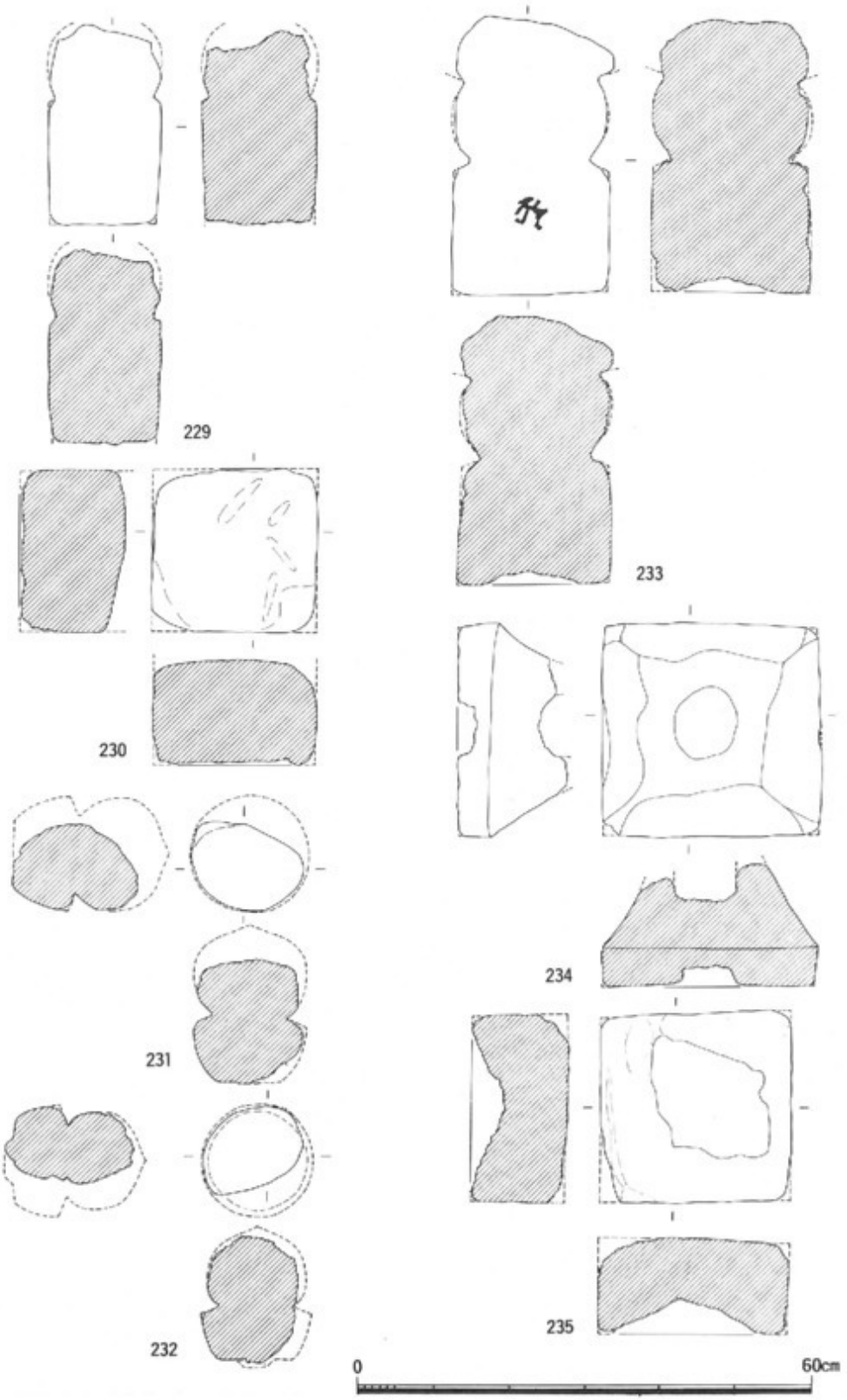
図－36　一石経（その２）

宝幢如来の梵字が墨書で記されている。234・235は、各部別石造の火輪部で、共に天地中央部に円形の柄穴があり、組み合わせて建てられていたと考えられる。

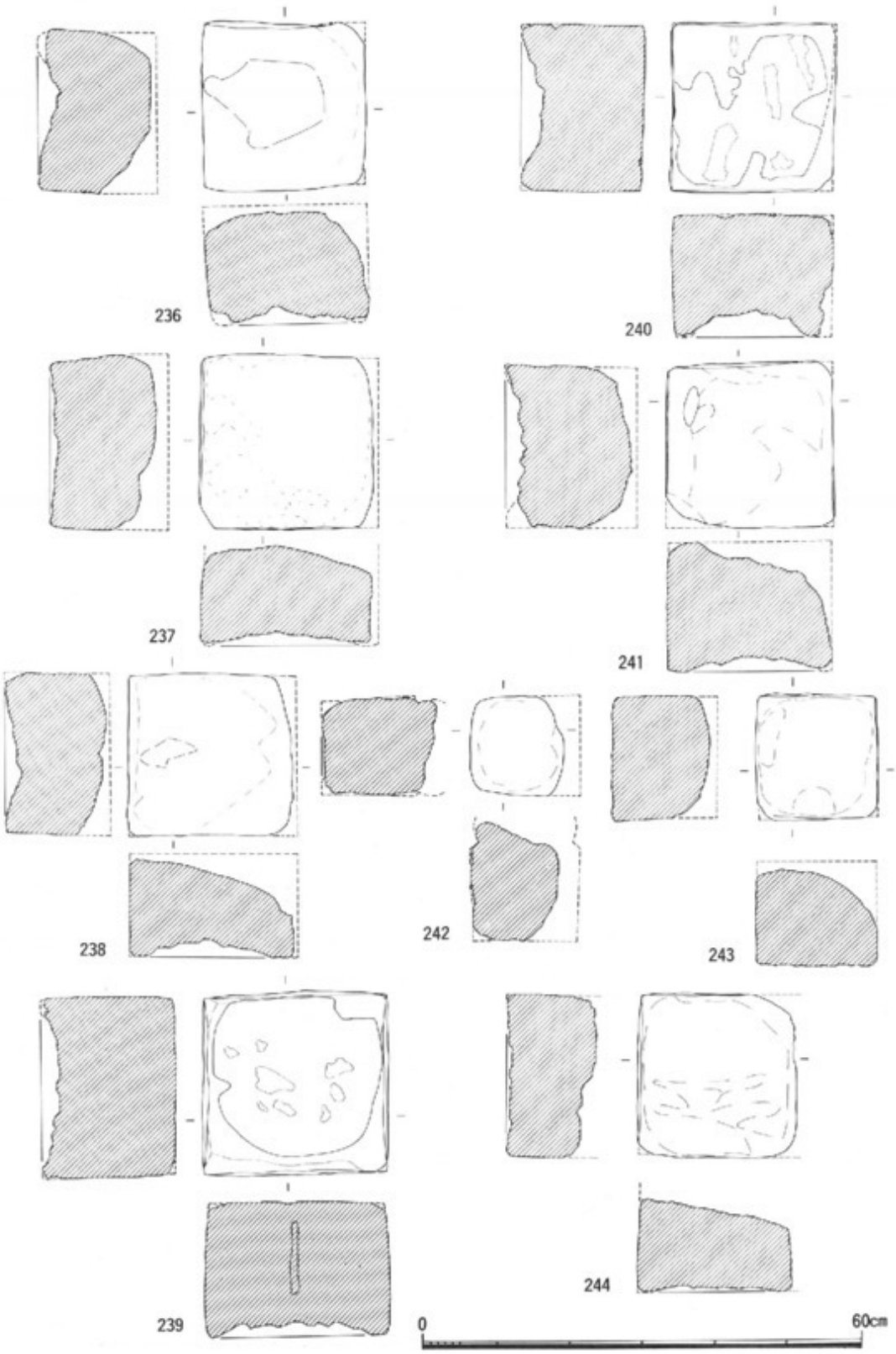
年代については各時代の代表作例をみると、平安時代は傾斜のない火輪、樽形に近い水輪、横長の地輪。鎌倉時代は、軒厚で四隅を直線で切る火輪、球形の水輪、方に近い地輪。全体に隙



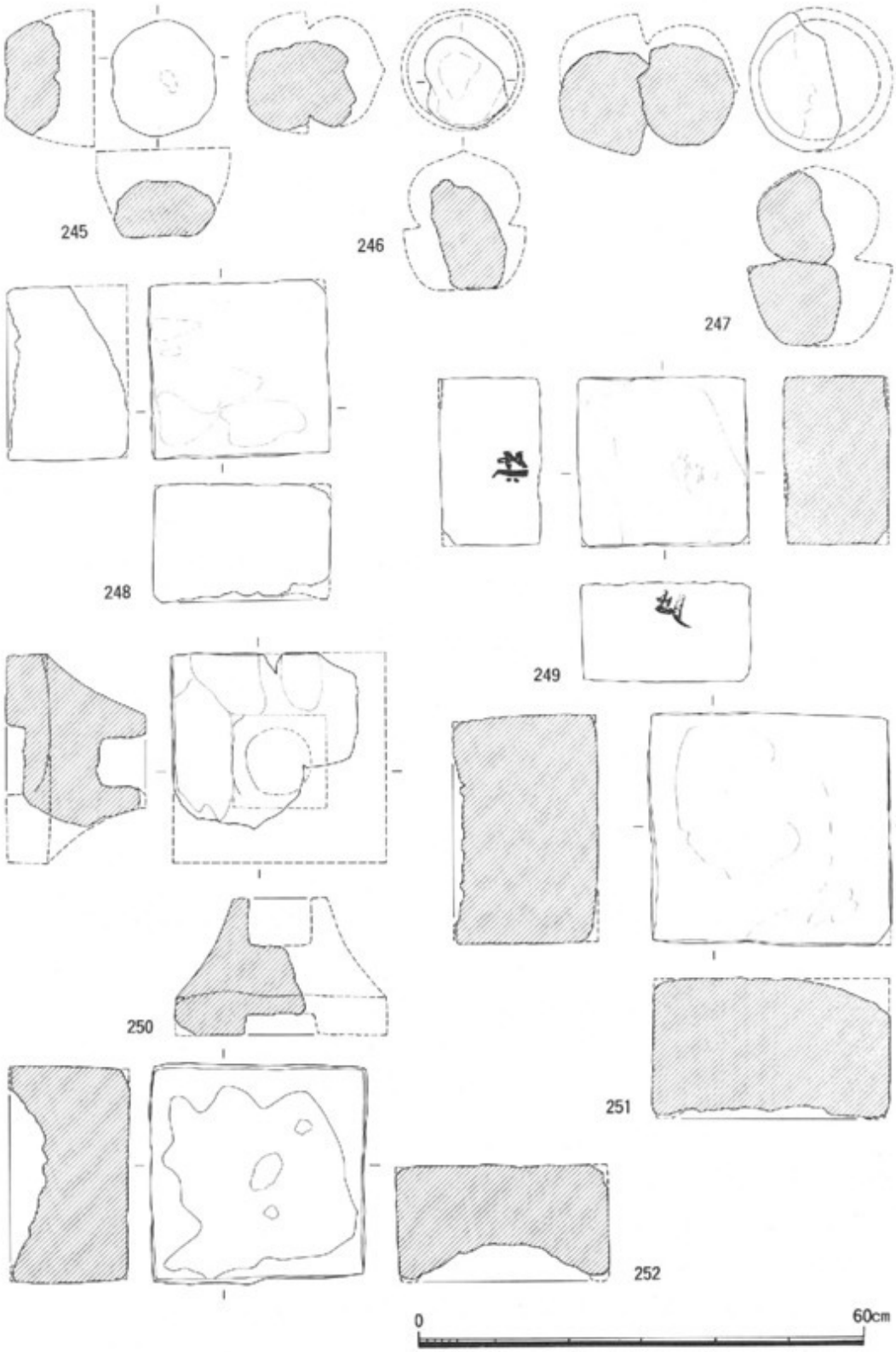
図－37　五輪塔　その１



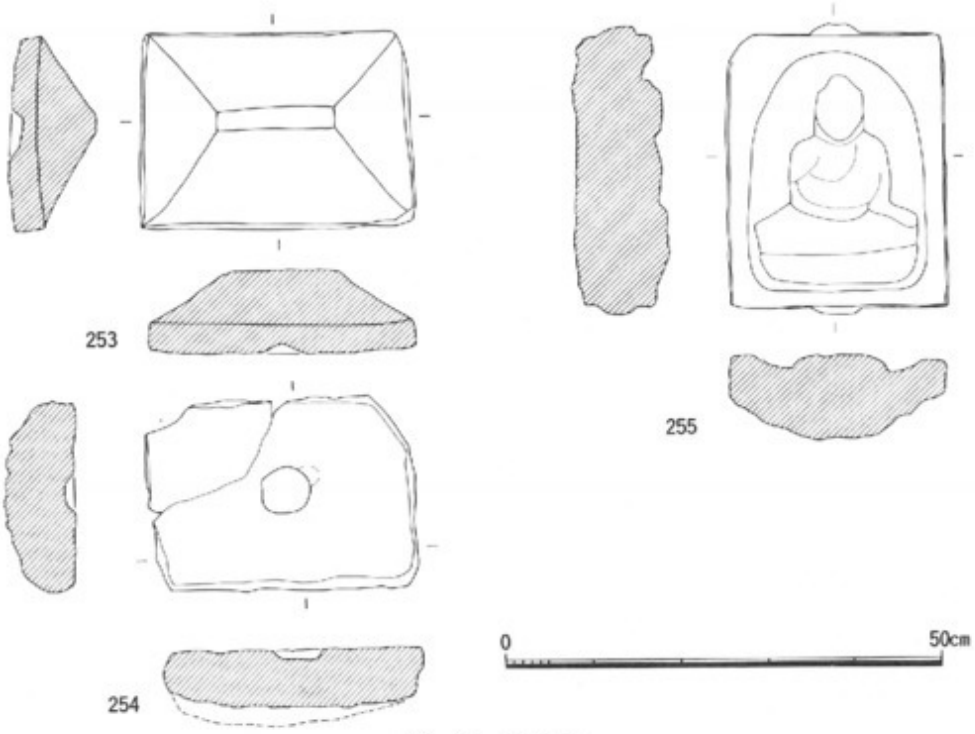
図－38　五輪塔　その２



図－39　五輪塔　その３



図－40　五輪塔　その4



図－41　笠塔婆

がなくどっしりした格調の高さが感じられる。室町時代は、軒に反り四隅を斜線で切る火輪、銘文を刻みやすくするため縦長にした地輪。江戸時代は、つきでた空輪、軒の反り極端な火輪、縦長の地輪、などと言われている。が出土遺物において特徴とする箇所が残存していない為、明確な年代は不明である。石材は全て白灰色凝灰岩製。　（津田）

笠塔婆

笠塔婆が造りはじめられるのは平安時代後期からであるが、近畿では鎌倉時代中期に入ってからとされている。笠塔婆は、はじめは密教系の人々の手によるものが多かったが、やがて浄土、禅、法華に属する人々もこれを迎えて造立し、単調な型式塔であるだけに普遍性をもっていて、追善、逆修の信仰対象として、また下乗、退凡の聖域的表識ともなり、あるいは墳墓の上におかれるしるしとしてたてられるところとなった。笠塔婆の基本形式とする塔形は、板状または方柱状の塔身と笠の２部よりなり、塔身の下端を埋めて建てたものである。図－41は、基礎の上に板状の塔身と笠の３部よりなり、塔身の上下を基礎と笠にはめ込む形式となっている。塔身の正面には阿弥陀如来座像がほり込まれているが、風化しているため印相は、上生印としかわからない。法量は笠（253）、長さ23.1㎝、幅31.55㎝、高さ9.9㎝、塔身（255）、高さ33.7㎝、幅25.45㎝、厚さ10.85㎝、基礎（254）、長さ22.8㎝、幅31.05㎝、高さ（9.25）㎝をはかる。組み立てた高さは50、65㎝となる。基礎の下部は欠失しているが、多分埋込式であると思われる。石材は白灰色花崗岩製。　（津田）

第4章　ま　と　め

今回の調査は、太平寺古墳群の東側の斜面地にあたる場所で多くの遺構と遺物を検出した。時期や性格から主に次の2区分が出来る。Ⅰ期は、古墳時代後期の墓域で、横穴式石室墳1基、横穴墳6基、土坑墓1基、土器棺墓3基、焼土坑2ヶ所を検出した。Ⅱ期は、中世から近世にかけての墓域で、古墓33基、火葬土坑1基である。遺物は、前者が土師器、須恵器、埴輪、金環、かんざし、鉄釘、人骨等があり、後者は凝灰岩製五輪塔、河原石、笠塔婆、瓦、陶磁器、人骨等が出土した。出土量は、コンテナ53箱分である。各遺構の変遷を中心として時期毎に検討を加えていきたい。

Ⅰ期（古墳時代後期）

当期以前の遺構はないが、古墳時代中期末頃の埴輪が少量出土している。この遺物は、当調査区の斜面上方に古墳が存在して転落したものであろう。

横穴式石室墳は、調査区の南端部の急斜面地から検出した。後世の地形変化が甚だしいことが知れる例である。この古墳は、軟弱な花崗岩の岩層を掘削して築造している。同支群の丘陵斜面上方に5基の横穴式石室墳があり、最も平野部に近い古墳である。この古墳の築造時期は、玄室内の出土遺物が中世の時期に利用されほとんどが攪乱されている状況であり明確に出来ない。現位置をとどめていないが、出土遺物を参考にするならば、2時期の須恵器が存在している。古相の須恵器は、この古墳築造した時期にあたり、新相のものは、追葬の供献遺物であろう。羨道及び玄室床面に花崗岩の薄く加工した割石を敷いていた。類似する市域の例として、田辺古墳群8、9号墳[1][1]、玉手山東横穴群A－4、5とB－4、12、18号墳[2]、雁多尾畑古墳群第49支群1、10号墳[3]、また、高井田横穴古墳群[4]にも遺存状態が悪いが数例ある。太平寺古墳群で初例である。割石技術が発達する直前の時期が考えられ、このような古墳例は7世紀初頭以降に多いようである。

横穴古墳は、6基を検出した。大阪府下柏原市域の高井田横穴群、玉手山東横穴群、安福寺横穴群の3群にのみ確認されている特異な形態の古墳である。それぞれ凝灰岩層が基盤であるが、当古墳群は花崗岩層である。また、前3群の横穴とは規模や形態が異なる。市域の生駒山地の東山丘陵に約1500基の古墳が確認されているが[5]、横穴墳が新たに発見される可能性が高く今後の調査に十分留意すべきことと認識しておきたい。

横穴墳6基の内5基から何らかの遺物が出土している。7号墳の羨道入口部に横穴を掘削して埋納している羽釜棺は、同墳とかかわる祭祀あるいは埋葬施設と考えられ、この古墳築造以降の時期を示すものである。6号墳の古相の遺物と同時期かさらに遡る時期が考えられる。8

号墳は、天井の落盤によって盗掘がなく埋葬当時の状況が復元出来る貴重な古墳である。出土遺物の中のかんざしは、当支群の3号墳からも出土しており、被葬者の身分や系譜を知ることができる遺物である。出土状況は、被葬者の脚端部に添えてあり、身体の一部に装着していなかったことが惜しまれる。6号墳と近似した時期が考えられる。9号墳は、玄室内から土器類が出土しなかったが羨道入口部に合口の土器棺が出土した。6号墳の追葬時期と近似した時期であろう。10号墳から出土遺物がないが、11、12号墳から土器、鉄釘が出土しており、掘削途上の未完成横穴でなく既存の横穴群にない究めて狭小な形態の横穴である。成人を埋葬したものであれば、再埋葬や分骨が必要な規模である。時期は、9号墳より新しいと考えられる。

7号墳 ── 8号墳 ── 9号墳

10号墳 ── 11号墳 ── 12号墳

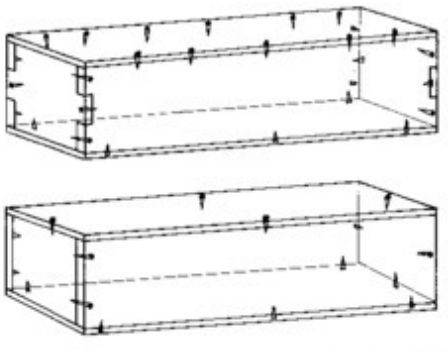
横穴古墳の玄室と羨道との区画は、形態的に分ける事が困難であるが、入口部付近に横方向の区画溝と左右対象に1ヶ又は2ヶのピット穴が存在してこれを接点とした。しかし、この施設は、板材を扉状に使用して玄門あるいは閉塞の為の遺構を兼備えたものであろう。このような施設は、玉手山東横穴群にピットを持つ例[2]や高井田横穴群に溝や羨門にわずかに掘り込みを入れる例[4]が若干存在し、閉塞を目的とした施設と考えられている。

木棺の復元

8号墳の玄室内から保存状態の良好な木棺の痕跡を検出した。鉄釘の表面に木棺の木目が良く遺存していたことから、その木目の観察と出土位置関係から木棺の組合せ方法を1つのパターンとて復元を試みた。

第1棺は、底板上に長短側板を載せさらに天井板を蓋として組合せている。長側板は、底板と同長で、短側板を長側板の間に填め込んでいる。長短側板は、長側板の端部を凹形にほぞ穴を空け、短側板をほぞに組入れている。鉄釘は、底板から長側板の方へ4隅と中央部に1本を打込んでいる。側板の接合は、4隅に長側板の方から上下2本と短側板の方から1本の鉄釘を打ち込んでいる。天井板から側板にほぼ対象に計11本を打つ。合計27本の鉄釘を使用している。

2号棺は1号棺より簡略した木棺[6]である。長短側板の組合せにほぞを入れない。底板から側板に6本を打ち、被葬者の脚部側長側板に2本、頭部側短側板に2本と長側板に1本、長側板中央部に1本を打つ。長短側板は、脚部側は両側上下計4本



図－42　木棺の模式図(上1号棺・下2号棺)

頭部側両側各１本ずつ打っている。天井板は、各辺部の中間付近に１本ずつを側板に向かって打っている。

太平寺古墳群における被葬者集団の動向

太平寺古墳群は、歴史的環境で述べたように生駒山地の西側斜面に位置し、山麓部に拡がる集落遺跡の豪族や氏族の首長層が被葬者ではないかと想定されているが[7]、特定の集落遺跡を見い出すまでには至っていない。

今回の調査で検出した遺構と近年の調査からその性格と変遷について若干の考察を加えてみたい。現在６支群48基の古墳が確認されている古墳群で、平野、大県古墳群が北側に、安堂古墳群が南側に存在している。これらの古墳群は、大県遺跡を中核とした集落遺跡の共同体として集団的且つ前期から後期に至る時期を継続的にとらえこれらを総合して集落と古墳群を対応させることが必要である。

同古墳群の時期は、須恵器出現以降から終末期まで継続する。各支群は、大尾根上とそこから平野部あるいはその反対に派生する小尾根上に存在し、木棺直葬と横穴式石室を内部主体とする古墳毎に分離が出来る。前者は、第２、４支群と後者は、第１、３、５、６支群である。支群によって被葬者の性格や階級の相違がある可能性がある。また、横穴墳と横穴式石室墳の関係も今回の調査事例から同系譜を考えて大過ないかもしれない。

当古墳群の出土遺物の中に鍛冶に関係した鉄滓が出土する古墳が２基存在する。１基は、第３支群２号墳の石室内から出土している[7]。もう１基は、第５支群３号墳の石室床面下層に敷いた炭層中から出土している[8]。大県遺跡を中心とした遺跡群から鍛冶関係の遺構と遺物が密集して検出されているのは近年の調査例[9]から周知のことであり、古墳群との連がりが強い。また、太平寺84－１次調査区から鉄滓を供献した火葬墓[10]が見られ、その被葬者集団が長期間にわたり鍛冶に携わった人物[11]と強い関連性を持つと云える。

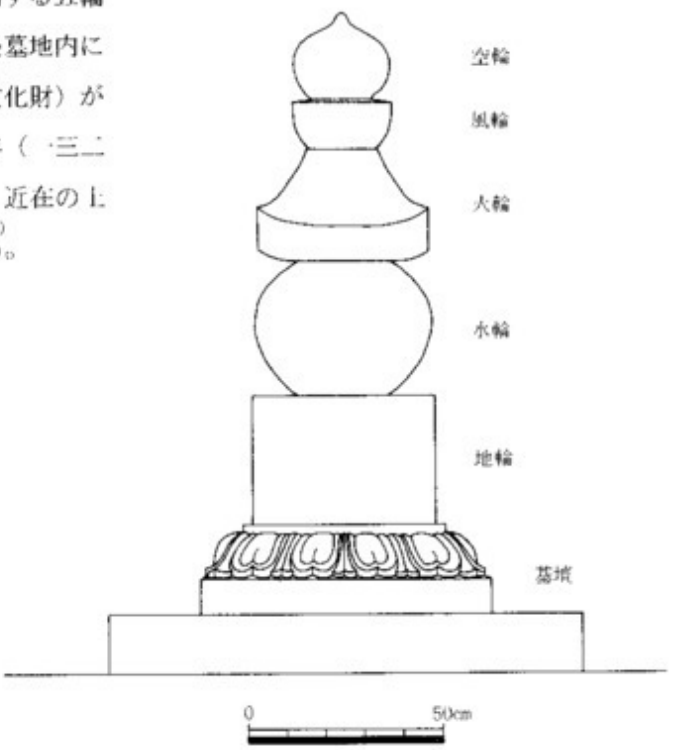
中世以降の墓域

今回の調査区上層から鎌倉時代から近世に継続する火葬墓及び土坑墓等の遺構が多数検出された。現在、当調査区の東側丘陵下方に古墓が存在している。この事は、当調査区の周辺地域に時期を同様にした墓域が拡がる可能性が高い。

出土遺物は、五輪塔、一字一石経、土師質壷、すり鉢、瓦、ミニチュア供献遺物、鉄釘等多種のものがある。当市の発掘調査における初見の遺構と遺物であり、当時期の古環境を復元する貴重な成果である。

当時期の河内地方に布教した宗派の中に念仏宗がある。念仏宗は、平安時代の末頃に比叡山東塔の常行三昧堂の堂僧となって不断念仏を修めた良忍が、後自他融通の念仏を唱えたもので

ある。市域の墓地には戦国時代に属する五輪塔が多く存在しているが、国分東条墓地内に花崗岩製の大五輪塔（大阪府指定文化財）がある。同塔は、銘があり「嘉暦三年（一三二八年）……念仏……」と読みとれ、近在の上豪の墓ではないかと考えられている。(12)



図－43　東条墓地五輪塔（吉井博氏実測図）

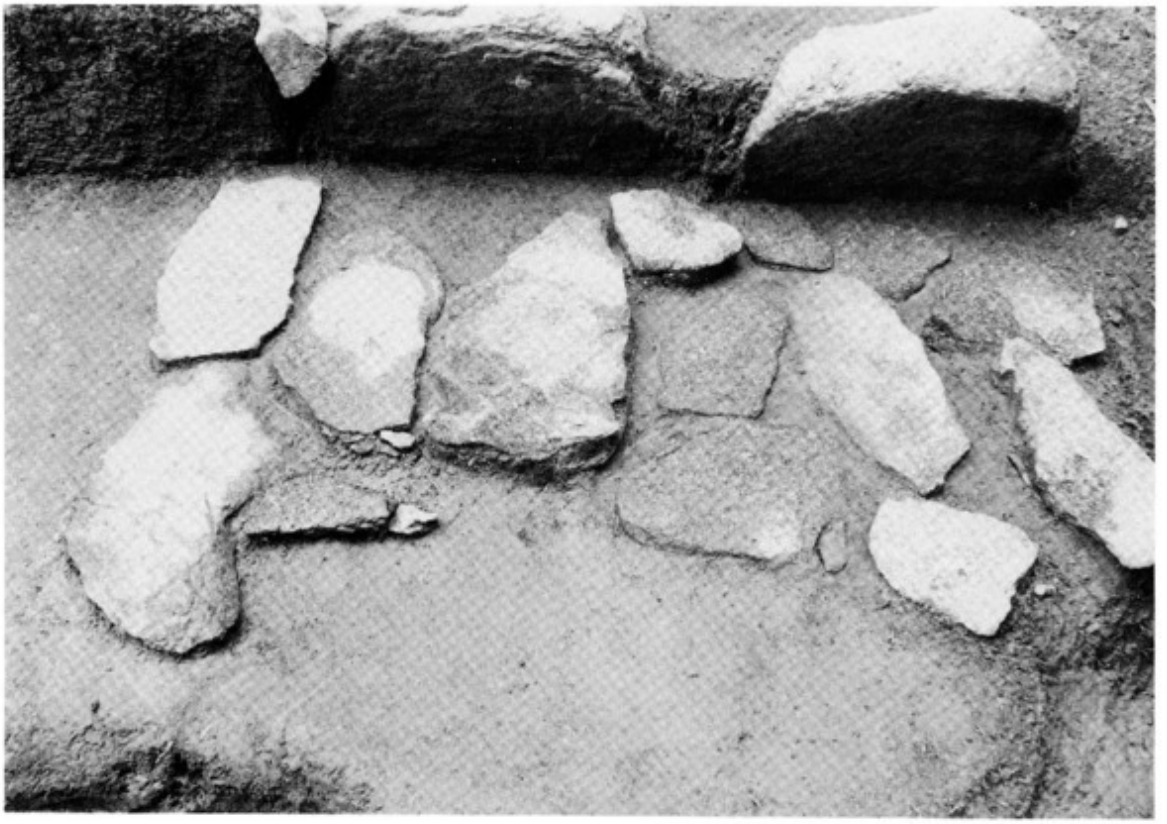
（1）　柏原市教育委員会　「田辺古墳群、墳墓群発掘調査概要」　1987年３月
（2）　大阪府教育委員会　「柏原市玉手山東横穴群発掘調査概報」　1967年３月
（3）　柏原市教育委員会　「平尾山古墳群」－雁多尾畑49支群発掘調査概要報告書－　1989年３月
（4）　柏原市教育委員会　「高井田横穴群II」　1987年３月
（5）　大阪府教育委員会　「平尾山古墳群分布調査概要」　1975年３月
（6）　(1)内に木棺復元案が掲載されている。
（7）　河内考古刊行会　「河内太平寺古墳群」　1979年３月
（8）　柏原市教育委員会　「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報」　1984年３月
（9）　柏原市教育委員会　「大県遺跡」　1988年11月
（10）　柏原市教育委員会　「太平寺、安堂遺跡」　1984年
（11）　拙稿　「韓鍛の卓素はどこに移住していたのか」『韓式系土器研究II』　1989年８月
（12）　澤井浩三　「中世の柏原」『柏原市史』第二巻　1973年３月

図　　版

6号墳

裏込め土層

玄室敷石

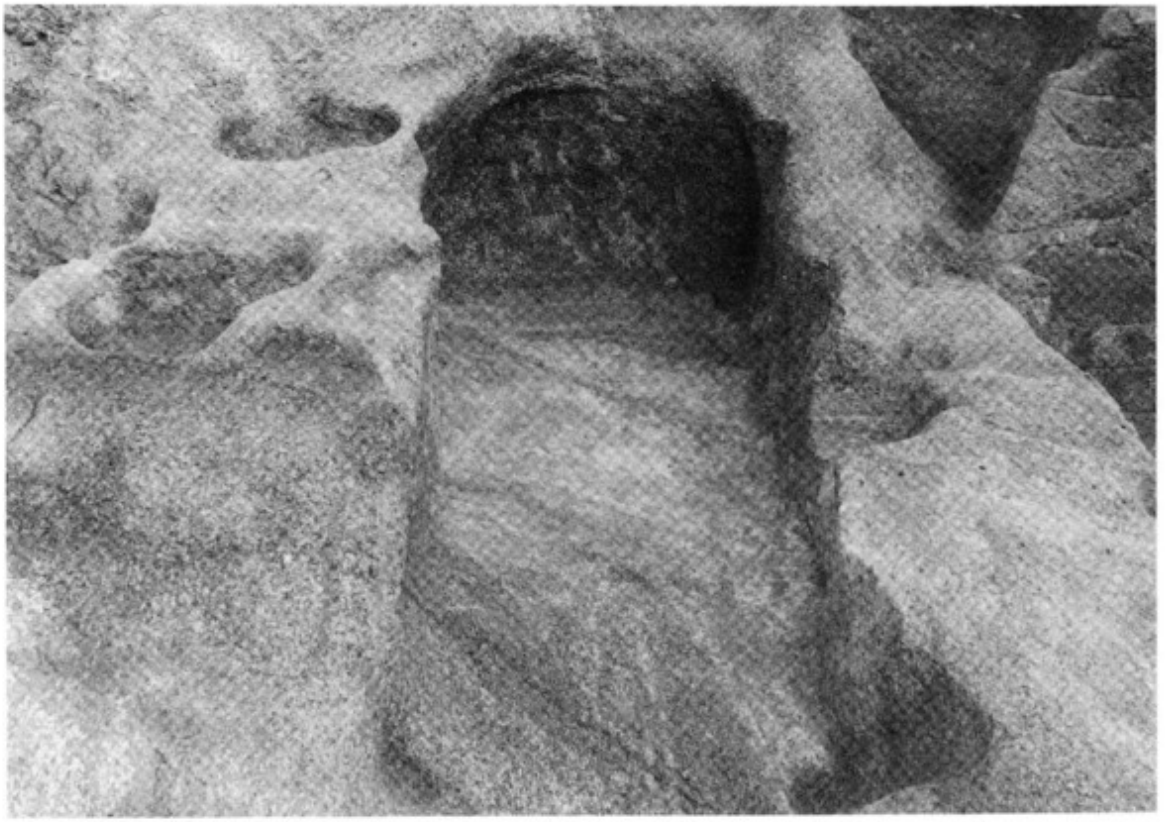


羨道敷石

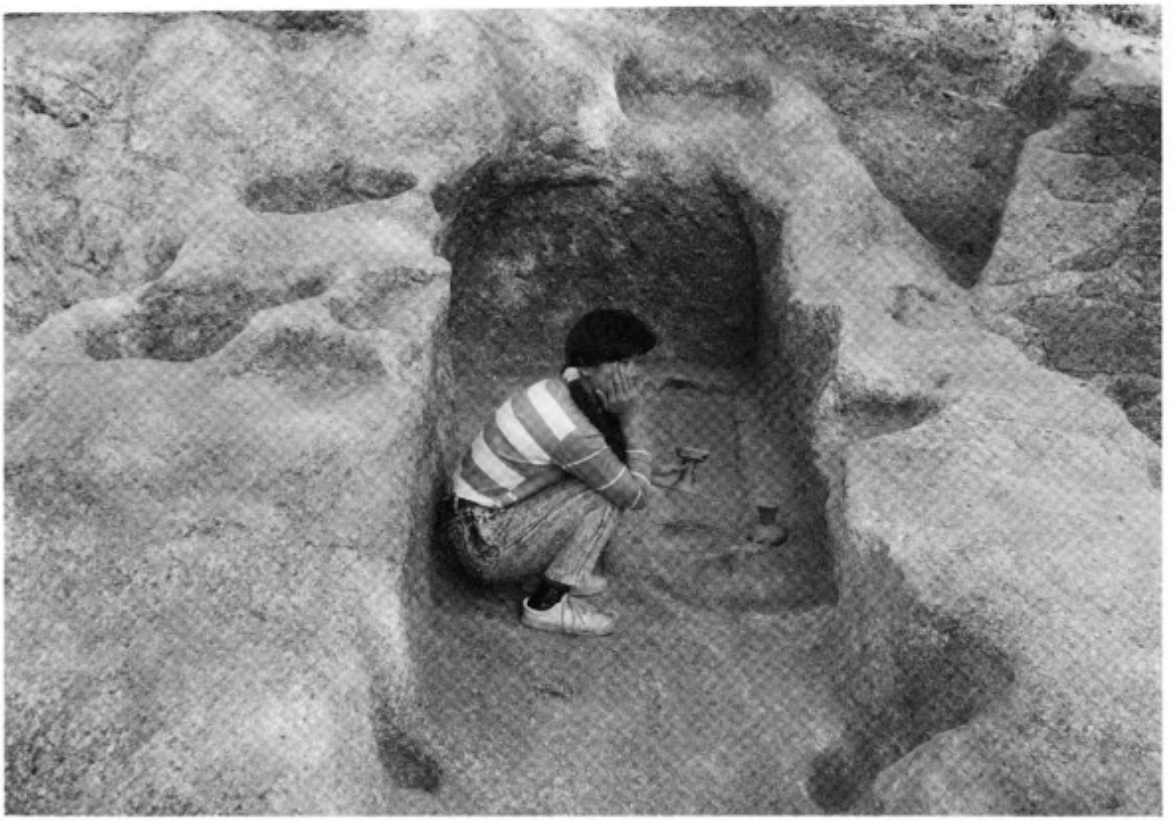
敷石除去後

花崗岩整形と掘方

玄室掘削前



玄室掘削後



遺物取り上げ風景

遺物出土状況

図版六　九号墳

全景

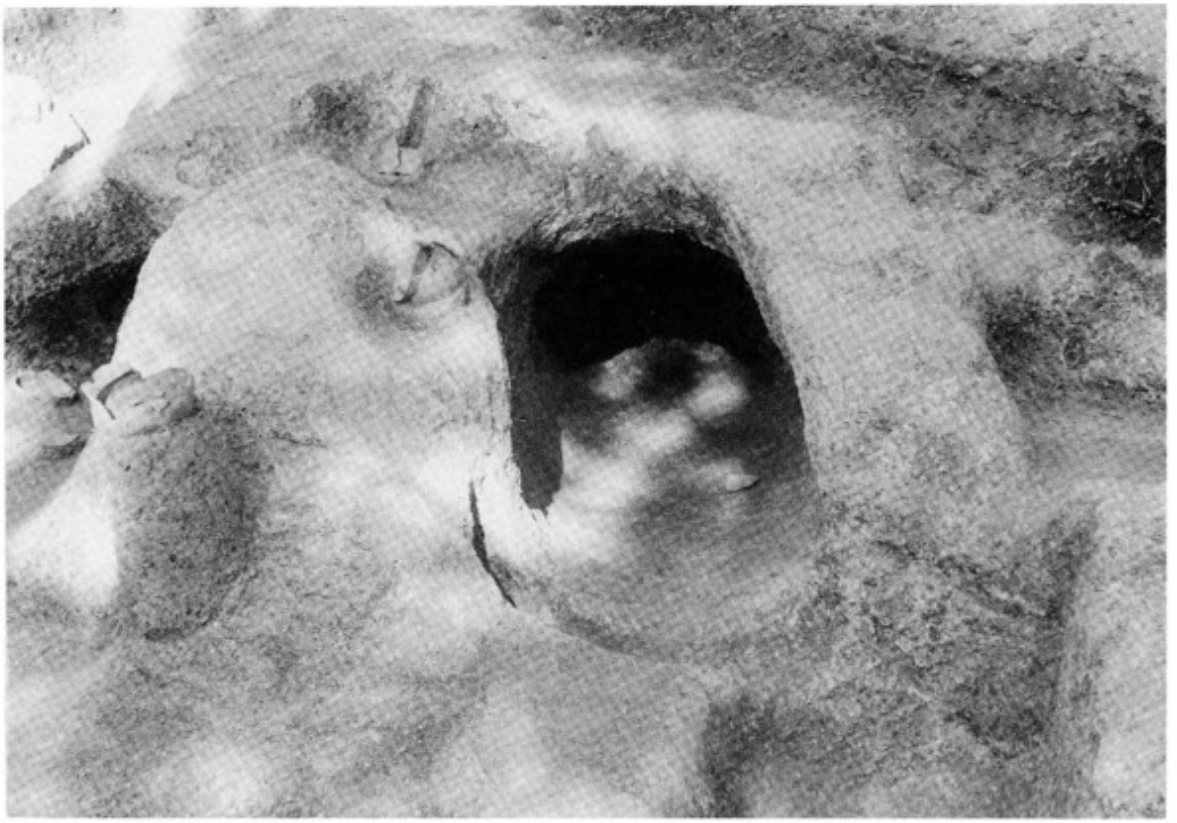
完掘後

鉄釘出土状況

合口供献土器

玄室埋没土層

玄室埋没土層

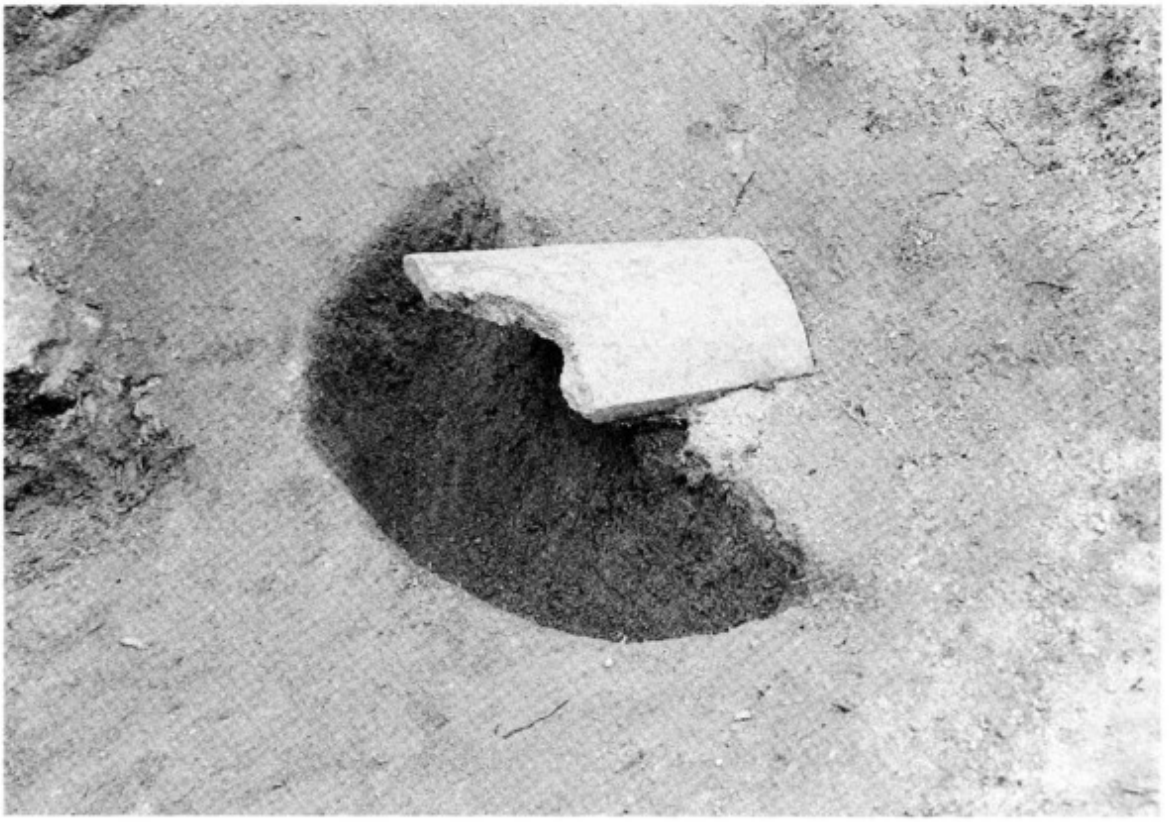


全景

遺物出土状況

全景

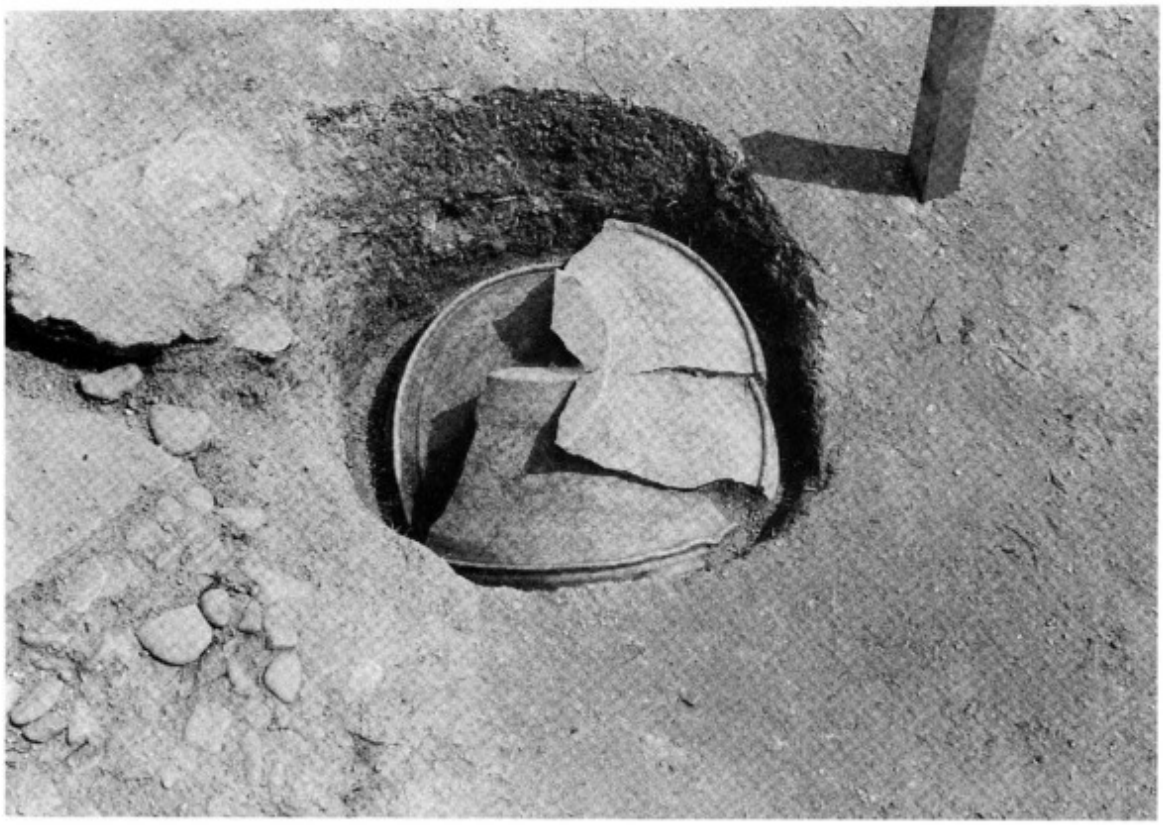
土坑墓1



古墓2

古墓4

図版十二　古墓九、十八



古墓9

古墓18

図版十三　古墓検出状況

2区上層

1区下層

2区上層

2区上層

図版十五　古墓検出状況

2区中層

古墓14、18

図版十六　古墓検出状況

2区下層

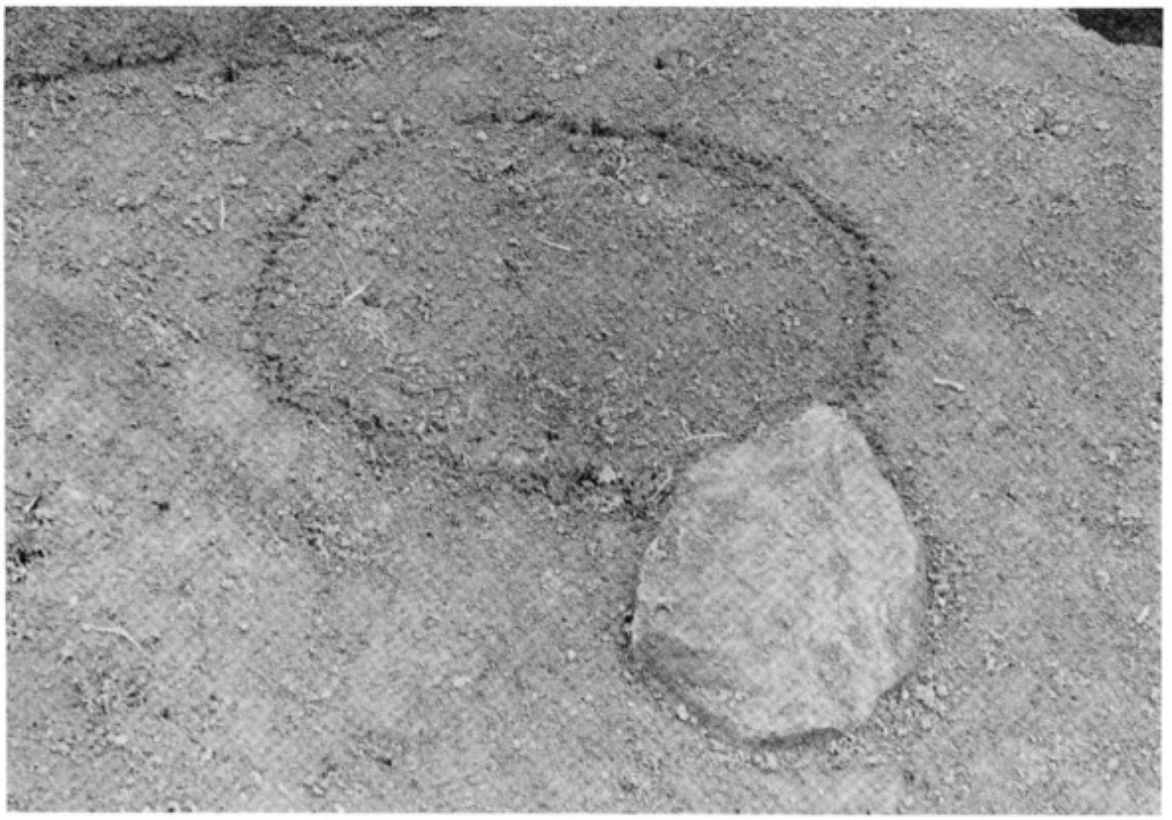
古墓31

図版十七　遺物出土状況

笠塔婆

五輪塔

図版十八　古墓二十六・火葬土坑



古墓26

火葬土坑

15

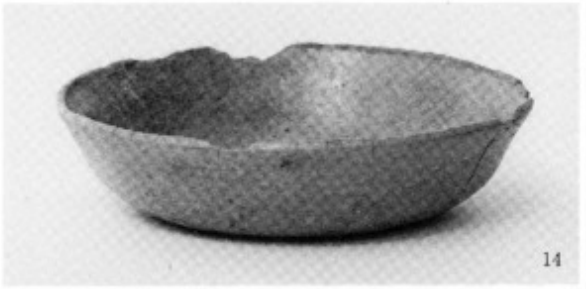
16

2

3

4

7


14

24

17

25

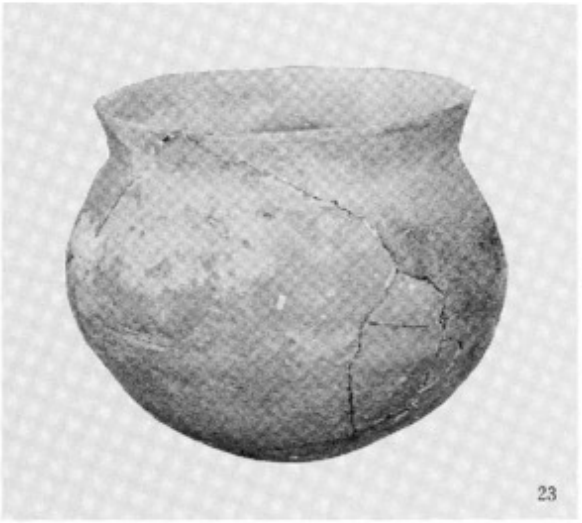
19

12、20

26

図版二十一　出土遺物その三

13


23

97

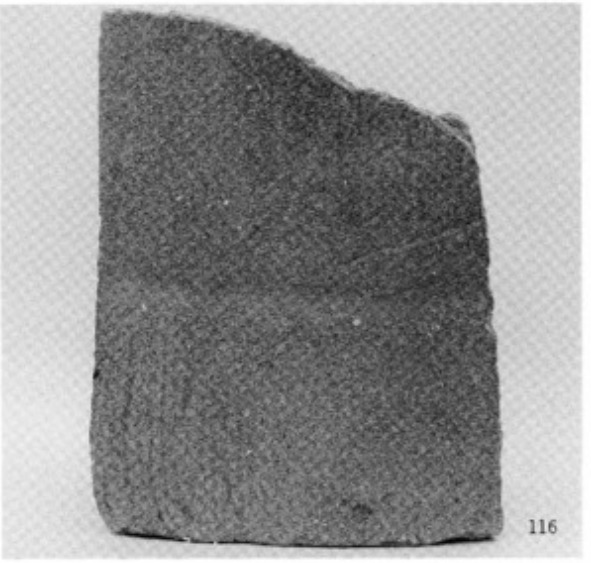
100

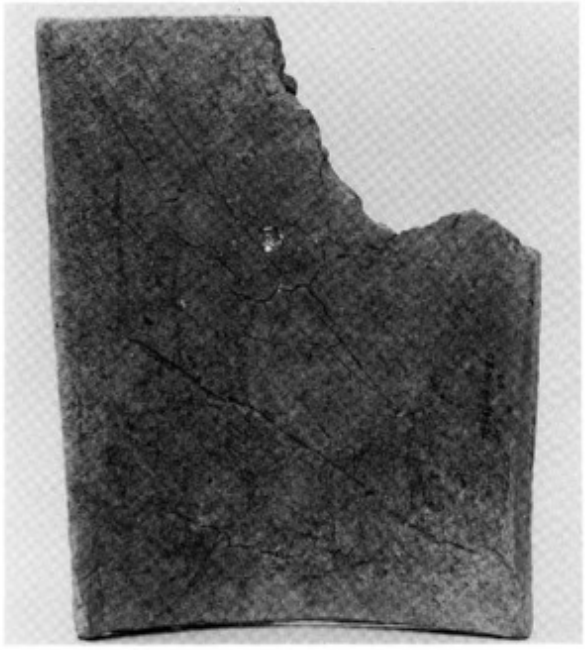
99

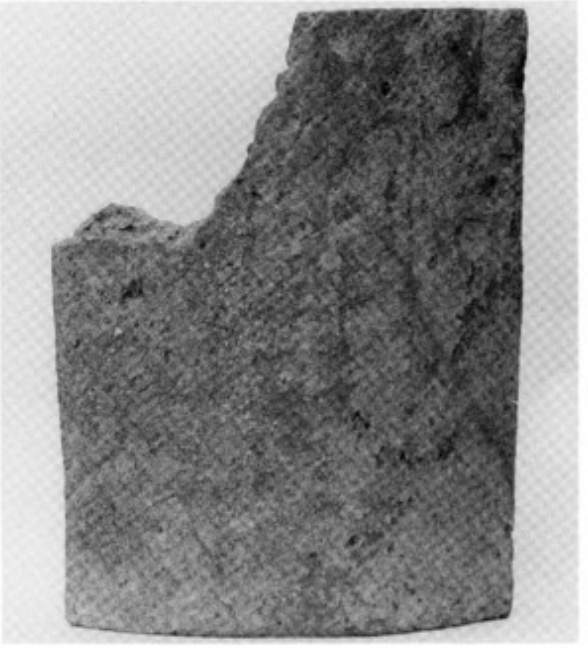
107、108

98

116


116





図版二十三　出土遺物その五

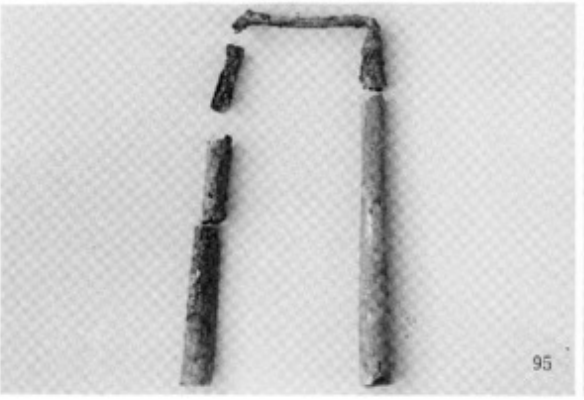
6号墳

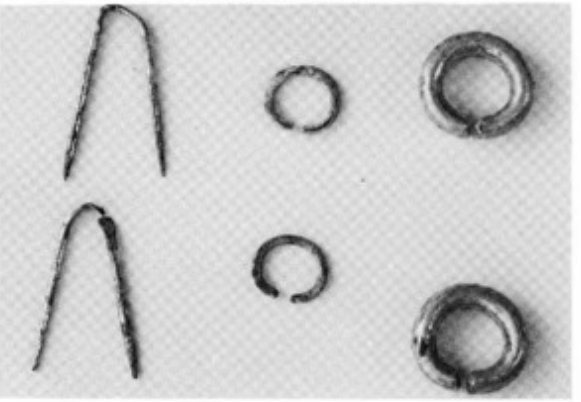
115

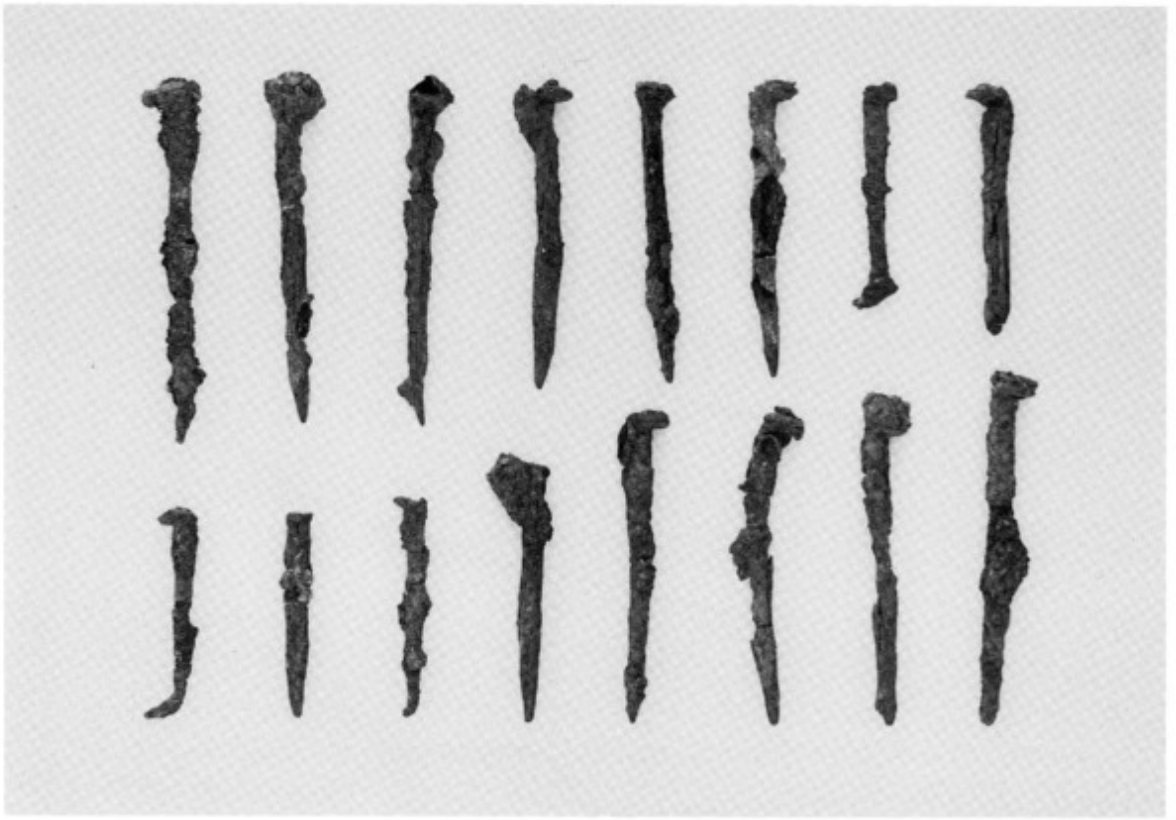
112

113

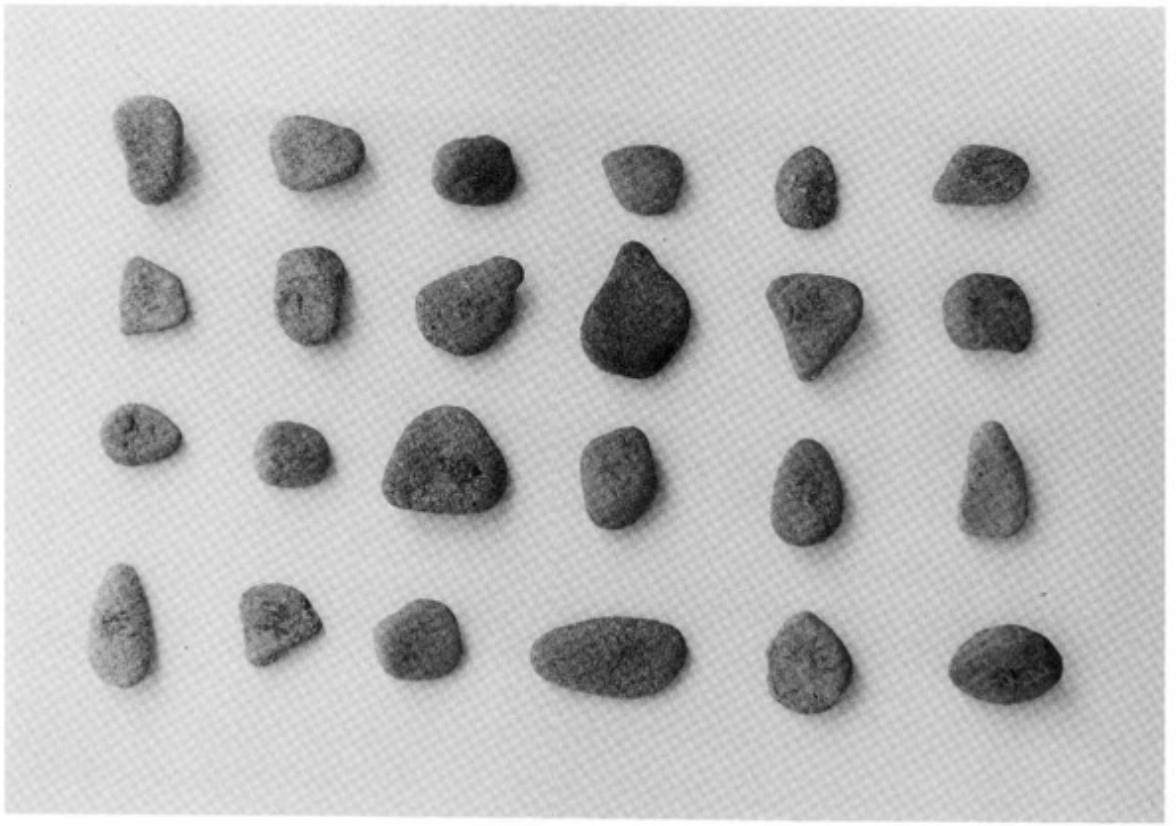
114


95



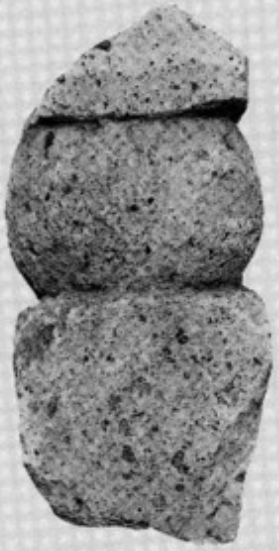


8号墳1号棺鉄釘

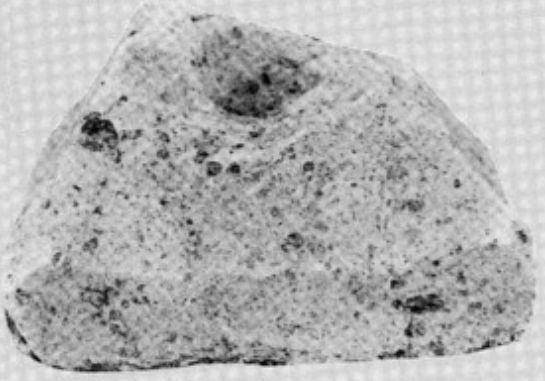


一字一石経

224



227

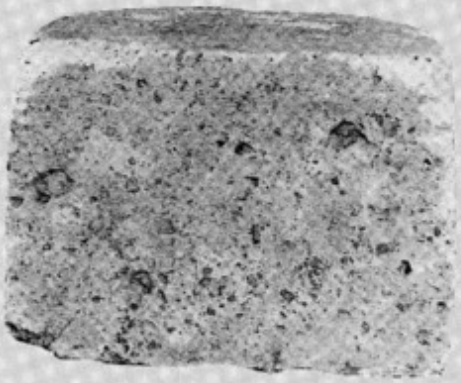


234

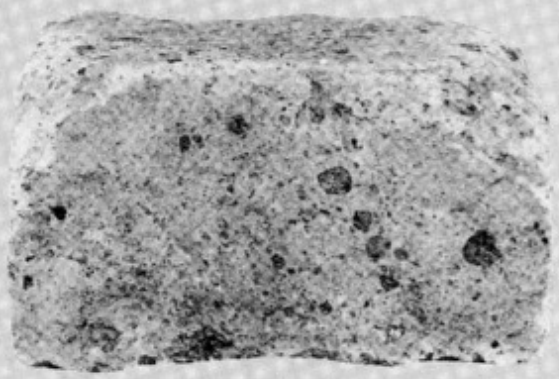
229

228

228



239



252

249

254

平尾山古墳群
－太平寺山手線建設に伴う　その３－
1988年度

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町１番43号
電話　(0729) 72－1501　内5133
発行年月日　平成２年３月31日
印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所